

# モンスターハンター～ 伝説の邂逅～

奇稻田姫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界の各地で語り継がれる『伝説』がある。

その多くを成し遂げた世代は今や『伝説世代』と呼ばれ、後世に語り継がれているのであった。

御伽噺のような物語。

真実を知るものは同じ世代の同士達と……己の記憶のみである。

これはそんな一時代を築いた世代の追憶……。

---

この物語はオリーブドラブ様が手掛けた小説「モンスターハンター〜故郷なきクルセイダー〜」のキャラ募集にて考案しましたキャラ『ヤクモ・ミナシノ』を中心に描く三  
次創作になります。

原作者様からは許可を頂いております。

←←←

原作：オリーブドラブ様

「モンスターハンター〜故郷なきクルセイダー〜」

時系列的には、原作の「追憶の百竜夜行」から6年後の世界（主人公のヤクモは24歳）を舞台とします。

原作を読んでいないから内容が分からないと言うのはないようにしていくつもりです。

原作を知っていればさらに深く、みたいな感じで行きたいですね。

物語の都合上実際のゲームでは無いようなアクションを入れる場合もありますが、それは御了承ください。

それに伴ってではないですが、武器・防具の性能は使用者に依存しており、ほとんどの場合ゲームの性能とイコールではありません。

基本不定期の更新なので、更新間隔はまちまちです

ある時は書きますが、基本連続性は無いのでそのつもりで↑  
連続性のあるものは『章』で分けて行きます。

NEW※時系列が結構バラバラなのでリンク機能使って飛べるようにしました。

『水☒ 八雲の章』と『ヤクモの新人育成譚』の2章をリンクで繋げました。

順番は

『ヤクモの新人教育譚』

←

『水☒ 八雲の章』

の順に読んでいただければリンクと合わせて正式な時系列で読み進めることができます(2023/2/6)

※『4. 霊峰VS円卓(予告編?)』にて各キャラクターの武器が確定(2022/1/29あとがき追記)

※『4. 霊峰VS円卓(予告編?)』にて、追記。(2022/4/20)

※『2. 後編』を更新しました(2022/5/2追記)

※『5. 追憶の巨戦龍 1章①』(2022/8/24追記)

NEW※『2. EX』(2023/2/6追記)

よかつたら感想とかの願います(懇願)

読者参加のキャラ募集も行っているので是非どうぞ

今のところ期限は設けていません

↓<https://syosetu.org/?model=kappo|view&kind=304439&uid=156950>

# 目次

再開

1. 鬼と鬼の再開 | 1

水☒ 八雲の章

2. 前編 | 27

2. 中編 | 45

2. 後編 | 64

2. EX | 85

ヤクモの新人育成譚

3. ヤクモ・ミナシノの新人教育 | 前

編 | 116

3 ヤクモ・ミナシノの新人教育 | 中

編 | 130

3. ヤクモ・ミナシノの新人教育 | 後

編 | 151

円卓

4. 霊峰 VS 円卓 (予告編?)

178

追憶の巨戟龍

5 追憶の巨戟龍① | 188

5 追憶の巨戟龍② | 199

5 追憶の巨戟龍③ | 220

5 追憶の巨戟龍④ | 229

5 追憶の巨戟龍⑤ | 240

## 再開

### 1. 鬼と鬼の再開

ドンドルマ近郊砂漠地帯。

その見渡す限り砂に覆われた地帯全域に空気をも震撼させるような特大の咆哮が響き渡った。

ギヤアオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

その衝撃波によって近くを泳いでいた数匹のガレオスがたまらず地上に飛び出してくる。

当の本人たちが何が起きたかすら理解出来ずに右往左往している中、咆哮の主はゆったりとした動作で体の向きを変えてとある一点に視線を集中させる。

グレーというより黄土色に近い皮膚は堅牢な鎧がごとく全身を覆い、2本の足に巨大

な翼。

極めつけは頭部に大きくねじれるように伸びる2本の巨大な角が印象的な飛竜種に分類される大型モンスター、【角竜】ディアブロス。

既にガレオス達は自分よりも強大なモンスターの存在を察知してどこかへ身を隠してしまっていた。

しかし、そこで1点不審なことに気づくことが出来る。

その自慢の角が2本とも折れてしまっているということだ。

もちろん自然に折れる可能性も大いにある、が、今回はそうでは無い。

サクツ……サクツ……。

この砂漠地帯にディアブロス以外の足音が響く。

フィールドは広いが邪魔する輩のいなくなつた砂原は時折吹く熱風の音以外思いのほか閑散としていてその足音は何故かよく響いた。

重量感の感じられない軽い足音は女性が纏う『依巫・祈』よりまし いのり装備の緋袴ひばかまに合わせて規則



正しい音を奏でている。

「追い詰めました。【角竜】ディアブロス」

サラリとした黒髪は後ろで綺麗に纏められており静かにそして鋭く光る鋭利な視線は既に角竜を収めていた。

そして挑発でもするかのように肩に乗せて担いできた『角』を見せるようにしてから自分の前に投げる。

それだけでもディアブロスの頭に血が上っていく様子が雰囲気を感じ取れた。

「決着の刻が来たようです。日照り散陽、熱波の舞台。貴方の意地と私の刃。雌雄を決するのはどちらでありましょうか。いぎ、尋常に」

そう言いながら背中に背負う武器をゆっくりと外し、左腰辺りで構えた。

左手で鞘を握り、右手を柄に軽く添える。

それが居合の構え。

ディアブロスも向こうで準備万端と言わんばかりに突進の準備をしている。

最後の決戦に合図は不要。

グンと力強く地面を踏み込んだディアブロスが突進を開始する。

それは自分の前に立ちはだかる敵を、自分の角をへし折った狩人を、そして自身をここまで追い詰めたハンターを真正面から討ち滅ぼさんとするような。

そんな巨大なプレッシャーにもものともせず女性は携えた武器、太刀『たまのをの絶刀の斬振』に手をかけてゆつくりと瞳を閉じて神経を研ぎ澄ます。

ディアブロスの突進のスピードと破壊力は凄まじい。

あんな装甲筋肉の塊のような巨体が猛スピードで衝突してくるとしたら当然まともに受けたらいくら装備を着ていようが関係ないだろう。

ましてや彼女が纏う依巫・祈装備のようにほぼ布に近い素材が大半を占めるものであれば尚更。

一撃でお陀仏になりかねない。

それでも彼女にとって居合を待つと決めた以上既に後戻りは出来ないでいた。

外せば終わり。

しかし、彼女の口からは不安の言葉は一言たりとも出ることは無かった。

「手傷を負い、追い詰められてもなお真つ向から。真正面から私を討とうとするのですね。その誇りと勇姿、しかとこの目に刻みつけました。良き好敵手、『角竜』ディアブロス。お命、頂戴します！」

相手が真つ向から来るのであれば自分も正面から切り伏せる。

彼女にしては珍しい立ち回りといえそうなのだが、今ここには一人しかいないゆえいつものような立ち回りは出来ないに等しいのだ。

激しい地響きと共にディアブロスが猛スピードで迫る、同時にカツと目を見開いた彼女も体勢を低くして地面を蹴った。

ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ  
「流れる刃流水の如し！居合抜刀……………」

両者が真正面から急接近し、そして『キン！』という金属音を残して一瞬ですれ違う。居合抜刀斬りによって水平に振り抜いた彼女は俯くようにしながら片膝をつき、ディアブロスも突進の勢いを殺すために両足でブレーキをかけていた。

「……………気刃斬り」

とはいえディアブロスの方は何事も無かったかのように威嚇をしながら振り返り再度突進の準備をし始めている。

しかし女性の方とは言うのと、静かに一言呟くように言葉を漏らしながら後方を確認することなく刃についた肉片を血とともに振り払っていた。

そして鮮やかな刀捌きでスルスルと腰の鞘へゆっくりと戻していく。

「……………『えしやじよつり会者定離』。生きとし生ける【モノ】に訪れる無常の別れ。餞別は彼岸を渡る片道切符。……………どうか安らかに、お眠りください。南無

……」

パチン。

その言葉と共に太刀が綺麗に鞘の中へ収まった。  
直後。

ヒュオツ！。

バシツ！！

女性の背後で風切り音が鳴り響く。

同時にディアブロスの断末魔が快晴の空へ消え、ドスンと巨体が地面へ倒れ伏す音が木霊した。

彼女の最後の一撃によってディアブロスの息を繋いでいた最後の糸がプツンと事切れる。

居合抜刀気刃斬り。

太刀が誇る見切り技の中で納刀した状態から繰り出すことが出来る抜刀居合斬りで、タイミングよく放てば攻撃の間に来る僅かな隙間へ身体を潜り込ませて回避と同時に相手にダメージを与えられる技である。

研ぎ澄まされた刃は流れるように相手の攻撃を潜り抜け、的確に弱点へヒットする必殺の一撃。

それほどまでに彼女は一般に言われる『見切り斬り』の力を昇華させていた。

「……………ふう。ようやく倒せました。さすがに1人では苦戦も強いられますか……………熱つ……………袴を着てても膝が焼けてしまうとは、砂漠、恐るべしですね」

ゆつくりと立ち上がり、膝に付いた砂を払い落としながらポーチの中身をチェックしてアイテム類の使用した個数を確認していく。

「閃光玉が4個……………シビレ罨に落とす穴。回復薬グレートを何個使いましたね。今回は1人でしたので粉塵類は使いませんでしたか。ああ、そうだ、角角。せつかく折りましたのでありがたく使わせて頂きましょう」

その後、1度ディアブロスに向かって手を合わせてから素材の解体を行い、使えそうな物だけを選別してポーチへ詰め込んだ。

「さて、こちらは片付きましたが……………もう1頭の方は大丈夫でしょうか」

クーラードリンクを飲み終えて、再度ディアブロスの亡骸に向かって手を合わせてからゆつくりとその場を後にした。

彼女の名前はヤクモ・ミナシノ。

偶然が重なったことで集合し、数々の伝説を打ち立ててきたいわゆる【伝説世代】の一角を担う太刀使いの女性であつた。

---

ドンドルマ大衆酒場。

ついでにこの大都市ドンドルマにおける近郊地帯のモンスター出現情報や討伐依頼等のハンター御用達になっているこの場所に、本日はとある男性が1人ふらりと現れる。

見たところ20代前半と見える青年は防具でがっちり固めており背中にはハンターらしく武器を背負っていた。

纏う装備はこの辺り、つまりドンドルマ近郊ではまずあまり見かけることが無いような装備故に誰も彼の事を好機の目で見ると見るような輩は居なかった。

《ゴシヤ・S》装備と呼ばれる装備はその全身の特徴から一言で言い表すのであれば『青鬼』であろう。

ドンドルマから遠く遠方の地である『カムラの里』近郊の氷雪地帯でよく出現報告が相次いでいる【雪鬼獣】ゴシヤハギの素材を主として使用されているため、全体的に寒色で統一されているのが特徴だ。

あとはメイルの肩部に揺れる白銀の毛皮と鬼のような形相をしたブルーのヘルムだろうか。

武器は盾チャージャアックス 斧。

装備同様【雪鬼獣】ゴシヤハギの素材を使用した盾斧『ゴシヤガガシヤ』。【雪鬼獣】武器派生の最末端に位置するその武器は一撃必殺の榴弾ピン爆発に、凍えるような氷属性が特徴的な武器だった。

男はカタンとカウンター席に座ると麦酒ビールを注文し、はあと大きなため息を漏らしてから頬杖をつきだした。

それから運ばれてきた麦酒を受け取ると、カウンターの向こうでせつせとグラスを拭いていた女性に向かって探し人がいるんだけどと話を切り出した。

「なあ、知らないか？ここにすげ腕の立つ太刀使いがいるって聞いたんだけど、そいつどこ？あー、そうあれあれ、『伝説世代』とかなんとかわかれてるって言う」

男の突飛も無い一言に一瞬だけ目を見開いた女性であったが、すぐに理由を察知してにこやかな笑顔に戻した。

「あ、もしかして依頼ですか？」

「え？ああ、いやそういう訳じゃ……………」

「それならそうと早く言ってくださればいいのに。そろそろ訓練クエストから帰還予定ですのでその時に直接頼むとよろしいですよ」

「いやだから……………って、訓練クエスト!？」

最初の突飛な一言に続いていきなり驚いたように声を出したかと思うとカウンターをバンと叩いて勢いよく立ち上がった彼の元で大衆酒場内の視線が一気に集まる。

その視線に気づいたのか男はほんとー度咳払いをしてから席に座り直した。

それからずいっとカウンターから身を乗り出すと声のポリウムを絞りながら質問を投げかける。

「……………ちよ、ちよつと!?あの『伝説世代』がなんで訓練クエストなんかやってんの!？」



え、もしかして1から自分を鍛え直します!とか言ったの!?言っちゃったのか!?  
.....言いかねないけど」

「はい?」

「こつちの話。なんでもない。で?文字通り1から鍛え直し始めちゃったわけ?そいつ」

「い、いえ、そういう訳ではなく。恐らくお探しの方は「ヤクモ・ミナシノ」という人だ  
と思うんですけど。今はこのドンドルマの新人教育のために教官職に就いていただい  
ているのです。まあ、あの方の訓練クエストは少し.....と言うかかなりハードなも  
のだとは思いますが、弟子入志願であれば頑張ってください」

「いや俺は違うよちよつとそいつに会いたいと思っただけだから」

「ヤクモさんにですか?それはまた珍しいですね。防衛戦か何かの救援要請ですか?」  
「違う」

「であればクエストのパーティの依頼ですか?」

「それもNo」

「あ、もしかして自分の代わりに.....とか?」

「.....なんでこうクエスト絡みしか出てこないんだよ。まあいいや、ここで待つて  
れば来るんだろ?じゃあ待つてる。あ、それと麦酒コウレイもう一杯」

「あ、はい。かしこまりました」

2杯目の麦酒を待ちながらふうと物思いに耽つてしていると大衆酒場の入口の扉がギイツと押し開けられる音が耳に飛び込んでくる。

背後から聞こえるその音に青年はまた客の追加かなんて思いながら聞いていると、聞き覚えのあると言うか久しぶりに聞く声が飛び込んできた。

「ヤクモ・ミナシノ、ただいま戻りました」

青年は思わず椅子から転げ落ちそうになった。

◇？

ガタン！

クエスト精算のために訪れたドンドルマ中心街の大衆酒場へ足を運んだ私だったが、入った途端に何故かいきなり椅子から転げ落ちそうになったカウンター席の青年に視線が向いた。

「ん？」

とりあえず気にはなつたがまずはクエストの精算と思い私は酒場で盛り上がっているお客様から劳いの言葉を貰いながらクエストを受注したカウンター奥の女性（受付嬢）のところまで歩く。

彼女はちようど例の青年に麦酒を渡してから私の方へやってきた。

「お疲れ様ですヤクモさん」

「はい。お疲れ様です。本日の訓練クエスト終了しました。ディアブロス二頭狩猟にて1頭討伐、1頭は捕獲してまいりました。後ほど確認をお願い致します」

「はい。今確認しますね……………」

そういうと彼女はカウンター奥の通話機を取って2、3言確認を取るとすぐに戻ってくる。

「確認取れました。報酬はいつもの場所に入れておきましたのでご確認ください」

「ありがとうございます。それではまたお願いします。私はこれで」

そう言つて外で待つている自分の教え子3人の元へ戻ろうと踵を返そうとしたそんな時。

「あ、そういえば……………あちらの方がヤクモさんにお会いしたいと」

「あちらの方、ですか？」

頭に疑問符を浮かべながら受付嬢の指さす方を見ると、先程椅子から落ちそうになっていた青年がバツが悪そうに苦笑いを浮かべて「よ、よう……」と軽く手を上げていた。

先程は背後からだつたため顔までちゃんと見ることは叶わなかったが……………見覚えのあるその顔に一瞬にして顔が紅潮してしまうのがわかった。

「ド、ドド、ドラコさん!?!どうしてここにいますか!?!」

私は咄嗟のことで自分から質問を投げかけたにもかかわらず、その答えを待たずに大衆酒場から勢いよく飛び出した。

………で、数秒後勢いよく戻ってきた。

◇？

夜も深くなり始め賑やかだった大衆酒場にも徐々に静寂が近づいてきていた。

揺れるランプの炎に照らされながら酒場の一角で2人のハンターは思い出話に花を

咲かせていた。

「ぷはあくうまつ！ やつぱこの麦酒！ すぐえ美味つ!!」

「それはそうですよ。なにせここの名物ですから。にしても驚きましたよ。来るなら来るって事前に言っておいてください。ドラコさん。そもそも籍入れたばかりだと言うのに良いのですか？ こんなところで」

『ドラコ』と呼ばれた先の青年は小タル型のジョッキを豪快に煽ってからダン！ とテーブルの上を下ろす。

彼もまたヤクモ同様「伝説世代」と呼ばれる世代の一角を担っているほどの実力者に他ならない。

つまみに出しておいたフィッシュ&チップスを口に放り込みながら問の答えをドラコが述べる。

「まあ、正直に言えば……………良くはねえわな。帰ったら角生えてるかもしんねえ。ゴシヤハギみたいな顔してたらどうすつかな……………」

「はあ……………」

両手の人差し指を立てて鬼のジェスチャーをとるドラコにたいしてヤクモは片手で頭を抱えながらため息をついた。

「まあまあお前が気にするところじゃねえよ。俺はただ近くに来たからこの街に寄った

「ただだし、そもそもここにお前が居座ってることも全然知らなかった」

「そうだったのですか」

「街に入ってお前の名前を小耳に挟んだから寄つただけだ。アレ撃退したのは聞いてるけど、ここを拠点にしてるとは思ってたんだよ」

そう言つて再び小魚を口の中にほうり込むドラコ。

「なんでも、ヤクモはここで教官してんだってな」

「よくご存知で」

「さつき受付嬢あの子から聞いた」

「ああ、なるほど」

「で、今日訓練クエスト行つてたんだろ？」

「はい、そうですが……………それが何か？」

そこまで言うと、ドラコが頬杖をついてジト目になった。

「……………訓練クエストでディアブロス2頭とか、俺聞いたことねえんだけど」

至極もつとも。

「それは、まあ、私が担当している子達しか行っていませんので」

「一応聞いておくけどさ、卒業試験とかそのレベルのヤツらの、だよな？」

「いえ、だいたい中級レベルのクエストとして選びました」

「お前……………意外と鬼か」

「そんなことありません。私が教えたことを全て実践すれば難なくこなせるレベルです。現に教え子<sup>あの子</sup>達はやり遂げていますし。まあ、とは言え流石に同じエリアに2頭重なつてしまった時は崩壊寸前になってしまったので仕方なく片方は私が相手をしました」

「それは『やり遂げた』うちに入ってねえよ。……………崩壊寸前つて可哀想に。せめて1頭にしてやればよかったじゃねえか」

「……………確かに、そうですね。考えておきます」

顎に手を当てて少し考えをまとめるヤクモを見ながらドラコがため息をついた。

「まあそれはいいや。そんで？ここに残ってるのはお前1人？」

「と言いますと？」

「他の2人は？アイツらもここを拠点に？」

その言葉を聞いてヤクモは少し間を置いてから話し出す。

「……………ああ、アカシさんとレマさんですか。いえ、あのお二方はあの後しばらくしてから旅立たれました。今頃どこで何をしているか……………」

「そっか、あいつらにも久々に会えるかと思ったんだけど……………それはまたの機会



「につてか」

「ですね。申し訳ありませんが」

「謝ることは無いさ。仕方ない」

はい、と短く返してヤクモがフルーツジュースのグラスに口をつけた。

「……それはそうと、ドラコさん聞きましたよ、すごいじゃないですか。体長400m超えのモンスターへの迎撃に成功したと。まだ面と向かって言えていませんでしたね。おめでとうございます」

「ん？ああ、あれか。そんな褒められたものじゃねえよ。あれこそ崩壊寸前だったからな。ギリギリ首の皮一枚で凌ぎきったって感じだったし。マジであれば……」

……流石に死ぬかと思った」

口元をひくつかせながら視線を逸らすドラコの姿にふと笑みを零した。

「おい笑い事じゃないぜ？自分の墓石はどんなデザインにしようか考えてたくらい切羽詰まっていたんだからな！無理だぞまたあれやれって言われても」

「でも、そこそこ余裕があるじゃないですか」

「はあく……お前にはわかんねえんだよ……あのデカさ間近で見てもろつて、腰抜かすぞ。攻撃してんのにダメージが入ってるかどうか全然わかんねえんだから」

「その気持ちはすごく分かります。……………ドラコさんが遭遇した古龍の名前はなんでしたっけ？」

「ああ、ダラ・アマデユラって言ってたっけな、確か。別名【蛇王龍】だっけさ。マジでヘビのどかいヤツって感じ。戸愚呂巻いてさ」

両手を広げてそのモンスターの大きさをアピールするドラコ。

「……………あ、私蛇はNGですのでまた現れたらすぐにドラコさん呼びますね」

「待った、それはやめて。せめて一緒に戦ってくれよ!？」

「いや私蛇だけはどうも……………」

「……………<sup>ヘルプ</sup>救援来ても絶対に蹴ってやるからそんな依頼!」

ため息混じりにジト目を向けるドラコから視線を逸らしつつ私も小魚を口に放り込む。

「そういやそつちの方はなんだっけ?なんか街の方も火事が多発して大変だったって聞いてんだけど」

ドラコの言葉でああ、と答えながら当時の状況を振り返る。

「そうですね。あの時は大変でした。特に火薬庫に残されてた重油のような液体が静電気や衝撃で発火して……………。あ、私達がお相手した古龍はその後の調査でゴクマジオスと命名されたようです。別名【巨戟龍】、と」

「【巨戟龍】ねえ……………というか火薬庫に重油？なんだよその爆発ハッピーセットは」

「はい。なんでも、そのゴグマジオスは主食が火薬らしくて。まあ、厳密には火薬に含まれる硫黄を主食にしていたようですが」

「火薬を主食って……………まじかよ」

「はい。加えてその古龍の身体から重油が吹き出ているらしく、それが火薬庫に残されていたものと同じだそうです。ですからあの時期は短期間に街の火薬庫から火薬が綺麗さっぱり消失するという事件も起きてまして。それもこれも原因はその古龍でしたが。ついでにこの街に保管されていた最古の撃龍槍も盗まれていたようで、それについてももう話すのに時間がかかると言いますか……………あの時はまずドンドルマ全域で火薬を盗んだ犯人探しから始まりました……………。容疑者全員にアリバイが発覚して迷宮入りかと思いきや、撃龍槍が消えたことでようやくモンスターの仕業だと……………。そこからまた長くて……………」

それからほんの数秒間の静寂が二人の間に訪れ、ドラゴがぽつりと言葉を零した。

「……………古龍って」

「……………はい。なんでもありません」

そう言って2人同時にため息をついた。

「そーいやせつかく再開したのに乾杯してないよな。ヤクモは酒飲めたっけ？」

「一応飲めますよ」

「じゃあ……………あ、すみませーん麦酒2つお願いしまーす！」

ドラコがカウンター内の女性、つまり私が先程クエストを精算した受付嬢さんに向かって大声で注文を伝える。

はーいという返事と共にパタパタとカウンターの向こうで準備を始める彼女を見てから視線を戻した。

注文の品は割と早く到着した。

「おまたせしました麦酒になります」

「お、きたきた〜」

「ありがとうございます」

ペーリと頭を下げて戻って行った受付嬢さんを見送って、もう乾杯する気満々のドラ

コに合わせてジヨツキを持ち上げた。

「へへ、んじや改めて、生きてることに感謝して」

「はい、お互いが生き残っていたことに感謝を込めて」

ふっと小さく笑い合い、互いのジヨツキを軽く打ち合わせた。

「乾杯」

◇？

数分後。

ドンドルマ大衆酒場にて。

ドラコ・ラスターは壮絶に後悔していた。

何に、それは……………

「えぐつ……………ぐすつ……………ドラコさん……………無事で……………ぐす、無事で本当に……………良かった……………えぐつ、ぐすつ。わだし、皆様のことが心配で心配で……………」  
「……………」

「私たちの世代は……ぐす……みんな無茶ばかり……ですし……あう……ぐすっ……」

「んくあー、そうだよな、そりや心配するよな……!」

「あの時も……アカシさんも、レマさんも、……無茶して、突っ込んで……返り討ちにあつて……ぐす……私、……ぐすっ……私……」

……頭の中真つ白にく……いひぐつ……」

「ほらほら泣くな泣くな。大変だったなお前も」

「初めての接敵だったの……えぐつ……慎重に行きましようつて……言つてたのに、ううつ……私の粉塵があと少しでも遅れていたらと考えてしま……うと……ぐす……私、私……うう、ひぐつ、ぐす……皆さんに、合わせる顔が……ぐす……無くて……」

「大丈夫だからさ。ほら、あの二人だつて今こうしてちゃんと生きてんだろ？それはいいことじゃねえかよ、な？」

……ヤクモが『泣き上戸』だったということに、だ。

会うのも久々すぎて頭からすつぽり抜け落ちてしまつていた。

「ど、ドラコさん……うう……ひぐつうう……う、ぐすん……ひぐつ……う、うう……」

ついには両手で顔を覆いながら泣き出してしまったヤクモに溜息をつきながらドラコが後頭部を搔く。

そんなこんなで【伝説世代】の2人による久方ぶりの再会は酒が入ってひたすら泣きながら愚痴をこぼすヤクモが疲れ果てて寝てしまうまで続いた。



## 水☒ 八雲の章

## 2. 前編

本日は快晴。

どこまでも青く雲ひとつない空に輝く太陽のおかげで気温もいつもに比べると若干高いことだろう。

ヤクモはアプトノスの引く荷車上で、《依巫・祈》装備の花袖でまだ動いていないのにも関わらず吹き出してくる額の汗を軽く拭った。

狩場の天気がいいとこちらまで清々しい気分になれるので個人的には好きではあるのだが、暑すぎるとその分体力の消耗も激しくなってしまうため狩りが長引きやすくなってしまう傾向にありますので注意が必須だ。

そんなことを少しばかり語っては来たものの実は今回の狩場は『いい天気』とは全くと言っていいほど無縁な狩場であった。

今日の依頼はドンドルマ近郊の狩場、田沼地 ジオ・テラードエ湿地帯アから救難信号を受けたことが事の発端である。

なんでもココット村からドンドルマへ向かう途中の商隊が街近郊のジオ・テラード湿

地帯でリオレウス亜種の襲撃により身動きが取れなくなったとの事。

現在は彼の目を掻い潜りながら逃げ続け、護衛のハンターが交戦していたのだがそのハンターも負傷してしまい動くに動けない状況となってしまうらしい。

ドンドルマは周囲を険しい山山に囲まれており南側の平地部分を除けば完全に『盆地』のような地形に栄える街で同大陸上では最大規模の大きさを有している。

また場所が場所だけに古龍の通り道や襲撃にあつてしまうこともほかの街よりも多いため、ここには『古龍観測所』のような大規模なモンスターの研究施設の本局が設置されており、それらに対抗するための迎撃装備も万全が期されていた。

そんなドンドルマの西方に位置し、最も近い狩場となっている旧沼地エリアことジオ・テラード湿地帯とは年間を通して降水量が多く、更に湿地帯全体を深い霧が覆い尽くしているため乱立する高背の木々と相まって太陽の光がほとんど届かずに常に薄暗い状態が続いている狩場であった。

位置的には最も近いが、辿り着くためには山をひとつ越える必要があるため、ドンドルマからであれば最短でも2日はかかってしまう狩場だった。

依頼を受けてドンドルマの街を発つてから2日。

数匹のランポスとの交戦があつたとはいえ概ね順調に進んでいるので、周囲の景色から見積もるとあと数時間程度で目的地に到着するはずだ。

今回は偶然近くを通り掛かったという2人のハンターとの共闘の予定であり、その2人はすでに目的地に到着して先にベースキャンプを設置してくれているらしいので自分も出来るだけ早く合流したい。

再度ポーチの中身を見て、必要な道具が十分準備されていることを確認しておく。

回復薬グレート、生命の大粉塵、鬼人薬に硬化薬、閃光玉とシビレ罠。落とし穴は地盤がしっかりしていない場所が多いジオ・テラード湿地帯ではあまり期待が出来ないため今回は置いて来ている。あとはリオレウスの亜種ということで目撃情報がそれほど多くないこの個体は捕獲してギルドへ提出することも視野に入れて捕獲用の麻酔玉も必要最低数持ってきた。

そして忘れてはならない2匹の翔蟲。

窮屈だろうと思つて籠から出していた2匹はお腹を青緑色に輝かせながら私の周りをブンブンと元気に飛び回っていた。

この2匹のコンディションも上々のようだ。

「ふう。事前準備は抜かりなし、と」

あとは目的地に到着するのみ。

ヤクモはゴトゴトと揺れるリズムに身を委ねながら仮眠を取るためにゆっくりと目を閉じた。

閑話【八雲立つ】 前編

ガタン！

「んきやつ?!」

アプトノスが引く荷車の車輪が小石を踏んだらしい。

ガタンと大きく揺れたその拍子に軽く飛び跳ねてしまったヤクモはそのまま荷車の

縁に頭をぶつけたことで目を覚ました。

「くっつ!!」

咄嗟に頭を抑えながら痛みにも悶えていると手綱を握っていた年配の男性からおーいと声がかかる。

「おーいハンターのお嬢ちゃんもうすぐジオ・テラード湿地帯……………おやおや、すまないねえ極力揺れないようにはしていたんだが、起こしてしまったようだね」「い、いえ、お気になさらず……………」

「怪我はしていないかい?」

「はい、どうか……………」

「ふう、それは良かった。まさかハンターを荷車の中で怪我させてしまったとなっちゃわしもタダでは済みそうにないよ。ほっほっほ」

「あ、ははは……………」

「冗談さ。それより、すまんねえ乗り心地悪くて」

「そ、そんなことありません。全然平気ですよ。それにこちらこそ乗せていただいていた本当に感謝しています。なにせ急を要するものでしたので、無理を押しして頂いてありがとうございます」

「いい、いい、こんな老いぼれが役に立つなら喜んで力になるさね、お若いハンター殿」

「ありがとうございます」

「そら、もう目的地は目の前だ。この先にはわしは進めんからここでお別れになつてしまふのう。忘れ物は無いようにな」

「はい。本当にありがとうございます。おじいさんもお気をつけて」

ゴトゴトとゆつたりとしたスピードで進んでいた荷車が停止する。

それと同時にストンと荷車から降りるとそのまま前方へ行き、ここまで送つてきてくれたおじいさんにぺこりと頭を下げた。

最後に荷車を引くアプトノスの首を撫でて感謝の気持ちを伝えると、もう一度おじいさんへ頭を下げて、下ろしていた髪を後ろで一つにまとめあげる。

それからよし！と気合いを入れ直して湿地帯の方へ駆け出した。

◇？

ジオ・テラード湿地帯ベースキャンプ。

「すみません。少々遅れてしまいました。申し訳……………ありません？」

ヤクモがベースキャンプに着くとテントの中から先に到着していたハンターが顔をのぞかせた、のだが……………

「お、ようやく到着ですな！伝説世代と名高いヤクモ殿！」

……………電子音声と共にテントの中からブルファンゴが出てきた。

条件反射で背中の太刀に手が伸びてしまう。

「ブルファンゴ！」

「ま、待った待った！オイラはブルファンゴじゃないです！ハンターです！」

「……………え？」

ヤクモの動作に慌てたブルファンゴがバツとテントの中から飛び出してきて両手をブンブンと振って『N O』のサインをした。

確かに頭に被ったブルファンゴの……………これはヘルムで間違いないのだろうか？

という感じの装備以外（首から下）はしつかりと人間のそれだった。

見た目の奇抜さに驚きはしたものの、それ以上に意外だったのはそいつが『女性』であつたことか。

防具のフォルムを見る感じだと………おそらく、ウツシの出身であるカムラの里の近郊で目撃情報の多いイズチというモンスターの装備のようだ。

別名〔鎌鼬れんとうりゅう〕と呼ばれるモンスターはどちらかといえばランポスやゲネポスといった小型モンスターに分類される種族で、それら同様親玉の個体も存在するのが特徴だ。

イズチで言うとおサイズチがそれに該当する。

ヤクモも実際に見たのはウツシと呼ばれてカムラの里の百竜夜行にいた親玉のおサイズチ位だった。

あまりドンドルマ近郊や良く行く密林ことテロス密林、森丘ことアルコリス地方には出現報告が無いのでその装備を見る機会もほぼほぼ無かった。

《イズチ・S》装備と呼ばれるそれは先に挙げた〔鎌鼬〕おサイズチのオレンジ色の体毛を散りばめて蛮族風に纏めあげた装備で、鎌を振るう鼬イズチが如く鮮やかにそして軽やかな動きを出来ることが特徴の装備だ。

全体的に苦手とする武器が少なく、製作のしやすさも相まってまだ経験の浅めのハンターによく見られる装備だった。



ということとはつまり……………。

そういうことである。

彼女の背負う武器は盾チャージャックス 斧と呼ばれる武器種で、その特徴は一撃必殺の超高出力属性

解放斬りにガンランスに次ぐ防衛性能を誇る盾だろう。

見たところ結構珍しい武器を持っているようで、メラルーとアイルーが落とすと言う  
 かくれる『肉球のスタンプ』という素材を加工屋に渡すと製作してくれる麻痺属性の  
チャージャックス  
 盾 斧、【シユラフカツツエ】。

あまりメラルーアイルーを追い回していることを想像したくはないが、実際どうやって集めたのだろうか。

マタタビでも渡して物々交換でもしたのだろうか。

少なくともそうであって欲しいと願うばかりである。

「お、着いてそうそうやんちゃはやめておくれよ同士達。今回は我々3人がパーティなのだからな。はっはっはっは♪」

そんなことをしていると2人目の助っ人ハンターがゆつくりとテントから顔を出しながら大袈裟に笑い声を上げて見せた。

そのハンターに対するヤクモの第一印象は……………魔女だった。

鮮やかな金髪を腰の上あたりまで伸ばしている彼女は、全身が特徴とても言わんばか

りの紫色の装備に頭にツバが広めのとんがり帽子と長めのスカート状に加工したコイル、霞を纏い毒を司る古龍の素材をふんだんに使用したメイユルやアームガード。

古龍種に分類される「霞龍」オオナズチを模した防具《ミツハ》に身を包んだ声色からして女性ハンターは自分と同じ太刀の武器種を使用しているようで、テントの中に立てかけてある武器は同じくオオナズチの武器である「フアントムミラージュ」と見て取れた。

霞がごとく消え鍵のように先端がカーブした刀身に、抜刀と同時に刃に巻きついて鞘の役割を果たしていた触手が縮んで鏢になる様はオオナズチの神出鬼没さと変幻自在さを象徴していた。

それに『古龍の装備を揃えている』と言う事実だけでこちらの女性の方の实力は確かであるという裏付けになる。

現状況ヤクモよりも実力は上である可能性が大いにある女性だった。

この2人が今回同席してくれる助っ人のハンターだ。

バラバラな武器種では無いにしろ3人とも前線で戦うことを主として作られた武器を背負っている以上遠距離からの援護が無いのは少し心許ない所ではある。

とは言え、即興では良くあること故あまり気にはしていない。

そもそも、こういう時にこそヤクモは真価を發揮すると言っても過言では無いから

だ。

回復と支援に特化した《依巫・祈》装備とヤクモが今まで培ってきた技術と経験が生きる時である。

「ふう。御二方が今回同席していただくハンターの方々ですね。先程は取り乱してしまい申し訳ありません。私はドンドルマ拠点のハンター、ヤクモ・ミナシノと言います。本日はよろしくお願い致します」

「オイラはカムラの里出のイノシマ。よろしく頼みます。まだカムラ近辺以外の狩場はほとんど経験無いのですが、2人の足を引っ張らないように善処します!」

イノシマと名乗ったブルファンゴフェイクを装備した女性がグツと親指を立てながら自己紹介をしてくれる。

相変わらず電子音声で流れてくるので素の声がどのようなものなのかまでは定かではないが、見た目通りの変人では無いことを祈りたい。

「はっはっは、そんな畏まることは無いよ二人とも。楽にしたまえ。肩肘張っていると動きずらいだろう? つと、そうだ私の自己紹介がまだだったな。私はイズモ・ユウキと言う者だ。イズモで良い。ドンドルマ出身のハンターだ。訳あって遠出していたのだが、その帰路で救援要請を受けてね。加勢することになった身だ。よろしく頼むよ。伝説世代と言われる貴君の実力見せてもらおう」

「はい。改めてよろしくお願い致します。……………そう言えばイノシマさんはカムラの里出と言っていました。カムラ出身ということではないのでしょうか？」

「いや、出身は別です。カムラでハンターとしての資格を取得したという感じ」  
何となく口調が定まらないイノシマであるが、そうなるかつまりは……………

「ウツシさんの弟子、という訳ですね」

「教官殿を知っておられるのですか!?!」

「まあ、同期ですし。ということとはあなたは翔蟲コレ使えますよね?」

そう言つてポーチを開けて翔蟲を一匹出して見せた。

「翔蟲! はい、バツチリであります!」

「ほう、それが噂に聞く《翔蟲》というものか。実物を見るのは初めてだな」

イズモが珍しそうに手を顎に当てながら翔蟲に顔を近づける。

「確かにカムラ以外では見かける機会はないですよね」

「ふむ、ではヤクモ貴君もカムラ出身かい?」

「いえ、違います。厳密に言うならばまだ物心着く前にカムラから西シユレイド地方のミナガルデという都市に引越しました。その訓練所の出です。とは言えカムラには色々縁がありますので武器と防具はそこで製作致しました」

「読めたよ。そうなると翔蟲は親もしくは関係者から受け継いだと見た」

「はい。父親からの相続です」

”『相続』、ですか”

「そうですね。カムラ出身だった父は私が物心着く前に狩りに出かけたきり戻ってこなかったらしいです」

「おつと済まない、嫌なことを思い出させてしまったようだね」

「いえ、お気になさらず。即席のパーティではわりと毎回この話はしているので。なのでコレは父の形見。それだけ覚えてもらえれば私としては十分ですよ」

”オイラもあまり深くは詮索しないでおきます”

イノシマが両手でブルファンゴフェイクの口を塞ぐ仕草をしたことでこの話は一段落となった。

「はい。そうしていただけるとありがたいです。さて、そろそろそろ時間になります、御二方の準備は整っていますか？」

ポーチの中から2匹目の翔蟲を出してすぐ手の届く位置へ収めると、イノシマも同じように翔蟲を準備し始める。

イズモもテントから立てかけてあった「ファントムミラージュ」を背中に背負い直しながらヤクモの言葉を聞いていた。

”バツチリです!”

「私もいつでも行ける」

2人の反応に力強く頷いて、支給品の中から地図を取り出してベースキャンプに備え付けのテーブルの上に広げる。

それと同時にヤクモは自身の中にあるとあるスイッチをカチンと切り替えた。

「了解しました。では作戦の内容を確認致します。目標はリオレウス亜種から商隊を無事に生還させること。それが達成され次第即撤退します。異論はありますか？」

「倒さないのではありませんか？」

「はい。私達の目的はあくまで『商隊の人を無事生還させること』です。確かに、先に倒せばそれに越したことはありませんが。情報の数が少ないこの個体を相手に商隊を護衛しながら討伐するのは至難の業であると判断しました。イズモさんはどう思いますか？」

「うむ、妥当な考えだろうな。リオレウスの亜種ともなれば極端に目撃情報の少ない種だ。深追いをして予想外の一撃を貫うリスクを考えれば時間稼ぎに徹する方が論理的だろう。流石だ。ヤクモ<sup>貴君</sup>はハンターの『役割』というものを熟知している」

「ありがとうございます。大筋は今お話しした内容の通りです。ここからは細かい作戦を詰めていこうと思います。まず、今商隊が身を隠しているエリアがこの辺り。それから襲撃報告があった場所がこの辺り」

ヤクモが喋りながら地図に丸をつけていく。

「ふむ、遠いな。この湿地帯からドンドルマ方面へ抜けるためにはこのベースキャンプを通過するのが最も安全だと言える。が、その目の前のエリアを例の亜種が徘徊している。洞窟内から迂闊に出ることも出来ないでいる、という事だな。となるとあまり時間かけられないな」

「どうしてですか?」

イズモの言葉に対してイノシマが疑問を投げかけた。

それをヤクモが拾って代弁する。

「それはですね。この場所の洞窟は外界の温度に比べて極端に温度が下がるんです。それ故に本来はホットドリンクが必要なのですが、私達が到着するまでに2日の時間を要しました。恐らく商隊の方もホットドリンクは予備を含めて持つてきているはずですが。2日分プラス予備。つまりそろそろ底を尽きてしまっている可能性があるということですよ」

「?」

「あの洞窟はホットドリンク無しではかなり厳しい環境である、そういうことだ。時間をかけてしまつては商隊の人々が衰弱していつてしまう」

「おっしゃる通りです」

「でも、2日分プラス予備があるんですよね？であれば」

「この【2日分】と言うのは、ジオ・テラード湿地帯からドンドルマまでの最短時間分とイコールです。つまり、必要最低の量ということになります。私達は救援を受けてからすぐに集合致しましたが、私がギリギリとなつてしまいました。なのでこれ以上長く洞窟に留まれば……」

「最悪の場合が考えられる」

「はい」

「なるほど。優先すべきことの理解は出来ました」

「そこで提案です。リオレウス亜種の囹役に私とイノシマさんで、極力ベースキャンプ付近から引き離しますのでその隙にイズモさんは商隊の避難と誘導をお願いしたいと思います」

「私をそちらに回すか。その根拠を聞いてみようか」

理由などとうに分かつてはいるがあえて試すような視線をヤクモに投げかけ、イズモが腕を組む。

「第1の理由としてこのジオ・テラード湿地帯の地理情報を最も把握している人物であること。私が地図を広げて説明を始めた際、商隊の場所とそこまでの距離、そして安全航路のベースキャンプまで距離が離れていることや洞窟内の環境についてをご存知で



したので。第2の理由として単騎での実力。恐らく私私とイノシマさん達よりも確かな実  
力があると見込ませていただきました」

「なるほど。よく見ているな。であれば異論はない」

”リオレウスの亜種個体なんて、オイラに囚役が務まるのでしょうか”

『務まるのか』ではありません。『務める』のです。それが私達「ハンター」という職に  
就いた者に課せられた責務です。今この瞬間より商隊全員の命が私達3人の肩に掛  
かっているのをお忘れなきよう」

私の言葉にイノシマがピツと背筋を伸ばした。

「手厳しいと言うか、融通が利かないと言うか………ヤクモ貴君は損な役回りになること  
が多くないかい？」

「どうしてそれを？」

「それはまさに一目瞭然」

「なるほど。まあ私の性格は私がよく理解しています。ともあれこれが私の最善策で  
す。イノシマ脚さん二にイズモ方さんの意見が無ければ早速行動に移りたいと思います」

”合点承知!”

「私も異論は無いよ。商隊を安全な場所まで誘導し終わったらベースキャンプで発煙筒  
を炊く。それが撤退の合図としよう。いいな? ヤクモ」

「構いません。では、行きましょう」

その言葉と共に3人はヤクモ、イノシマのペアとイズモに別れ、ベースキャンプから狩場へ足を踏み入れるのだった。

※現在の状況※

商隊：湿地帯最奥部洞窟内

リオレウス亜種：BC付近エリアを徘徊（交戦意思有り）

イズモ：BC

ヤクモ・イノシマ：BCに隣接するエリアにフィールドイン。

## 2. 中編

ピーーーー!!

突如として甲高い口笛がエリア一帯に響き渡る。

流石にこの音量を出すのは疲れるが、運が味方してくれたこともあり良く響いてくれたのは幸いだ。

唐突に鳴り響いた異音に対して近くにいた鳥達は一斉に空へ飛び立ち、同時に草食竜肉食竜問わず音の発生源へ視線を向けた。

それは当然ベースキャンピング近辺を徘徊していたリオレウス亜種の耳にも届いており、小さく喉を鳴らしながら音のした方向へ進路を変更し始めた。

まずは口笛コレに対して反応を示してくれたことにホッと胸をなでおろしつつ、ヤクモは見晴らしの良さげな木の上から片手を望遠鏡のように目の上に当てる。それから数秒後、リオレウス亜種の姿を目視で捉えた。

先程自分と同じように少し慣れた場所の木の上からライトを使ったサインを出してくれたイノシマも既にこちらに向かつて合流を図っている頃だろう。

今回はいつもの狩りとはまた少し色が違う。

商隊の全員生還が条件のためどうにかしてリオレウス亜種を安全航路上から引き離さなければならぬ。つまり、彼の興味を商隊からこちらに向けさせなければならぬ訳だが………まさか、口笛一つで作戦の第1段階が達成されるとは思っていなかった。

そうは言ってもこちらとしてはありがたい限りなのでこのまま乗っからせてもらおうとしよう。

ポーチの中から先程簡易的に作成したセミ笛を取り出して頭の上で大きく円を描くように振り回しながら枝から飛び降り、向かってくるリオレウス亜種に背中を向ける形で走り出す。

紐と短い円筒管で作った極簡易的なものでビジュアル的にも実際のセミ笛とは似ても似つかないがどうか音は出すことが出来た代物だった。

しかも何故か音が高い。

そのせいで口笛よりもさらに甲高い音を響かせるセミ笛が癩に触ったのかどうか知らないがリオレウス亜種が小さい咆哮をしてからこちらへ向かうスピードを上げた。

それを背中越しで確認し、同時にそれを追うように走るイノシマも視界に収める。

通常種のリオレウスとは異なり蒼火竜と呼ばれるその体は澄み渡る青空のごとく彩られ、通常種よりも一回りほど大きな巨体には獰猛さもより一層増しているため希少性

もさることながら危険性も折り紙付きのモンスターであった。

その巨大な殺気をひしひしと背中に感じながらヤクモは不安定な足場であることを感じさせないようなスピードで湿地帯を走り抜けていく。

時折大きな火球が空から連続で飛来してくる。

今のところ全力で走っているおかけでどうにかこうにかブレスの射線上から間髪のところでは抜けられてはいるが、これから少しでもスピードを緩めれば直撃は免れないだろう。

伝説だなんだと祀り上げられてはいるが正直この緊張感は何度やっても慣れる気がしないし、同時に慣れてはいけけないと言う事も改めて思いしらされる。

『死』のプレッシャーには慣れてはいけない。

思考を冷静にそして狩場を客観的に見る為にはそのプレッシャーは必要不可欠な要素だからだ。

死地になれてしまえばどこかで必ず綻びが出てしまう。

そうなつてからではまず遅い。

ハンターとしての道を進み始めてからなんど融通が利かないと言われようが貫いてきた自論である。

直後。

自分のすぐ隣に火球が着弾した。

「っ！」

既にセミ笛の音は鳴らしておらず、走るのに邪魔だったためその辺に捨てては来たが役割は十二分に果たしてくれたと言っても差し支えないだろう。

背後の蒼火竜は甲高く煩わしい音に完全に頭に血が上っているご様子。

その目には現在ヤクモしか写っていないことだろう。

咄嗟に腕で爆風から顔を守りながらその風圧に身を任せて体を反対方向へ投げ出す。

すぐさま受け身をとって正面からリオレウス亜種に対峙しつつ同時に背中から太刀『たまのをの絶刀の斬振』を引き抜いた。

一応商隊が身を潜めている北の洞窟から湿地帯東側に位置するベースキャンプまでのルート上からリオレウス亜種を引き離すことは出来ただろうか。

ベースキャンプを出てから南下しそれから進路を西へ変更しつつ商隊とは真逆の位置で同時に時計回りで誘導していこうというのが今回の作戦だ。

ベースキャンプ前の空間よりは少々広めのこの場所はいつもならイーオスの2と3頭はいるのを覚悟していたが運がいいのか、それともイーオス達が本能的にリオレウス亜種の存在を察知したのか分からないが本日は小型モンスター姿は見えない。

逃げるのを止めて正面から武器を向けてきたハンターに対してグルルウウ…と小さ

く喉を鳴らすと滞空していたリオレウス亜種がゆっくりと地面に降りてきた。

リオレウス亜種の着地とほぼ同じタイミングで、その背後から追いかけてきたイノシマが走るルートを西に変えて翔蟲を使用して飛んでいった。

彼女にはこの隣のエリアでやってもらったことがあるので1度ここで二手に別れる手筈になっている。

それを視界の端で見送り体の前で構える太刀を握り直した。

「蒼火竜。貴方と相對するのは初めてですね。本来なら刃を交える前に一言添えるべきところではあるのですが。状況が状況故、無礼を承知で斬らせていただきます。何卒御容赦を」

背が高い木々に囲まれているおかげで薄暗い中ではあるがリオレウス亜種の姿は何故かよく見える。

それは向こうも同じらしい。

先に仕掛けたのはリオレウス亜種だった。

低く喉を鳴らし、僅かに体を沈みこませてから勢いよく地を蹴りながら突進を開始する。

こんなぬかるんで不安定な足場だと言うのにその速度は通常種をうわまっているのではないだろうか。

しかも安定感もある。

素早く真横へ回避行動を取ったあと即座に接近して突進後の硬直に狙いを済まして太刀を振るう。

狙いは尻尾……………と行きたかったが少し突進の軌道がズレたせいで予想していた場所に来てくれなかった。回避後の一瞬で狙いを尻尾から足に変更し、走り込む勢いのまま数回斬りつけたあとリオレウス亜種の振り向きに合わせて斬り払いをしながら距離を取った。

体の前で刀を構え直して舌打ちをひとつ。

「……………やはり通常種より硬い」

今相対している相手が通常種よりも強固な外殻を持っていることは人伝に聞いてはいた。

しかし『聞いていた情報』と『実際に対峙した上での情報』ではやはりどうしても多少の誤差は生じてしまう。

ただ正直に言えば、ヤクモもここまで差があるとは思っていなかったのは事実だった。

眉を顰めながらどう攻めようかと思考をめぐらせる余裕もなく今度はリオレウス亜種の口元から赤い炎が零れ始め、それから大きくのけぞり……………



「ブレス!?!」

こちららに向かつて巨大な火球が放たれる。

走り出そうと踏み出した足で急ブレーキをかけ、そのまま真横へ体を投げ出すようにしてどうにかブレスの射線上から退避した。

しかし、無理やり体を動かしたせいで体勢が崩れる。

その隙を目掛けてリオレウス亜種が再び突進を仕掛けてきた。

どうか今の体勢で出来うる限り軸足に力を込め、目視で距離を測りながら左手に握る鞘に太刀の刃を収める。

納刀、そして突進に合わせて一気に軸足に溜めていた力を爆発させて居合抜刀気刃斬りを放った。

「ツッ……少しズレましたか」

一撃は与えることが出来たが僅かに抜刀のタイミングをずらしてしまったせいで追撃の斬撃まで与えることが出来なかった。

本来であればするりと攻撃を見切りモンスターと交差するその一瞬の隙を突いた神業級の斬撃によって時間差でダメージが蓄積される技ではあるのだが、それが発動するタイミングはかなりシビアであり少しでもタイミングがズレてしまえば発動はもちろん斬る前にモンスターの攻撃に直撃してしまうリスクも大きい技だ。

今回はただ発動しなかっただけであるがタイミングとしては相当ギリギリであった。あと少しでも抜刀が遅れていたら今しがた背後で突進の勢いを前方に大きく投げ出しながら倒れ込むリオレウス亜種の体の下敷きになっていただろう。

布地が主体の《依巫・祈》装備でプレスやボディプレスなんか直撃したらそれこそ文字通り再起不能だ。

振り抜いた太刀をすぐさま納刀し、背中に背負い直しポーチから閃光玉を取り出して体を起こしながらこちらに振り向いたリオレウス亜種の目前に向けて投げる。

突如として目を焼かれたリオレウス亜種が仰け反る。

リオレウス亜種にどの程度効くのかは定かではないが、見積もるのであれば通常種よりも短いと判断するのが妥当だろう。

だいたい通常種が約20秒程度だとして……………その亜種個体なら10秒〜15秒であるの見積もるのがいいか。

であればあまり時間は無駄にできない。

ヤクモは即座に太刀を抜き放ち閃光によって盲目となったりオレウス亜種に肉薄する。

その足音を聞いてなのか分からないが、リオレウス亜種が僅かに頭をのけぞらせて咆哮を放った。

バインドボイスと呼ばれる咆哮はその音量と衝撃故にまともに受ければ思わず耳を抑えてしまう程の衝撃であり、そうなってしまうえば体は硬直してしまい身動きが取れなくなってしまう。

つまり、モンスター在目前で無防備な姿を晒してしまうことに等しい。

しかし、ヤクモはそうなると踏んでいた。

それはそうだ。

閃光玉は視覚こそ奪えるが聴覚までは奪えない。

目が見えなくとも自身に武器を向けるハンターが接近する足音などは聞こえるはずなのだ。

ではどうすればその接近を妨害できるか、『空へ逃げる』以外の選択肢があるとすれば咆哮バインドボイス一択になる。

これは通常種と同じだ。

ヤクモは走り込む勢いを殺さぬままヒュッと一度水平に太刀を振り、バインドボイスに合わせて体を逃がしながら見切る。

それから力強く踏み込んで切り上げに繋げ、完全に太刀の間合いへリオレウス亜種を収めると身体中の力を一気に解放して気刃を纏った。

「はあああああつ!!!」

刃が踊る。

まるで双剣の乱舞のごとく舞うように放たれる斬撃が無防備に晒された首にヒットしていく。

斜めに斬り抜き、続けて遠心力を載せながら逆から。

次いで回転力を乗せた水平斬りと体の切り返しを利用した縦切りに繋げ、納刀から抜刀斬りへ移行した。

流れるように斬撃を放ちながらも正確に閃光玉の時間を計っていく。

自信が予想した閃光玉の効果時間に達すると同時に斬り払いで後ろへステップし、もう一度ステップを踏んでリオレウス亜種から距離をとった。

その直後、自分を攻撃する煩わしい虫を払う様に翼を大きく広げたりオレウス亜種が天に向かって吠え、同時にギロリと八雲の方へ視線を向けた。

どうやら閃光玉の効果時間は予想通りらしい。

「はあ……はあ……」

とは言ってもこうまで足場が悪い中で立ち回るのはいつも以上に体力を使う。

小刻みに肩を上下させながら武器を体の前で構え直し、リオレウス亜種が攻撃に転じたのとはほぼ同時にリオレウス亜種を中心として時計回りに走り出す。

直後リオレウス亜種から放たれたプレスが先程までヤクモが立っていた地面を薙ぎ

払い、攻撃を外したりオレウス亜種が低く喉を鳴らしながら視線をヤクモの方へ向け、突進を開始した。

通常種よりも突進の予備動作が小さくかなり見極めづらいが走り込む勢いを利用して前に前転することで突進の軌道から体を逃がす。

すぐさま地面に手を着いて体勢を建て直し突進後無防備になる背中へ追撃をするために走り出した。

しかし、そこで予想外の事態が発生した。

なんと、リオレウス亜種の巨体が突進を外したことを察知した瞬間両足で急ブレーキを掛けて静止し、間髪入れずに尻尾を振り回して来たのだ。

「なっ!?……………ッ!!!」

完全に裏をかかれた。

攻勢に転じようとしていたヤクモの動きに綻びが出る。

咄嗟に両腕で頭を守るようにクロスさせ、自分の体が吹き飛ぶであろう方向へ向かってジャンプすることで多少衝撃は殺せたかもしれないが、それでもヤクモのか細い体は大きく宙を舞った。

不幸中の幸いと言うべきだろうか、エリアを囲む岩壁ではなく木の幹に背中を思い切り打ち付けたことで頭部へのダメージは少ない。

尻尾の一撃でこの威力……流石は空の王者の亜種個体と言うべきだろうか。

よろよろと投げ出された太刀を握りしめ、太刀を杖代わりにしながら体を起こす。

視線の先ではリオレウス亜種がこちらへ向かって悠々と歩いて来ているのが見える。

威嚇するようにこちらへ軽く吼え、トドメを刺そうと言うのだろう口の端から真紅の炎がちらりと見え始めた。

ブレスが来る。

そう感じて回避を試みるが先程の一撃がかなり効いてしまっているらしい、両足が重い。

そんなヤクモに向けてリオレウス亜種が大きくのけ反り、ブレスを吐き出した。

「ッ！」

重い足が動かない。

反応が遅れ足がもつれる。

油断大敵、その言葉を心と体に嫌という程刻み込んで太刀を振るって来た、はずだっ

た。

しかしこれは完全にヤクモの油断が招いた結末だ。

「亜種個体と言えど通常種と大差ないだろう」と言う無意識な慢心が生んだ結果。

これでは他の同世代に顔向けできるわけが無い。

ヤクモは自身の浅はかさを恨みながらキツとブレスを睨みつけた、まさにその直後。

”ヤクモ殿

!!!!!!”

切れかけていた意識が一瞬で覚醒し、声の方へ視線を向ける。

視線の先では電子音声が音割れするほどの音量を出したらしいイノシマがカムラの

里に伝わる翔蟲を使用した特殊技法、鉄蟲系技てつちゅうしぎ『形態変形前進』チャージャアックスによって武器の盾 斧

を片手剣形態から斧形態へ変形させながらヤクモの前に割って入った。

そのまま武器を前に出す仕草をし、盾として腕に取り付けている武器でリオレウス亜種のブレスを真正面から受け止める。

それは通常のガードとは一線を画す。ヤクモは思わず言葉を漏らしてしまった。

「ガ、ガード G……P!!」

「様子を見に来て正解であります。動けますか?」

ガードポイント G P。それは盾チャージャアックス 斧の武器が誇る防衛技法の1つで、普通に盾を使つてガードするよりも一回り以上の強固さを誇る防衛技法だ。

通常片手に盾ともう片方に剣と言うように片手剣のような立ち回りを得意とし、時には盾に剣を組み込んで1つの斧として攻撃力をあげる武器、それが盾チャージャアックス 斧と呼ばれる武器だ。その扱いは同じ系統の剣スラッシュアックス 斧 同様かなりの難易度を有する武器の1つだった。

ましてやG P。武器を片手剣形態から斧形態へ形態変形させる時や、片手剣形態の突きの時等右腕に取り付けた盾を前に出している時にのみ発動できる通常ガードよりも強固なガード方法。それ故タダでさえ扱いが難しい盾チャージャアックス 斧の中でも群を抜いて難しい技法だった。

それをこうも容易くしかもあの鉄蟲系技から即座に移行できるなんて……。

「目を閉じてください!」

「っー」

ブレスを受け止めたイノシマが即座にポーチから閃光玉を取り出してリオレウス亜種の目前に投げる。



閃光の直前にどうか目を閉じたヤクモ。

しかしリオレウス亜種の方はまともに閃光を受けたようで呻くように低い声を上げながら大きくのけぞった。

「1度体勢を立て直すであります。隣のエリア準備出来ましたのでそちらに。リオレウス亜種の方も視力が回復した後もすぐには商隊の方には行かない、と思うのであります。向こうも頭に血が上がっていますし」

「そ、そうですね。1度引きましよう。すみません。お手数をお掛けしました………ッ！」

そう言って立ち上がろうとした時、背中にズキンと痛みが走る。

どうやら先程背中を打ち付けた際のダメージが来たらしい。

幸い防具のおかげで骨まではやっていないっぽい背中、それから両腕が麻痺してしまっている。

「肩を貸すであります。とりあえず隣のエリアへ行きましよう」

「申し訳ありません。ありがとうございます」

イノシマに肩を貸して貰いながらどうにか交戦エリアの西側のエリアへ逃げ込む2人。

閃光玉の効果が切れるタイミングでもう1つ閃光玉とついでにペイントボールもイ

ノシマに投げて貰ったのでとりあえずこちらの移動に気づかれることなくエリア移動、そして位置情報の特定も出来るようになった。

ペイントボールの臭いからしてまだエリア移動はしていないようだ。

恐らくヤクモを探しているのだから隣のエリアから遠目に見えるリオレウス亜種は首を伸ばしてキョロキョロと視線をめぐらせながら低く喉を鳴らしている。

交戦エリアのすぐ西側のエリアにはメラルーとアイルーに加えファンゴ種といった小型モンスターも徘徊しているのでそこで大型モンスターと交戦するのは少し分が悪い。

大型モンスターに集中しているところに横槍を入れられたらそれこそ目も当てられないし、かと言って小型モンスターに注意を向け過ぎれば今度は大型モンスターの手痛い一撃を貰いかねない。

だからイノシマには先に隣のエリアへ行ってもらって小型モンスターの露払いを頼んでいたのだ。

予定通りこのエリアにいた小型モンスターの姿は見えず、閑散としていた。

ヤクモは手頃な岩の上に腰掛け、支給された応急薬を飲んで体力を回復させついでに携帯食糧も口に放り込んで大きく深呼吸をした。

即効性の回復薬とは言え体力こそ回復は出来るが傷等が完治する訳では無い。

イノシマはヤクモが道具を使用してしている間万が一に備えて周囲を警戒してくれており、深呼吸で息を整えたタイミングでヤクモの元へ戻ってきた。

「ヤクモ殿、怪我の具合はいかがですか?」

「はい。腕にまだ痺れは残っていますが打ち付けた背中痛みは多少引いてきました。もう少し休めば痺れも無くなるでしょうから立ち回りには影響はありません」

「ふう。良かったであります。間一髪でしたな」

「ですね。助けていただきありがとうございます」

「仲間を助けるのは当たり前でありますよ。とは言え、あまり長くリオレウス亜種の前に姿を現さなければまた商隊の方へ言ってしまうかもしれませんね。ふむ、では今度はおイラガリオレウス亜種の相手を……………」

「……………」

「?」

次なる作戦を話し合っている最中、自ら囀役を申し出ようとしていたイノシマの言葉に被せるようにして言葉を切った。

イノシマは気付いていない。

というか、以前ウツシから聞いたことがあるのだがカムラではペイントボールというものをほとんど使用しないらしい。

つまり、イノシマはペイントボールの扱いに慣れてはいないのだ。  
だから気づかない。

ペイントボールの臭いがこちらに向かって来ているということに。

「……………その必要は無さそうです」

そう言いながらヤクモは隣に立て掛けていた太刀を握りしめ、視線を空へ移した。  
その直後。

グギヤアアオオオオオオオオオオオオオオオオ  
!!!!!!

空の王者が奏でる猛々しい咆哮が湿地帯全域の空気をビリビリと震撼させた。

※現在の状況※

商隊：状況報告無し（詳細不明）

リオレウス亜種：ジオ・テラード湿地帯南西部へ移動（ヤクモ・イノシマ交戦中）

イズモ：状況報告無し（詳細不明）

ヤクモ・イノシマ：ジオ・テラード湿地帯南西部へ移動（リオレウス亜種交戦中。うちヤクモ軽傷有り）

## 2. 後編

ジオ・テラード湿地帯に猛猛しい咆哮が木霊する。

空高くそれでいて地上にいるヤクモとイノシマにはつきりと聞こえるほどの力強い羽ばたきと共に蒼火竜が悠々と現れた。

その瞳にはその鮮やかな蒼い龍鱗からは想像も出来ない程真っ赤に染った殺気と怒気をこれでもかと言うほど孕んでいた。

そして真っ直ぐにヤクモ達を見据えてゆつくりと地上へ舞い降りて来る。

「予想より早い到着ですね」

「もう少しヤクモ殿の回復に貢献してくれるかと思つたのですが、仕方ないです！  
……………にしてもこの辺なんか臭くないですか？」

ヤクモの言葉に同調するようにイノシマもキリツとした口調で武器を構えるがその直後に気の抜けるような声を出して片手でブルファンゴフェイクの鼻を抑える仕草をした。

「ペイントボールの匂いです。カムラでは馴染みがないそうですね」

「使ったこと無いであります……………」

うう………と言いながら渋い声を出すイノシマのおかげでヤクモの肩からも僅かに緊張が解れていくのを感じる。

そしてもう一度リオレウス亜種の殺気を受けて緊張を高めていく。

「来ます！」

”合点であります！”

ヤクモの脳内にリアルタイムで情報が駆け巡る。

エリア情報、味方の戦力、敵の殺気、配置情報………その全てを脳内で駒のようには動かし、理論値を導き出す。

現状ヤクモは先の一撃で負傷中。

回復薬で多少マシにはなったとはいえ万全のコンディションとは言えない状態。

そしてイノシマに関しては先程のGPの影響も全く無いらしく、動きに支障は無いようだ。

空の王者である火竜リオレウスの亜種個体。

これに関しては正直詳しい情報はほとんど無い故、どうしても予測によつて物事を考えていくしか現状では進められない。

ベースは当然通常個体のリオレウスだ。

先程少しの間相手をした感じだと動き自体は大きく異なっている部分は少ないよう

に感じた。

ただ、通常種よりもさらに強靱な体躯は突進中に急ブレーキをかけて無理矢理その速度を殺しきること等予想外の事態に陥ることはかなり多くなるはず。

ヤクモは大きく深呼吸をしてから太刀を構え直し、突進に備える。

直後、地面へ着地したその瞬間にリオレウス亜種がこちらに向かつて突進を開始した。

「散開!!」

”合点!!”

短いやり取りからヤクモとイノシマが同時に反対方向へ飛び、リオレウス亜種の射線上から退避するとローリングの受け身から一気に地面を蹴って両サイドから距離を詰める。

ヤクモがリオレウス亜種の左後方、イノシマはその逆右後ろからそれぞれ武器を抜き放って距離を詰めた。

「イノシマさん！尻尾の振り回しに注意してください！」

”了解であります!”

先程は不意を突かれて重い一撃を貰ってしまったが、その攻撃があると分かれば避けることは可能だ。



想定通り、突進を外したことを悟ったりオレウス亜種はすぐさま急ブレーキをかけて尻尾の振り回しを放ってくる。

ブオン！と棘のついた尻尾が唸るように振り回された。

しかし、

「フツ!!」

（ガチン!!）”……っさア!!!”

尻尾の軌道を見切ったヤクモは体を捻って半身になりながら見切り、イノシマもガツチリとG ガードポイント Pで受け、そのまま武器内部に内蔵されているピンを解放してガード性能を強化する盾強化を行った。

そして、ヤクモの見切りからの切り上げが尻尾を振り回すために回転中のリオレウス亜種の右脚辺りにヒットする。

それによってリオレウス亜種が仰け反った。

「今です！イノシマさん!!」

相手が怯んだこの瞬間は攻撃のチャンスではあるが、今現状の自分の火力を考えた結果それは不採用となる。

代わりにバックステップで後退し、リオレウス亜種の正面を大きく空けた。

直後、彼女が空けたその場所へ向けイノシマが鉄蟲糸技てつちゅうしぎを使用しリオレウス亜種の正

面に躍り出る。

”待つてました!!!行くでありますよ!!!一撃必到!!!”

そして、鉄蟲系技『形態変形前進』の勢いを左足の踏ん張りで相殺しつつ右手に持った剣に左手の盾を組み込むと、重心を落とすどっしりとした構えに移行。

武器内部の機構が重厚な機械音を奏でながら稼働し、最後にガチンと機構のロックが解除される。それが合図となりエネルギーが極限にまで達した事を所有者に告げる。

その溜めに溜めたエネルギーを一気に爆発させて大きく遠心力を乗せた水平薙から続けて最後に斧形態の武器を思い切りリオレウス亜種の頭目掛けて叩きつけた。

通常の爆弾のような火薬による爆発とは異なる内蔵されたピンが巻き起こす通称ピン爆発による追加ダメージもしっかりと健在で、彼女の振り回す『シユラフカツツエ』は相手の気絶を誘発させる「榴弾ピン」を内蔵しているようだ。

”超出力属性解放斬り!!!”

高らかな電子音声とは裏腹に地面が揺れたと錯覚してしまうほどの衝撃がリオレウス亜種の脳天その一点に全て注ぎ込まれ、瞬間的にリオレウス亜種の頭部を盾チャージャックスが地面へ叩きつけた。

これには流石のリオレウス亜種もたまらずバランスを崩して横転した。

ここで一気に畳み掛ける!

イノシマとの反対側（尻尾側）に素早く回り込み、走りながら体に錬気を練り上げる。意識を体の中心に集結させて渦を巻くようにしながら少しずつ大きく膨れあがらせる。

その気は徐々に色を帯び始め、青、黄、赤。

そして最後、錬気の解放と同時に色は白へと昇華して体全体を覆い尽くした。

納刀した太刀を腰の当たりで構えながら距離を測り、自分の間合いに入ると同時に抜刀斬り、それから流れるように太刀の刃を返して気刃斬りへ移行する。

狙うは尻尾。

こいつを切り落とすことさえできれば攻撃力を大幅に削ぐことができるからだ。

錬気を纏った刃を斜めに斬り下し、続けて遠心力を乗せながら逆から。

体を捻りながら水平切りを放ち、おおきく振りかぶった縦切りから一瞬で刃を返して返し斬り。

そして、流れるように腰の鞘に刃を収め、リオレウス亜種が気絶から回復して立ち上がったその一瞬。

腰の鞘から太刀を一気に抜き放ち、居合抜刀切りへ。

一瞬にして斬り抜いた刃に手応えが伝わる。

この一撃によって先程ヤクモを吹き飛ばした尻尾を護っていた甲殻にヒビが入って

いた。

”流石ヤクモ殿!!”

「ふう………イノシマさん、そろそろ一旦距離を取りましょう」

”合点!”

ヤクモが言葉を言い終わらないうちから盾チャージアックス 斧を斧形態から片手剣形態へ形態変形させていたイノシマが左手の親指をグツと立てた。

両者バツクステップでリオレウス亜種から距離を取り、同時にヤクモはポーチから閃光玉を取り出して投擲。

リオレウス亜種の視界を奪ってからエリア移動のために北へ向かって走りつつ装備の『広域化』スキルを利用して鬼人薬の効果をイノシマに渡す。

彼女はヤクモの後ろを走りながら不思議そうにしていたが、ヤクモの装備を改めて見直して納得したようだ。

”いやあ、噂には聞いていた『広域化』の効果はこれのことなんですなあ!”

「イノシマさんは初めての経験ですか？」

”はい!なにせ1人の活動が多かったですから”

「そうなのです。………つつきり慣れているものかと思っていました」

”あはは、カムラは元々正式なハンターの数が少ないですからね”

エリアの端まで来た所で一旦足を止めて後方のリオレウス亜種へもう一度向き合う。閃光玉の効果時間は1.5秒程度。

ヤクモが振り向いたのとはほぼ同じタイミングでリオレウス亜種も視界が回復したように何度か周囲を警戒し、その視線をこちらへ向けた。

怒り狂う咆哮と共にこちらへ向けて突進を開始するリオレウス亜種を確認してから再び背を向ける。

南西部エリアでの交戦時間もいくらか稼いだ。

もうそろそろ商隊の避難もあらかた完了する頃だろうか。

小型モンスター程度であればイズモー一人で対処できるだろう。

全力で北上しながらリオレウス亜種の突進をギリギリのタイミングで真横に飛んで回避する。

反対側では同様に回避行動をとったイノシマが綺麗に前転しながら受身をとっていた。

そして突進後の無防備に投げ出されたりリオレウス亜種の背後へ向けて追撃を行う。

今回は両足で踏ん張ることなく勢いをそのまま前に投げ出すように突進の勢いを止めたりオレウス亜種の背後はこちらが攻撃を加える最大のチャンスだ。

受身に使った軸足で体のバランスを維持しながら地面を蹴り、姿勢を低く保ちつつ接

近。太刀は腰のあたり。

柄を握る手に力を込めながら接触と同時に抜刀居合切りで反対側に走り抜けた。

抜刀と同時に放った刃がヒビの入った甲殻部分に吸い込まれるようにくい込み、細かい破片が飛び散る。

「手応え、ありました!」

そして私と入れ替わるように鉄蟲系技『形態変形前進』で鮮やかに盾チャージャックス 斧を片手剣形態から斧形態へ変形させながら背後へ滑り込んだイノシマが右足を軸足にして思いきり踏ん張る。

同時に武器内部の機構がガチャンと無機質な音を響かせて内部に充填されていた瓶エネルギーを解放しその先端へ集中させた。

「はあああああッ!!!」

一瞬にしてエネルギーを臨界点まで引き上げたイノシマが武器の遠心力を最大限に利用した水平斬りを放ち、その勢いを殺さないように綺麗に武器を持ちかえると、そのまま軸足に溜めた力もふんだんに乗せて思いきり斧をリオレウス亜種に向かって叩きつけた。

狙いは当然先程からヤクモが連続で攻撃を仕掛けたことで脆くなり、ヒビの大きくなった尻尾部分。

ズガアン！！！！

瓶爆発の盛大な爆発音を残して、その衝撃波によって空気が振動する。

それと同時に一瞬、ほんの一瞬ではあったのだが、ヤクモは確かに時間の流れが遅くなる感覚に襲われていた。

イノシマが斧をリオレウス亜種の尾に叩きつけた刹那、バキン！と甲殻が砕け散る音と刃が肉を切り裂く音が聞こえ視界には切り離された尻尾が小さく宙を舞う姿と思ってもよらないダメージによるけ、こちらに向かつて威嚇咆哮をするリオレウス亜種。

その瞬間だけまるで時間が遅くなったかのような感覚が走り抜けていた。

「……………」

しかしそれもすぐに治まり、身体中に緊張感が戻ってくる。

怒り狂ったリオレウス亜種が再び大きく息を吸い込んで咆哮を放つ。

それにはさすがにヤクモもイノシマも同時に耳を抑えてしまった。

反射的に目を瞑ってしまいそうになるのをどうにか片目だけは開いたままリオレウス亜種を捉え続けることが出来たが……………

リオレウス亜種の口元に赤い炎がこぼれ出した。

「ブレス！来ます!!」

”が、合点!!”

お互い片手で耳を抑えながらブレスの斜線上から横つ飛びで避け、すぐに頭を上げてリオレウス亜種の方へ視線を向ける。

しかし、

「なっ?!」

”い、居ない!? 一体どこに……………」

「この短時間でどうやって……………いや違います!」

”前に居ない、という事は……………」

「上!!」

”上!!”

2人が同時に空へ視線を向ける。

直後、バサリという巨大な羽ばたきを響かせたと思えば今度は上空から地上<sup>こちら</sup>へ向けて連続で火炎ブレスを放ってきた。

まだキンキンと耳の奥で耳鳴りが響くのを耐えながら左右へ小刻みに移動すること



で火球を避けていき、若干助走をつけるようなモーションをリオレウス亜種が取る。

「来る！」

見覚えのある攻撃モーションに先程まで耳に当てていた手を離してすぐさま太刀を納刀し重心を落とす。

腰辺りに太刀を固定し、その柄を握りしめる。

あの動きには見覚えがある。

以前アカシ、レマと共に通常種のリオレウスを狩りに行った時によく見た動きだ。

聴覚の麻痺による集中力の低下が大きいのが、どうにか押さえ込み目視で距離を測る。

直後、予想通りリオレウス亜種が上空高い位置からヤクモの方を狙って勢いよく滑空して来た。

通常種ではそのまま滑空の勢いを殺すこと無く両足で蹴りを放ってくるが、そこもどうやら亜種个体だとしても変わらないらしい。

「ふう……………はっ!!」

距離を図り、居合の間合いにリオレウス亜種を捉えた瞬間抜刀と同時に前へ飛び出すようにしながら切り上げた。

先程まで切り続けていた尻尾部分とは異なりまだ甲殻が無傷の状態の場所へ切りつけた。

やはり硬い。

接触と同時に右手が衝撃で麻痺する。

「っ！」

リオレウス亜種の方にも大したダメージは入っていないようでこちらを蹴りつけたあと再び上空へ飛び上がってしまった。

あそこまで高く飛ばれてはこちらとしては分が悪い。

どうする。

考えがまとまらないヤクモをよそにリオレウス亜種は今度はイノシマにターゲットを定めたようにプレス、滑空から両足での連続蹴り等の攻撃を続けざまにイノシマへ繰り出していった。

イノシマも流石に飛行中の相手には反撃も難しいよう左腕に装着している盾で攻撃を受けるだけで精一杯の様子。

攻撃を受ける度にその衝撃で若干後退させられながらも今はどうか右足で踏ん張って耐えているが、それも肩を大きく上下させている状態ではいつまで持つか分からない。

尾を切られてもなおその獰猛さは衰えることを知らず、むしろ切る前よりも激しくなっている気さえする。

そう考えた直後。

「……………！あれは！」

ベースキャンプの方向から赤い煙が立ち上っているのが見えた。

間違いない。発煙筒の煙だ。

ということはつまり、商隊は無事に安全地帯まで誘導が終わったという合図。

「イノシマさん！」

「つぐう……………はい、見えています。イズモ殿の合図、ですな……………つと

もう！しつこいであります！」

リオレウス亜種の連続蹴りを盾でがっちり受け止め、身動きが取れないまま言葉だけで返すイノシマ。

それからヤクモは手早くポーチの中から閃光玉を取り出して塞がっている右手の代わりに歯を使ってセーフティを引き抜くと、再度上空高くに舞い上がったリオレウス亜種の顔前に向けて投擲した。

顔をこちらに向けたまさにそのタイミングで閃光玉の外殻が弾け飛び、周囲に強烈な閃光を撒き散らす。

「これで！」

「引きまししょう！」

腕で両目を覆っていたヤクモとイノシマは強烈な光によって視力を奪われたりオレウス亜種が地面へと墜落していくのを確認しながら即座に武器を仕舞いその戦場を離脱した。

◇ ?

ベースキャンプ。

「はあ……はあ、イズモさん。商隊の方々は無事ですか？」

「はあ……はあ……し、しんどいであります……ふあ」

出来るだけ勘繰られることのないように気配の察知や目視での確認があればすぐに木の影等に隠れながら隙を見て全力疾走してきた2人はベースキャンプに着くやいなや膝に手を置いたり壁にからだを預けたりと荒く乱れた息を必死に整える。

「ああ、貴君らのおかげでどうにか全員無事だ。すまないが、ここに残しておく必要もなかったが故商隊の面々は先にドンドルマへ向けて発たせてもらった」

「はあはあ、いえ、それで、結構です……はあ、ありがとう、ごさいました……はあ」  
依頼達成の報告を聞いて張り詰めていた緊張の糸が切れたのか、大きく息を吐きながらヤクモがその場でへたり込む。

心做しか今まで全集中によつて忘れていたダメージに加えて疲労も一気にのしかかつてきた。

「おやおや、そんなに息が上がっていて大丈夫かい？」

「……………ふう、どういう意味でしょう？」

今の質問に若干の違和感を覚えたヤクモがトンガリ帽子を被り直していたイズモへ質問を投げ返す。

それに対して、被り直したとんがり帽子のツバを僅かにつまみながら目を伏せたイズモが1テンポ置いてから視線を真剣なものへと変えて先程よりも抑えたトーンで一言ヤクモへ。

その視線は既にヤクモから逸らされており、フィールドの方へ注がれていた。

「……………たった今、ギルドから正式な辞令が下った」

「……辞令……まさかとは思いますが……」

その言葉に対してヤクモがスッと眉を寄せる。

それを見てフツと小さく笑い、流石だなと大きく息を着きながらイズモが視線をヤクモへ戻す。

「ああ、そのまさかだ。たった今、リオレウス亜種の討伐が正式な依頼として受理された」

「」と、討伐って……ほ、ホントですかあ……はあ」

「どうしてまた……」

「今回の一件でギルドはリオレウス亜種がこの場所を徘徊する事を脅威であると判断したのだろうな。まあ、ココツト村からドンドルマへ向かう通商ルートはこのジオ・テラード湿地帯を横断するのが最短ルートだ。故にその度にいちいち対応するくらいなら討伐してしまった方がルートの安全確保を望む商隊にとっても希少な亜種個体である火竜の研究対象確保を望むギルドにとってもメリットとなりうるわけだ」

「……………安全確保」

「確かに。脅威排除と検体確保を当時に出来るのであればこの上なく都合が良いですからね」

僅かに声のポリウムを落として自分に言い聞かせるように呟いたイノシマに続いてヤクモも言葉を述べた。

「とはいえ、貴君らはかなり消耗が激しい様子。その姿を見れば向こうも相当消耗させてくれたのは容易に想像出来る。それであれば少し時間はかかる可能性も考えられるところではあるが私一人でもどうにかなるかもしれない。貴君らは休んでいても構わないが、どうする……………」

そう言いながらベースキャンプに立てかけてあった太刀『ファントムミラージュ』を手に取りながらイズモがヤクモとイノシマ<sup>人</sup>へ向けて言葉と共に視線を投げかける。

その言葉を聞いたヤクモは大きく深呼吸した後にキツと口を結んでまっすぐにイズモを見据え小さく頷き返し、イノシマも岩壁に預けていた体を離して軽くジャンプをしてからパシンと左手の掌に右手の拳を打ち付けていた。

「……………」と、言うのは野暮だったか」

「野暮ですね」

「野暮であります。庶民の安全確保もわた……………コホン、オイラ達ハンターの役目でありますからな！」



「うむ。では貴君らの体力が回復したら出るとしよう」

「はい！」

”承知であります！”

）

蒼空

響く

轟咆ごうぼう

修羅しゆらの蒼炎

陽ひの如く

視界はい入らば

帰れぬ運命さだめ

我が身おも思うば

近ちかづくななかれ

面おもてを下さげよ

無ぶ礼れい千せん万ぼん

王わう者が通とる

）

リオレウス亜種



「鬼人薬、使います!!」

「わかった!」

ヤクモは抜刀しながらポーチに手をつ突っ込んでその中から赤い液体の入った小瓶を取り出して親指で器用にコルク栓を抜くと一気に中身を煽る。

食べると一時的に筋力が増加しそれに伴って武器による攻撃力も増加する希少なアイテムである怪力の種と、その効果を長時間持続させるためより粘性の高い増強剤によつて効果は据え置きで効果時間をより長く持続させられる薬である鬼人薬。

生産コストは相応にかかるもののその効果は絶大だった。

筋力強化もとい攻撃力増強は手数が同じなら単純に狩猟時間の短縮に直結する。

狩りが長引けば長引く程失敗のリスクが大きくなる状況では多少コストがかかったとしても使用しない手は無い。

ちょうどイノシマに渡した鬼人薬の効果も切れる頃合だ、ここいらでもう一度効果をかけ直しておく方がいいだろう。

視線を自分とは逆側に回り込んでいるイズモに向けると肯定の意味を持って彼女は無言で頷いた。

それからすぐに視線を目標へ切り替えるとヤクモよりも数テンポ早くリオレウス亜種に切り込んだ。

続いてヤクモも太刀を構えてリオレウス亜種の左側面へ走り込む。

そしてリオレウス亜種の体勢が整わないうちにヤクモとイズモの両者が同時に左右側面から縦斬りを2回、突き、斬り上げまで連続で斬撃を放ち、最後に斬り払いで後退する。

さらに完全な側面と言うよりかはすこし正面よりから斬りつけていたイズモは加えてもう一度ステップでさらに距離を取った。

直後、リオレウス亜種がなんの前触れもなく突進を開始する。

狙いは……………

「ちっ、私か！」

「イズモさん!!」

リオレウス亜種の突進を横つ飛びで回避し、その後の尻尾の振り回し、連続噛み付きをギリギリで体を逃がしながら一撃一撃見切りの斬撃を加えていくイズモも僅かに眉を寄せている様子。

「私はっ！大丈夫だ！ヤクモ！貴君は背面に回れ！イノシマ！君は出来るだけリオレウス亜種の動きを見ながらっ!?!……………っ!」

リオレウス亜種の追撃を横つ飛びで避けつつイズモが舌打ちをする。

「こいつも激しいと、会話をする暇さええないな！ヤクモは理解したか！それからイノシマ



放つ方が僅かに早かった。

蒼火竜の絶叫が湿地帯に立ち込める空気を揺らし、その威力故に至近距離で影響を受けるイズモが渋い顔で耳を塞いだ。

おかげでイズモの動きが止まる。

硬直が解ける頃にはすでにリオレウス亜種は人間1人程度なら上半身を丸まると飲み込んでしまえるほどの大顎でイズモに噛み付こうとしていた。

イズモの硬直はまだ完全には解けきっていない。

背後に回るために動き出していたヤクモもバインドボイスの影響で足は止まってしまっている。

「これは……」

眩くようにイズモが言葉を漏らした。

そんな彼女に狙いを定めていたリオレウス亜種の噛み付きが迫る。  
しかし。

「イズモ殿！目を瞑るであります!!」

イズモ達から少し離れた位置から放たれたイノシマの叫びとほとんど同時のタイミ

ングでイズモトリオレウス亜種の僅かな間に閃光玉が割り込んだ。

これに気づいたイズモは反射的に目を瞑り、ほとんど同時のタイミングで割り込んだ閃光玉の外殻が弾け飛ぶ。

本日何度目かの閃光が周囲へ振りまかれる。

間髪のところでもリオレウス亜種の両目を閃光が焼き、不意打ち気味に放たれたことによつて思わず頭を上にも揺らしながらリオレウス亜種が怯んで数歩後ずさつた。

その一瞬の隙を突くように今度はイノシマが鉄蟲糸技の「形態変形前進」によつてイズモトリオレウス亜種の間割り込む。

そして片手剣形態から斧形態へ変形させた《シユラフカツツエ》で上に振られた顎へ追撃の切り上げを見舞う。

下から頭部を切り上げたことでリオレウス亜種のバランスを大きく崩す。

これによつて大きな隙が生まれた。

さらに追い討ちだと言わんばかりにリオレウス亜種は頭を大きく上に振り上げた状態で雷にでも撃たれたかのようにピクピクと体を痙攣させてその場で硬直していた。

”今であります！イズモ殿！ヤクモ殿！”

「ナイスタイミングだイノシマ。礼は後で言わせて貰うぞ」

「承りました！イノシマさん！」



麻痺によって痙攣するリオレウス亜種に向けてイズモとヤクモが気刃を纏いながら肉薄し、その体重を支えている2本の脚へ抜刀居合の照準を合わせる。

イズモは正面から右翼側へ走り込みながら右足へ、そしてヤクモは左翼側から左足へ向けて。

2人の携える太刀が同時に動く。

「閃必中！流水揺らぐ蜃気しんきの幻まぼろしが如し！！居合抜刀……………」

イズモの『フロントムミラージュ』の刃が揺らぎながら背景に溶けていく。

「いきます！居合抜刀……………」

ヤクモの『たまのをの絶刀の斬振』に飛沫が浮かび怪しく光を反射する。

「気刃斬りっ！！」

そして両者の刃がほとんど同時にリオレウス亜種の足を捉えた。

ズバン！

ガキン！

「……………」

斬撃音と子気味良い金属音を残してバランスを崩してなおかつ両脚への気刃斬りによる斬撃をまともに受けたリオレウス亜種の体が大きく傾き右脚から崩れ落ちる。

グオオアア!!

それでもなお蒼空の主はブレスを吐こうと口元から炎をこぼす。

「こ、ここれでもまだ……………なのでですか……………はあはあ」

「いや、大丈夫だ。安心したまえ」

イズモはそう言い終わるとヤクモへ向けてすぐに後退するようにハンドサインを送る。

それに従って疲労の溜まった全身にムチを打ってバックステップで距離を取るのほとんど同時のタイミングだった。

”はあああああ!!!全力全開っ!!超出力属性解放斬りイ!!!”

重厚な機械音に猛々しい叫びを響かせたイノシマが盾チャージャック斧をリオレウス亜種の脳天へ向けて思い切り叩き付けた。

盾斧内部に蓄積された榴弾ピンが勢いよく弾けて斧が叩きつけられた場所を中心に連続して爆発が起こる。

この一撃にはここまで激しい抵抗を見せていたリオレウス亜種も流石に耐えることは出来なかつたようだ。

爆発が収まったのと同時に弱々しく声を発しながらまるで張り詰めていた糸がプツリと切れたように体の力が抜けていき、ドスンと力なく地面に崩れ落ちた。

「……………」

「……………もう、動かないでくれたまえよ……………」

「手応えはありましたから……………」

倒れても少しの間は武器を構え、警戒体勢でリオレウス亜種を睨みつけていた3人もリオレウス亜種が完全に動きを止めていることを確認すると大きいため息を着きながらそれぞれの武器を納刀しその場で膝を着いた。

リオレウス亜種、討伐完了。

依頼は達成されたのだ。

緊張の糸がプツリと切れてしまつて疲れが一気に押し寄せてきたのか、イノシマは地面がぬかるんでいることすら忘れてその場で大の字になつて寝転がつてしまった。

鬼人薬使用による疲労感が一気にのしかかつてきたのだろう。

”はあ、はあ……………”

「イノシマ、あまりこのような場所で女性がそのような大胆な格好で寝転がるものではないぞ。もう少し気品を持ちたまえ」

”し、しかしでありますか……………はあ……………”

「それに、助けてもらった礼をしてなかつたな。なにか望みはあるかな？ 飲み代位は喜んで出そう。それとも武器か防具の新調の方が良いかな？」

”あ、はは、はあ……………当然のことをした迄でありますからなあ。お礼なんていらなありませんよ。ただ、どうしても言うのであれば……………お腹ペコペコなのでご飯食べたいであります”

「ふむ、心得た」

ヤクモも袴に泥が着くことなどお構い無しに両膝を着いて荒い呼吸を繰り返していた。

「はあ……はあ………っ」

イズモとイノシマが依頼達成を互いに称えあっている最中。

ヤクモは一つだけどうにも煮え切らないものがあつた。

それは、リオレウス亜種に膝をつかせイズモと同時に放つた居合抜刀気刃斬りについて。

あの時、結果だけを見るのであれば両脚同時にダメージを与えたおかげでリオレウス亜種のバランスを大きく崩すことに成功したと言える。しかし、ヤクモの太刀を握る手に走つた衝撃はリオレウス亜種の甲殻を斬り裂いた感触ではなく………弾かれた衝撃だった。

ガキンと金属音のような音を響かせて自分の刃は甲殻によって弾かれていた。

あそこまで大きくリオレウス亜種の体を揺らせたのは得てしてイズモの一撃によるものが大半を占めていることだろう。

ヤクモの一撃はダメージの蓄積された体を勢いよく棒で叩いたことでその衝撃によつてバランスを崩す手助けをしたに過ぎない。

その証拠に、イズモが切りつけた右足の方はヤクモの刃を弾いた甲殻がまるでバター

であるかのように綺麗に切り裂かれており、その切り口も無駄なダメージが一切無く鮮やかな一文字いちもんじを描いていた。

「……はあはあ……（まだまだ私は……）……はあ……ふう」

大きく深呼吸をしてからゆっくりと立ち上がり軽く袴に着いた泥を落としていく。

「ヤクモ、疲労の方は大丈夫かな？ 君には前半戦後半戦とフルで活動させてしまったからな。ドンドルマへ帰投したら君にもなにかご馳走しようじゃないか」

「はあはあ……ありがとうございます。お言葉に甘えさせてもらいます」

「あつとそれから、私とイノシマも少し回復してきたところでな、周囲を警戒しておくから君からリオレウス亜種の剥ぎ取りを済ませたまえ。ギルドには連絡入れたから亡骸の回収は任せておいていい」

「い、いいのですか？」

「無論だ。今回の狩りで一番の功労者だからな。遠慮はするな」

「ですが……」

「”いいのでありますよ。オイラ達は後でも大丈夫でありますから”」

「ほら、イノシマもこう言っている。人の好意は素直に受け取っておきたまえよ。ほら」  
さらに食い下がろうとしたヤクモをふと手で制したイズモがヤクモの身体をくると反転させてリオレウス亜種の方へ向かせ、ほんと背中を押した。

「今回の依頼の成功は貴君の作戦あってこそだ。もつと胸を張りたまえ」

その言葉に押されヤクモは小さく頷いてざっとリオレウス亜種の方へあらためて向き直った。

そしてリオレウス亜種の亡骸へ向けて両手を合わせ、感謝と敬意を込めて頭を下げる。

「どうか安らかに……………素材、ありがたく使わせていただきます」

いつもの儀式のようなものを終え、腰から解体用のナイフを抜いて手早く亡骸を解体していき素材を選別し、必要最低限の素材だけをポーチにしまい込む。

そして、もう一度手を合わせて剥ぎ取りの順番を次のイノシマへ明け渡した。

無事に剥ぎ取り作業を終えてベースキャンプに戻ってきた3人は少しの休息を取った後、手早く片付けて帰投の準備に取り掛かる。

3人ともやはり手馴れているおかげで片付けは直ぐに終わり、帰りの迎えを待つだけとなった。

そんな時にはやはり気は緩むというもの。

「ふう、流石に……疲れ”……ましたな」

狩猟が終わりを告げたことで気が緩んだのか、不意にイノシマがブルファンゴの頭部を模したヘルムを脱いだ。

声色をも変声機による電子音声から落ち着きのある澄んだ声が漏れ出す。

だがそれによる問題は他にあつた。

その内から出てきたその顔を見た瞬間……………ヤクモの思考は完全に停止することになる。

「ほう、これはこれはかなりの美人じゃないか。何故そのようなヘルムをしているのか



不思議でならないな」

サラリと鮮やかな銀髪は肩のラインよりも少し長めに切りそろえられており、左側に流すようにピンで止められた前髪は少し長めの横髪と相まってより優美な印象を植え付けた。

恐らく元々は長かったであろう髪をヘルムに収まるように切り揃えた様子。毛先は微妙に外側へ跳ねており、くつきりと穏やかそうなアイラインと口元の雰囲気は大方先程まで声高らかに盾チャーシアックス斧を振り回してたハンターだとは似ても似つかない整った顔立ちをしている。

「ふう……………う？どうしました？ヤクモ殿……………はっ!?あ、いや、これ……………その」

「あ……………あ……………あな、たは……………」

「そんな空いた口が塞がらない様子のヤクモに腕を組みながら不思議そうに疑問符を浮かべるイズモがヤクモとヘルムを脱いだイノシマを交互に見比べて首を傾げた。

「ん？貴君ヤクモの知り合いかい？」

「……………し、知り合いもなにも……………」

「？」

「……………この方は……………」

「ヤ、ヤクモちゃ……………ヤクモさんそれ以上は……………」

「この方は、あの西シュレイド地方を統べるシュレイド王朝正当血統家系にして現在第1王位継承権を所持している王族の御子息様……………」

「なっ!!？」

「……………エリスティール・シウトルムベルク第1王女殿下、御本人にあられます」

「……………」

開いた口が塞がらないというのはまさにこの事で、あまりのカミングアウトに流石のイズモも驚愕の表情と共にとんがりポウシが僅かにズレた。

恐らく今日一番の衝撃なのは間違いないだろう。

それはヤクモも同じなのだから。

「あ、ははは………、ぎげんよう」

苦笑いを浮かべながら先程までとは打って変わって上品に手を振る王女殿下を他所に、ようやく頭のフリーズが解消されたヤクモとイズモがほとんど同時に土下座をする。

「今までの無礼の数々本当に申し訳ありませんでした!!」

「王女殿下とは露知らず数多なる非礼、誠心誠意ここに謝罪する!!」

「え、ええっ!？」

王女殿下イノシマが驚くのも無理はないと思うが、それはヤクモとイズモからしても同じだった。

まさかどうして、見た目も奇抜なブルファンゴヘルムを装備し、ましてや盾チャージャアックス、斧などといった『上品』とはほぼ対極にあるような武器を軽々と振り回すハンターの正体が

シュレイド王朝の王女殿下であると誰が想像できるだろうか。

居たのなら聞いてみたいところである。

そんな時、頭を地面に着けたまま本気で焦っているらしいイズモが声のポリウムを落としてヤクモにだけ聴こえるように怒鳴った。

「おいヤクモ、聞いてないぞ！どうして王女殿下がこんなところにおられる！」

「わ、私に聞かないでください！私が聞きたいくらいなのですから！」

「知らないで済むことか!?結構色々言ってしまったぞ！」

「私だって同じようなものです!!」

「あ……………あの、どうか顔を上げてください」

「はい！」

「はい！」

そんなやり取りを交わしている2人に向かってイノシマ、もといエリステイルが困惑した声で2人へ声をかけた。

「た、確かに私はそうといえましょうなんですけど……………でも、今はただの1ハンターです。身分なんて関係ないです。ですので今までと同じで結構ですから」

「いやいや流石にそういう訳には……………」

「わ、私がいいと言っているので良いのです！」

「……………」

「も、もう！ヤクモちゃんは知らない仲じゃないですよに！」

「まっ、ヤクモ!? 貴君は彼女と知り合いなのかい!？」

続けて告げられる衝撃の事実にはイズモがヤクモの両肩を掴んで軽く揺する。

そんなイズモからヤクモは溜息をつきながら視線を軽く外に流した。

「……………ええまあ。エリス……………王女殿下とは幼少期にシュレイド地方に越してすぐの頃にお付き合いしていた仲なんです。とは言いますが、当時も彼女の身分のことなどは知らずにお付き合いしていました。ですので知ったのもそれからしばらく経ってからなのです。当時共に行動していたあの女の子が王女殿下であったという事実は……………」

「運命の糸……………とでもいうべきなのかなヤクモとイノシマ……………いやエリス  
ティール殿下との繋がりは」

「はい。あの時からヤクモちゃんはハンターになるって言っていましたね。懐かしいです」

「恥ずかしいので言わないでください」

「いいことじゃないですか。それに、あの時からですよ」

「何がですか？」

ヤクモが小さく首を傾げる。

それを見たエリステイルが口元に手を当てながら上品に笑う。

「私もハンターの道を志すようになったのは、です」

「はあ……」

「同じハンターになればもつとヤクモちゃんのお役に立てるのではないかと思いまして」

その一言を聞いた瞬間、何故か嬉しさよりも先に片手で頭を抱えて大きくため息をこぼしてしまった。

……

そうこうしているうちに帰りの荷馬車が到着し、手早く荷物を積み込むがそれが終わる頃には既に太陽は西の地平線付近で沈みかけており、あたりの空も茜掛かって来てい

た。

夜間の移動はリスクが伴うため出発は早朝となり、モンスターを目撃報告の少ない場所での野宿をすることになった。

焚き火を囲み、食事を終えて夜も更けてきたところでヤクモが話を切り出した。

「……あの、イズモさん」

「ん〜？ 何かなヤクモ、こんがり肉だけじゃ足りなかったかな？ それじゃあ携帯食料の残りがあつたからそれを……」

パチパチと弾ける焚き火の薪を木の枝で続きながらもう片方の手でポーチの中をゴソゴソと漁り始めるイズモにため息を漏らす。

「空腹感はありません」

「おや、そうかい？ ならどうしたのかね？」

「いえ、その……」

今考えていたことを伝えようとしておもわずくちごもってしまふ。

エリステイルはよっぽど疲れが溜まっていたのだろう頭をヤクモの肩にもたれ掛けながらすすりすと静かな寝息を立てている。

「ふむ。そうだな、今君が考えていることを当ててあげよう」

「？ どういう……」

「『なぜあなたの太刀筋と自分の太刀筋はこんなにも違うのか』かな？ 当たっているかい？」

「……………」

凶星をつかれて思わず瞠目してしまう。

「くくく。その反応を見るに、凶星かな」

「……………はい」

素直に返すとイズモは面白そうに笑いながら素直だなど言いつつ、火の中から木の枝を離すと軽く左右に振った。

「何単純なとき。私の武器と貴君の武器。切れ味に差がある」

「切れ味」

「そう。切れ味……………も一つの理由なのだが。実はもう一つ重要なことがあるのだよ」

そういうとイズモは視線を焼き火からヤクモの方へ向ける。

「わかるかい？」

「重要なこと……………経験値でしょうか」

ヤクモの答えに満足そうにイズモは頷く。

「正解。太刀という武器はそれほどまでに奥が深いのだよ。微妙な力の入れ具合の



ミス、抜刀のタイミングの僅かな遅れ、刃がくい込む時の角度の多少のズレであったとしてもモンスターに与えるダメージは天と地ほどの差ができてしまう武器だ」

「それは、心得ております」

「うむ。そしてその絶妙な力加減や抜刀の合わせ方、刃の当て方は一朝一夕で身につくものではない。長い時間をかけて体に覚えさせていく技術であるわけだ」

「おっしゃる通りです」

「つまり、私は太刀を触っている時間が貴君よりも長いのだよ。故にその時間の長さが実力として現れているだけだ。貴君だつてこの先私と同じだけの時間を太刀コレと共に過ごしていただければ自然と身についてくるさ。焦ることは無い」

「……………」

「まだ不満かね？」

「いえ、そうではなく」

「さつきも言ったが、焦ることは無い。貴君のペースで身につけて行つてくれたまえよ」  
 そういふとイズモは再び視線を焼き火の方へ落とした。

そんな彼女につられてヤクモも視線を一度焼き火の方へ移してからもう一度イズモの方へ向ける。

そして

「私のペースで。理解致しました。太刀という武器の扱い方。それを理解した上で……イズモさん、あなたにお願いしたいことがあります」

「弟子は取らない主義なんだ、私は」

「そこをなんとか」

「断る」

即答で断られ一気に肩の力が抜けてしまう。

「……………」

「自分のペースで、と言っただろう？」

「はい。ですので目標、つまり具体的な到達点を明確にしておきたいのです」

「初めから到達点を決めてしまえば成長は出来ん」

「しかしその先のことを今の段階で考えられるほど実力が伴っていないのが現状ですの  
で。先へ進むにしてもステップというものがありません」

「……なぜ私にこだわる？太刀使いなら他にも沢山いるだろう？」

「それは……」

「それは？」

イズモが視線を上げる。

その瞳をまっすぐと見つめ返して自身の言葉を伝える。

「……イズモさんの太刀筋が今まで見てきた太刀使いの方達の中で最も綺麗だったから、です」

その言葉を聞いた瞬間、イズモは驚いたように瞠目した後ケラケラと笑い出した。

「わ、笑うこと……なのでしょうか……」

「はははは、ああ、これが笑わずにいられるか」

「……む、私の本心です」

「ああ、済まない、バカにしているわけじゃないんだ。だからそんな怖い顔を向けないでおくれよ」

「……ではなぜ」

「いや、貴君も太刀使いなんだと改めて思ったただけだ。すまない。くくく、そうだ。太刀を使う者はそうでなくてはならない」

一通り肩を震わせて笑いこけ、イズモが一息つく。

「どういうことですか?」

「そうだな。さつきまで実力だの経験だの色々垂れてきたが、太刀使いとしての道を歩むに当たって最も大切なことがあるのだよ」

「大切なこと、ですか」

「ああ、そうだ。それはな。太刀という武器に泥臭さを求めない、ということだ。いかに優雅にいかにか美しくいかにスマートに立ち回るか、それが最も大切なのだよ。その追求の過程にあるのが先程の経験と実力なのだ。だからそこに『美』を求めることが出来ない者のほとんどは太刀に向いてないのさ。まあ100%という訳じゃないがね。その点でいえば貴君は適任だ」

そう言い終わるとイズモはヤクモの隣にストンと腰を下ろし、笑みを浮かべながらヤクモの頭をポンポンと軽く叩いた。

「前言を撤回しよう」

「!そ、それって」

「ああ、弟子として認める」

「あ、ありがとうございます!」

---

こうしてヤクモはイズモの元に弟子として付き、同時に所属を古流観測所へと移した。

古流観測所の依頼をこなしつつイズモの元で太刀を学び、同時に新人育成のための教官としての草鞋も履くことになっていく。

当初はイズモの弟子として所属を古龍観測所へ移したと同時に教官としての依頼はキャンセルする予定だったが、イズモの指示で行うことになった。

そして、イズモの元に弟子入りしてからだいたいひと月が経とうとしていた頃。

ドンドルマ訓練所。

「……吾輩に変わって現地訓練を指導してくれることになった新しい教官を紹介する。

入れ」

扉の中からクロオビ教官の声が聞こえ、入室の指示が下る。

1度大きく深呼吸をしてから扉を数回ノック。

それからゆっくりと引き戸を開く。

カラカラと独特の音を響かせて扉が開くと部屋の中にいた生徒全員の視線がこちらへ集中するのがわかる。

「失礼致します」

一言声をかけて一礼。それから入室し壇上へ向かう。

そして、集まった生徒たちへ向けてもう一度ぺこりとお辞儀をする。

「紹介しよう。これからお前たちの教官となる『ヤクモ・ミナシノ』だ」

クロオビ教官の紹介を受けて自分も自己紹介に移る。

「ご紹介に預かりました。『ヤクモ』と申します。皆様が立派なハンターとなれますよう尽力致しますので、どうかよろしくお願い致します」

それから再度頭を下げる。

イズモの弟子としての生活と並行した教官としての生活がここから始まるのだ。

自身を磨き、そして次世代のハンターを育てる。

使命成就のために。

---

終着点は数多、しかしその全ては幾重にも重なり合って一人の若き乙女を中心とした



物語として紡がれていくことになる。

それはまさに、『八雲』のごとく……………。

閑話〔八雲立つ〕 終幕

↓ヤクモ・ミナシノの新人教育 前編

## ヤクモの新人育成譚

### 3. ヤクモ・ミナシノの新人教育 前編

ドンドルマ大衆酒場。

ゴグマジオス撃退戦からだいたい数ヶ月。

その日は特にクエストの予定も入っていないにもかかわらずヤクモは大衆酒場までわざわざ足を運んでいた。

それほどまで今日という日は特別であった。

「あ、いましたヤクモさんツス！おーい！ヤークモさーん！」

「悪い、待たせちゃったか？」

「いえ、私も今来たところですよ。レマさん、アカシさん」

静かに椅子を引いてカウンタ―席から立ち上がり、声の主達の方へ視線を向ける。

視線の先に立つ2人のうち男性の方は【氷<sup>ひょう</sup>牙<sup>が</sup>竜<sup>りゆう</sup>】ベリオロスの素材をふんだんに使用し、ヘルムから伸びる2本の角のような装飾が特徴の真っ白な『ベリオ・S』装備に身を包んでいた。

彼はアカシ・カイト。

現在は同じくベリオロスの素材から作成した太刀『バステイザンエッジ』を背負い、『伝説世代』の一角としてヤクモと共につい数ヶ月前にゴグマジオスを撃退したパーティの1人だった。

そしてもう1人。

彼の隣でこちらに向かって元氣よく手を振ってきている彼女もまた『伝説世代』の一角を担い、ヤクモ、アカシと共にゴグマジオスを退けたうちの1人だった。

レマ・トール。

そう呼ばれる女性は【蛮<sup>ばん</sup>顎<sup>がく</sup>竜<sup>りゆう</sup>】アンジヤナフの素材を使用した『ジヤナフ・S』装備と言われる装備で、臙脂色に近い色が特徴のメイルやグリーヴ、そしてポイントはメイルに取り付けられた黒い毛皮をマント状に加工して取り付けられている事だろう。

武器もあの百竜夜行の時に担いでいた『ウォーハンマーI』から蛮顎竜派生へ分岐さ

せ、さらにハンマー『蛮顎槌フラムスフィリ』にまで強化をさせていた。

両足をやられて動かせない状態でトドメの一撃をゴグマジオスにお見舞し、恐らくはそれが決定打となって撃退に成功したと言っても過言ではないレベルの功績を上げたハンマー使いの女性だ。

特にあの時彼女が放った一撃は『インパクトクレーター』と命名され、それも含めて語り継がれていくことになるのだが、それはまた別の話。

ちなみにあの最後の場面、3人が放った技には後にそれぞれ固有の名前が与えられ、レマの放った『インパクトクレーター』に続き、ヤクモは元々から覚えていた兜割りをさらに気刃状態で放った事で技の威力や連撃性能を段違いにまで昇華させ『気刃兜割』と正式に命名された。また、アカシの技に関しては翔蟲を使つて一気に距離を詰め一瞬にして切り抜けることで納刀と同時に時間差で相手を切り刻む『桜花鉄蟲気刃斬』と命名された。

レマとアカシに関しては本人達が翔蟲を所持していないにもかかわらず定着してしまったため、実は後にウツシとヤクモに色々と相談するハメになるのだが……………あ、これもまた別の話。

さて、話を戻そう。

大衆酒場の入口付近で両手をこちらに向かってブンブンと振っているレマに笑顔で

手を振り返しながらゆっくりと2人に合流し、アカシとレマの顔を順番に見回した。

「怪我の具合の方は如何ですか？」

「ああ、バツチリだ。流石にこの3ヶ月フィールドに出れなかったのは堪えたけどな」

「右に同じっす。あたしはアカシさんよりは早く退院は出来たものの昨日までずっと車椅子生活でしたンスよ。正直発狂するかと思つたツス……………色々と」

「みたいですね。私も昨日ようやく色々なところの包帯が取れまして。医師の方からも『完治』と言われました」

「でも、良いよなあ重症なのが腕か足かだったお前らは。俺なんか肋骨全壊だぜ？むしろよく生きてたよ」

「爆発引つ掻きと体当たりをモロにもらつてたっスもんねくアカシさん。装備に感謝しないといけないツスよあれは」

「今めっちゃくちや感謝してるわ。マジで強化させといて良かったって思つてる。おつそろしいな。とは言えよ。お前だつて足踏まれただろ？最後の方なんか立ち上がることも出来なかつたじゃねえか」

「そりや足の骨粉々でしたツスから。あの感覚本当に気持ち悪いンスよ。下半身が全く動かせないンスから。あれホントにトラウマ級ツス。もう逃げられない恐怖」

「あれはお前だけじゃなくてこつちもかなりのプレッシャーあつたんだぞ？なあ？ヤク

モ

「ほんとに!？」

「はい。少しでも立ち回りを失敗したらと思うと迂闊に動けなかったですよ。全身が軋む音と激痛を感じながら一瞬でも集中力を切らすことは許されず、動きを止めることも出来ず動き続ける必要がありましたから」

「全身バツキバキで動きながらミシミシ音が聞こえてくんのよ。自分の体から」

「うわ、それもそれで嫌ツスね……………」

3人並んで歩きながら他愛もない話題から先日 of 撃退戦、入院中の出来事等々、話し始めたらキリがない。

話の話題が途切れることなく時に笑みも混じえながらドンドルマの街を歩み進めていく。

「ふふ、でも2人ともお元気そうで安心しました」

「ま、あたしは元気だけが取り柄ツスから。真っ直ぐ行ってぶっ叩くのがウチの信条ツスし」

「ただ細かいことを考えられないだけのくせによく言うぜ」

「それがレマさんの個性という事でいいではないですか」

「さっすがヤクモさんツス!あたしのことちゃんとわかってくれてるツスね!

……どこぞの『ア』がつく薄情者とは違うツス〜

不意にガバツとヤクモに抱きつくレマ。

「薄っ!?……………お、お前な!」

そんなやり取りを交わしていると3人はドンドルマの街の入口へたどり着く。

特に門だとか壁だとかそんな大層なものは存在していないが街と外の境界だとはつきりと分かるほどには3人もこの街でお世話になっていた。

そんな3人の別れの日。

それが今日この日であった。

3人が全員怪我が完治し戦線へと復帰できる日。

故に特別な日。

「あ、もうこんなところまで来てしまっていたのですね……」

そんな呟きと共に足を止めたヤクモの横をアカシとレマがゆっくりと通り過ぎていく。

街境を挟んでもう一度向かい合いお互いの顔を確認しあった。

「ここでお別れか。……………一応もう一度聞くけど、良いのか?」

「ヤクモさん、本当に一緒に来ないんスか?」

寂しように眉をへの字に寄せるレマの横でアカシは腕を組んだ。

「はい。お誘い頂いて本当に嬉しいのですが。流石にこの街のハンター層を薄くする訳にも行きませんし。いつまでも『伝説世代』この四書を頼りっぱなしではこの先変わっていけないと思うので。私はこの街で次の世代を育てます」

「そうか……………寂しくなるな」

「……………ぐすつ」

「大丈夫ですよ。ほらレマさんも泣かないでください。もう今生の別れという訳でもないのですから」

彼女にしては珍しく涙する姿にゆっくりと肩を抱きしめて背中をトントンと叩く。

「もし何か困ったことがあったりしたら遠慮なくまた戻ってきてください。いつまでも私は待っていますから。この場所です。いつ帰ってきててもいいように部屋も掃除しておきますから。だからもう泣くのはやめてください。レマさん」

「うう……………うん、約束……………あたしも約束する……………つす……………ぐすつ……………！」

ゆつたりと体を離すと、目尻に浮かんだ涙を軽く指で拭い取り、レマがいつものようにパツと笑顔を向けた。

「はい、約束です。それから……………」



そんなレマに安堵の笑みを浮かべたヤクモがその視線を今度はアカシに向けた。

「?いや、俺はそういうのは良いよ」

「遠慮してるのですか?」

「違えよバカ。俺はさあんまり湿っぽいのは嫌なんだよ。知ってんだろ?」

「ぐすつ……………そうだったツスね。アカシさん」

「そうでした。ふふ」

「だろ?だからさ、これ」

そういうとアカシはにと笑みを浮かべながら右手に拳を作ってヤクモの前に突き出した。

「そうツスね。流石アカシさんツス。シンプルでわかりやすいツス」

続いて突き出された拳に向かってレマも右手の拳を差し出し、最後に2人がヤクモの方へ視線を向けた。

「ですな」

ふと小さく笑を零しながら2人に遅れてヤクモも突き出された拳に向かって軽くコツンとつき当てるようにして応えた。

3人の拳が1点で突き合わされる。

「わかっているとは思いますが、アカシさん<sup>あ</sup>とレマさん<sup>な</sup>の訃報<sup>た</sup>なんかは聞きたくありま<sup>連</sup>す

せんから。それだけはご了承願います」

「当たり前だろ？ お前こそ、俺らのいない所で撃墜されたとか勘弁してくれよな」

「信じているツスよ、ヤクモさん」

「任せてください」

その言葉を最後に3人は突き合わせていた拳を元に戻す。

「それじゃあ俺たちはそろそろ行くぜ。ま、次に寄った時に土産話用意しといてやるから楽しみにしとけよな」

「ヤクモさんがビックリするような大物を倒してお土産にしてあげるツスから楽しみに待っていてくださいっスー！」

「はい、楽しみに待っていますね」

それからゆっくりと離れていく2人の背中を見送っていると、ちょうど太陽も真上から西に傾き出していた。

「ふう。さて、それでは私も気合を入れていきましよう」

よし！と気合いを入れ直したヤクモは腰巻に下げていたポーチからヘアゴムを取り出し、手馴れた手つきで後髪を括って1つに結び上げた。

1  
ヶ  
月  
後。

↓  
水  
☒   ◇?  
八  
雲  
の  
章  
へ

ドンドルマの大衆酒場に隣接された新人ハンター御用達、通称『訓練所』にて将来ハンターを目指す男女がざつと数えて10人ほど教官によつて招集されていた。

全員が初期の装備としてレザー装備を身にまとい、片手剣の『ハンターナイフ』を腰に差している。

座学を終えたばかりで今日初めて武器と装備を支給されていることもあり、訓練所内はガヤガヤとどこか浮き足立っている様子は誰が見ても明白であった。

「静まれ。全員いるな？」

そんな訓練所に一際大きな声が木霊する。

クロオビシリーズと呼ばれる各所にオレンジ色が散りばめられた装備で腕を組む男性は、このドンドルマ訓練所を総括している人物だ。

名前は彼が頑なに明かそうとしないため弟子や街人含めて『教官』と呼んでいる。

その教官は部屋前方の一段上がった壇上で腕を組みながら集まった10人を見渡してから再び大きな声を出し始めた。

「諸君。先日まで座学講習ご苦労であった。ここににいる者は座学最終日に行った試験の結果から上位10名をここに招集させてもらっている」

その一言に訓練所内が再びざわついた、がすぐにそれも収まった。

「静まれ！諸君らをここに集めたのは他でもない、本日よりハンター教育プログラムを次の段階へ移行させるために集まってもらった。つまり……………実地訓練だ！」

再び歓喜の声が訓練所内に飛び交い始める。

「装備を支給されたことで薄々は勘づいていたかもしれないが、実地訓練とは言え気を抜くことは無いように！遊びでは無いことを自覚するのだ！一人一人がハンターとしての自覚を持つて……………」

そう教官が話すもののついに念願のハンターの第1歩として現地に赴くことが出来るその喜びが前面に出てきてしまっている10名。

そんな彼らの耳には既に教官の言葉はほとんど届いていないことだろう。

溜息をつきながら片手で頭を抱える教官。

「浮かれるなど言っているそばから……………まあいい、今は何を言っても耳に入らないだろう。それともうひとつ！」

最後の一言の音量によってガヤガヤとしていた訓練所内がパタツと静かになる。

「それに伴って、吾輩に変わって現地訓練を指導してくれることになった新しい教官を紹介する。入れ」

その言葉のすぐあと。

扉を数回ノックする音を響かせてからゆつくりと引き戸が開かれる。

「失礼致します」

澄んだ声色に鮮やかな黒髪を後ろで一つに束ねた女性は、律儀に一礼してから扉を閉めてゆつくりと壇上へ。

それから訓練生10名の方へ体を向けてぺこりとお辞儀をした。

「紹介しよう。これからお前達の教官となる『ヤクモ・ミナシノ』だ」

「ご紹介に預かりました、『ヤクモ』と申します。皆様が立派なハンターとなれますよう尽力致しますので、どうかよろしくお願い致します」

ヤクモは手短かに挨拶を済ますと再び深深と頭を下げた。

同時に拍手喝采が巻き起こる。

それに交じってかなり小さな声で「(なんか今度の教官は優しそうだな)」「(ほんとクロオビじゃなくてホツとしてるよ俺)」みたいな内容のひそひそ話も聞こえてくる様子。

「うむ。ではヤクモ。今日から頼んだぞ。先日打ち合わせで決めた通りにこなして貰って一向に構わん。責任は全て吾輩が持つ。何か問題があれば吾輩に言ってくれれば良い。手をかせることであれば全力でサポートしよう」

「承知致しました、教官殿。それでは……………その、早速で申し訳ありませんが、皆様の名前を覚えていただけないでしょうか？知っていた方が何かとやりやすいですし、親しみやすくもなると思いますので」

はにかむように微笑んだヤクモの元に訓練生（主に男性）が我先にと押し掛けたのは想像に容易かった。

### 3 ヤクモ・ミナシノの新人教育 中編

カタン。

慣れると心地よく感じてくる揺れの中、ヤクモはランプの炎に照らされながらデスクの上に広げていた手記をパタンと閉じる。

「ふう。今日の分の手記は書き終えました。少し外の風でも当たってきましようか」

未だに足元がゆらゆらと揺れてはいるがそんなことはお構い無しだと言わんばかりの足取りで部屋の入口へ向かい、扉を押し開けた。

そこでまず目に飛び込んでくるのは辺り一面に広がる紺碧の大海原。

潮風に靡く髪を軽く抑えながら部屋の扉を閉めて甲板の方へ足を運ぶ。



そこでは船頭のアイルーが部下アイルーたちにやーにやー指示を出しながら舵を握っていた。

「うにや？ヤクモ殿、少し騒がしくしすぎてしまいましたかな？起こしてしまつたのでしたら申し訳ないのですにやー」

「いえ、お気になさらず。自室で手記を書いていただけですので。ちようどキリも良いので夜風に当たろうと思つただけですよ」

「なるほど、アカシ殿やレマ殿……………それから他の『伝説世代』への手土産、という訳ですよ」

「あはは、やはりわかかつてしまいますか。頭が上がりません」

苦笑いを浮かべながらこめかみをポリポリと搔き、船頭アイルーの隣へ腰掛けた。

そのおかげでちようどヤクモの目の高さと船頭アイルーの目の高さが同じとなる。

「にやあく、アカシ殿前とレマ殿達、ヤクモ殿人が狩場へ出る時はいつもにやーが船頭だったしにやく。大抵の事は分かるんだにや」

「いいこと言つてはいますが語尾で締まりませんね」

「種族柄これはどうも直せにやくて……………つて、大きなお世話にや。あと数時間で着くんにやからお前さんはしつかり体を……………」

ため息混じりに舵を切る船頭アイルーの言葉が終わらぬうちに、一匹のアイルーが大

慌てで走ってきた。

何やら急ぎの用事のように必死に船頭アイルーに向かってにやーにやーゴロゴロ何かを訴えている。

文字にするとなかなかホンワカした様子ではあるが実際の慌てようはただ事では無さそうなほどに取り乱していた。

そのアイルーの訴えを同じくにやんにやん言いながら真剣な表情で頷く船頭アイルーの様子からもただ事じゃないことは重々伝わってくる。

「にや、にやんだって!!」

「船頭アイルーさん、どうしたのですか?」

「ヤクモ殿、緊急事態にや」

「緊急事態?」

「にや。ロアルドロスが接近しているようなのにや! ひつさびさに海上でモンスターとご対面だにや。いつもならパパッと振り切るところなのにやが……………」

ロアルドロス。

そう呼称されるモンスターは別名「水獣」と呼ばれ水辺を好む海竜種に属する大型モンスターだ。

特徴はその黄色い鬣たてがみで後頭部から後ろ足にわたって長く伸びている。

ハンターへ依頼がある場合は大抵繁殖期へ入ったルドロス達の水分補給のため陸上へ上がったロアルドロスが付近を通過する商隊を襲うかその可能性がある場合、もしくは突如として現れたロアルドロス一行によって海域が危険にさらされた場合が主となる。

稀に今回のように事前情報も無いまま襲われることもあることにはあるが、いずれにしても取り巻きのルドロスにも注意を払う必要があるため単騎では苦戦を強いられることもよくあるモンスターだった。

しかしそれはあくまでロアルドロスが周囲にルドロスを複数従えている場合に限る話であり、今回のようにロアルドロス単体で襲ってくることはかなり珍しい。

単体であれば熟練のハンターレベルならしつかりと対等に渡り合うことも容易な相手だ。

それこそ現在ののように予想外の事態でアイテムが不足している状況だとしても。

ただ、今回だけはいつもと状況が違いすぎる。

「はい、海上に慣れていない訓練生を置いて行くわけにも行きません……………」  
「海上でパニック起こされたらそれこそ收拾つかないにや」

現在は今までのように自分一人だけ、つまり単独での狩りではない。

教官として訓練生も一緒に引き連れているわけだ。

それも今日がハンターとして現地に赴くのは初めてだという見習いの見習いレベルの生徒たち。

訓練所で自己紹介をしてもらった中には冷静に考えられる人に勢いでその場を乗切る感覚派の人、それに加えて奥手の子等々様々な性格の子が揃っていたため1人くらいパニックを起こしてしまう可能性も否定は出来ない。

もちろん全員臆することなく状況を整理出来るに越したことはないがそれを今の訓練生に期待するのも酷な話だろう。

それはおいおい身につけて行ってもらえれば問題ない。

ヤクモは数秒間の思考を経て船頭アイルーへ1つ案を提案した。

「でしたら、船頭アイルーさんは残って船のバランスに尽力してください。ロアルド口スなら私が」

「にやあ……………確かに今の状況ではそれが最善かもしれないにや」

「夜明けには合流します。船頭アイルーさんは私に構わず訓練生達をテロス密林に送り届けてください」

「承ったにや」

「にやー!!にやにやー!!」

「にやーにやー!!方向は7時、あと15分で接敵らしいにや。ヤクモ殿そっちは任せる

「にや！あ、船室に酸素玉と多分イキツギ藻もあつたはずにやから使つて欲しいにや！」  
 「恩に着ます」

バタバタと自室へ戻つて『たまのをの絶刀の斬振』を背負い、アイテムを選別して水中戦用のポーチを棚から引つ張り出してその中へ詰め込んでいく。

翔蟲に目がいくが、流石に水中では機能しなさそうなので今回は置いていこう。

……………やっぱり念の為一匹だけ……………いや、慣れない環境で衰弱してしまつては元も子もない。

今回ヤクモは回復薬グレートまでは持つてこなかつたため回復薬、酸素玉、念の為に捕獲も考えて麻酔玉……………は水中では意味無いか。

「とりあえず、彼らが起きた時に事情は説明はしておくにや！」

「ありがとうございます！それとドンドルマへ打電もしておいてもらえると助かります、この迎撃はクエスト外なので！緊急を要するとはいえ報酬はくださいと」

「ヤクモ殿……………お前さんはそんなキャラじゃにやいと思つていたにや……………」

「じよ、冗談ですつて。でも一報はお願い致します」

「心得たにや！」

船尾側へ急いで周り、状況経過を観察していたアイルーのジエスチャーを確認しながら

ら視線を海の中へ潜り込ませる。

確かに夜の海でもわかるような黄色い体色のモンスターはロアルドロス位のもだろう。

目視による確認もできた。

「にやにや、にや！（ぐ）武運を！」

「ありがとうございます。それでは、行ってまいります。ヤクモ・ミナシノ、抜錨します！！」

そう高らかに宣言し、背中に背負っていた武器を抜刀してからザブーン！と海の中へ入り、迫り来るロアルドロスの前へ躍り出た。

◇？

密林。

早朝の海岸ベースキャンプ。

「訓練生達全員起きるにや〜!!現地に着いたにや〜!!ほらほら早く起きるにや〜!」  
ガンガンガンガン!!

この日はドンドルマ近辺の港から一緒に乗船してきていた船頭アイルーが奏でる銅鑼の音によつて始まった。

「ほらーせにやー!シャキツと!するにやー!シャキツと!」

船頭アイルーは片手用の銅鑼を持ちながら未だにぼーつとしている見習いハンター達にドロップキックをかましたり銅鑼で頭を叩いて回っている。

さすがに女性陣にドロップキックをする訳にもいかないのかそちらには部下のアイルー達が猫パンチを連続でペシペシさせていた。

「着いたにや！着いたらすぐに近辺の哨戒とベースキャンプの設置だにや！とつとと2班に別れて行つてくるにや！」

船頭アイルーの気迫に押されながら、ついでに背中も蹴られながら訓練生達が話し合の末哨戒班とベースキャンプ設置班に別れた。

「哨戒と言つても遠くまで行くのはNGだにや！にやーの目が届く範囲でいいにや！」

ベースキャンプの設置と周辺哨戒。

ベースキャンプとはクエストをこなすために密林や砂漠といった自然の中へ赴いたハンターのいわば簡易的な部屋と等しい意味を持つ。

就寝、食事、休息、武器のメンテナンスや道具の整理など用途は様々で、それと同時にハンターにとつては無くしてはならない必須のものでもある。

狩りによつてはどうしても長丁場になる場合もあるし、思いのほか道具類の消費が激しく手持ちが切れかかる時も日常茶飯事のようにある。

しかしポーチの中に入れておけるものにも限度というものがあるわけで手持ちとしてもつて行ける分とは別に補充分の道具も持つて行き、クエストの途中でベースキャン



プに戻ってきて道具の補充をするなんてこともざらだった。

それがベースキャンプの役割。

しかしながら、場所はどこでもいいのかと言われれば、一概にそうとも言いきれないのも事実である。

休息中にモンスターに襲撃されたなんて言われたらそれこそ元も子もない。

だからベースキャンプ設置の時は必ず一度を哨戒してからモンスターの気配が無いことを予め確認しておく必要があるのだ。

着いたら既にテントが張ってあつて準備万端なんてことは残念ながら存在しない。

船頭アイルーの指揮の元ベースキャンプ設置班は着々とテントを準備し終えていき、哨戒班も船頭アイルーの部下とともにしばらくしてから戻ってきた。

「?おや? そう言えばヤクモ教官の姿が見えないようですね」

「あ、ほんとだ、確かに居ないね」

「全く、優秀な私の教官であることにもう少し誇りというものを感じて欲しいものですわ」

哨戒から戻ってきた5人のうちクールな少年と快活な少女、高飛車な少女が不意にそんなことを口にする。

「あのホンワカした教官のことだからまだ寝てんじゃねえの?」

2人に反応するベースキャンピング設置班の赤髪の少年がケケツと笑いながらカコンとテントを固定する杭をハンマーで固定した。

「ああ、ヤクモ殿はちよつと野暮用に出かけているだけだにや。そろそろ戻ってくる頃なんにやけど……………」

ん〜と船首の上で腕を組みながら唸る船頭アイルー。

「それか、俺らが寝てる間に船から落ちた、とかな」

「いや、流石にそれはないじゃないかな」

再び赤髪の少年が次の杭を打ち込みながら言ったのを隣で聞いていたメガネの少年が苦笑いを浮かべながらやんわりと否定した。

「……………喋る暇があるなら、手を動かして」

赤髪とメガネの近くで杭打ちを行っていた眠そうに目を半開きにさせた少女が呆れたように淡々と言葉を話す。

「あいにくだが、少なくとも俺はお前よりは貢献してるけどな」  
「……………」

反論ついでに嫌味も織りませる赤髪の少年だが、眠そうな目の少女の無反応さにケツと鼻を鳴らす。

「相変わらず愛想後ねえやつ」

「おーいおーい！向こうの準備は終わったけどこっちでなんか手伝うことあるか？俺手が空いたから手伝えることがあったら手伝うぜ？」

同時にフレンドリーな少年も加わる。

彼は先程までクールな少年や快活な少女達と共に哨戒へ出ていたのだが、戻ってくるや否やベースキャンプ設置班を自ら手伝ったり、女性陣のサポートを率先して行っていたりと行動力や気の利き方は良い方だと評価できた。

一応班わけを纏めておくと、

哨戒班

・クールな少年

・快活な少女

・高飛車な少女

・フレンドリーな少年

・つり目の少女

ベースキャンプ設置班

・赤髪の少年

・メガネの少年

・眠そうな目の少女

・天然っぽい少女

・無口な少年

のそれぞれ5人ずつのグループに別れていた。

性格もバラバラなこの10人が今回ハンターへの道を1歩踏み出した訓練生の面々である。

そうは言ってもまだまだ纏まりなんてものはほとんど存在しておらず、性格だけでなく目的含めて全てがバラバラのままだ。

哨戒から帰ってきてベースキャンプ設置班の手伝いを率先して行っているフレンドリーな少年とは裏腹に、他の4人は手伝う素振りも見せずにクールな少年と快活な少女、それから高飛車な少女はまとまって話しており、つり目の少女に関しては1人で勝手に密林の方へ入っていきこうとする始末。

そんなつり目の少女は船頭アイルールの部下達数匹ににやーにやー言われながら足を掴まれて止められている様子。

設置班の方も設置班の方で一見すると手分けして作業をしているように見えなくもないが、よく見ていると眠そうな目の少女は杭を打ち付けてはいても最初からずつと一本の杭しか叩いておらず、天然っぽい少女はハンマー片手に頭の上にはなマークをかべたまま何かを考え込んでいる。それを無口な少年がジエスチャーで作業を教える

いるがそれも伝わっていないようで「あらあら〜♪」とにこやかに空返事を返しているだけだった。

赤髪の少年とメガネの少年の2人は出身が同じなのかこの10人の中では最も仲が良く色々話し込んではいいるのだが、本人が言うほど重要な作業はひとつもこなしていなかった。

つまり、ベースキャンプ設置に関してはほとんどの作業を人当たりの良い少年が1人でこなしていたと言るのが正しい。

そんな様子を船首の上から眺めていた船頭アイルーはため息をついた。

その時。

船の後方で海上の方を見張っていた部下アイルーがパタパタと走ってきて船頭アイルーに「やーにやーにやー耳打ちをする。」

「にや? ロアルドロスが!? あれはヤクモ殿が足止めしてるはずにや……………」

直後。

ザバツ!!と海の方から巨大な水音が響き渡る。

訓練生10人の視線が一気に海上の方へ向けられた。

その視線の先でもものすごいスピードでこちらに向けて接近してくる黄色い巨体が水面を切り裂く。

「な、なんですかの!? アレは!」

「あの黄色い体は……………た、確か…………」

「な、なんでもいいけど、こっちに向かってくるよ!」

「あれは、ロアルドロスか」

「ほへー、まじかよ早速お出ましか! うっはー腕が鳴るぜ!」

高飛車な少女の言葉にとっさの出来事でモンスター名をド忘れするクールな少年、その少年の腕にほぼ無意識に近い条件反射で抱きついた快活な少女。

その隣をゆっくりとつり目の少女が通り過ぎ、そのまま腰に指した武器に手をかけた。

フレンドリーな少年も大はしやぎで隣に並んではつり目の少女に心底嫌そうな視線を向けられていた。

「ロアルドロスって……………まじかよ」

「まさか、あれが今回のターゲットなのですかね」

「あらあら、意外と大きいですね」

「っ……………」

「……………あれが、モンスター…………」

さすがに予想外ではあったのか赤髪の少年も若干たじろいでおり、それを冷静に分析

するメガネの少年。

緊張感の欠けらも無い言葉を発する天然っぽい少女の後ろに隠れてしまふ無口な少年、その隣で眠そうな目の少女は海上を注視しながらゆっくりと立ち上がった。

「全員迎撃準備にや！」

船頭アイルーのその一言によって10人が一瞬にしてざわつく。

「げ、迎撃!?あの、僕ら今日が初めての狩りですよ!」

「そうですわ。それはさすがに無謀と言えるのではなくて?」

「じゃあロアルドロスの前で同じことを言ってくるのいいにや」

「……………」

ぐうの音も出ないとはこの事で、狩場に足を踏み入れた以上そこは既に殺伐とした自然界に身を投じているに等しい。

故にモンスター側からしたらそんなことは知った事じゃない。

船頭アイルーの一声によって10人全員が沈黙し、迎撃準備をし始める。

そんな時。

ザバツ!

と音を立てながらロアルドロスが海上へ飛んだ。

幸いまだロアルドロスまで距離はあるため飛沫がこちらまで飛んでくることは無

かったが、代わりにロアルドロス of 鬣あたりに突き刺さる一本の太刀が目飛び込んでくる。

その柄をしっかりと握りながら水の流れに身を任せるようにしたヤクモがロアルドロスにしがみついていた。

「……………ぶは……………けほけほ……………ん？ おや、やはり目指していたのは密林でしたか。物は試ししようとはよく言ったものです。みなさー！ 無事に着いたようですよ！ お怪我はありませんかー！」

まるで装甲車に捕まる兵隊が如く突き刺した太刀を片手でしっかりと固定させながらも片方の手を海岸線で待つ訓練生の方へ大きく手を振る。

それから船の船尾辺りでこちらの様子を見ていたアイルーに簡単なジェスチャーを送るとそのアイルーはにやつ！と一言言って船室の方へ駆けて行った。

「あれ、教官……………だよな？」

「は、はい……………僕の目に間違いがなければ……………」

「こっちは全員無事にや！ お前さん何してんだにやー!! 遅刻もいいとこにやー！」

赤髪の少年が語尾を疑問形にしながら声を出し、それに対してメガネの少年が反応する。

「す、すみません船頭アイルーさん。あ、ベースキャンプも設置しておいてくれたのです



ねー!! ありがとうございます!!!」

決して大声という程でもないが、彼女の声はやけによく響く。

しかしそうも言つてはられないのが現状ではあった。

こんなやり取りをしている間にもロアルドロスには自分の体に付いた異物を振り払おうと縦横無尽に暴れ回りながら海中を走り、ついでに浜にもどんと近づいている。そんな状況で、ついにロアルドロスが訓練生のいる浜へ上陸しようとするその寸前。

不意にヤクモが大声を出した。

「閃光玉!!!」

10人<sup>!</sup>の訓練生がビクリと体を震わせる。

が、その硬直もすぐに解け各々条件反射のように素早く右手を動かした。

次の瞬間。

浜へ上陸したロアルドロスの前で閃光玉による激しい閃光が弾けた。

そのせいで両目を焼かれたロアルドロスが仰け反り、動きを止める。

しかし訓練生の視線はとある1点に集まっていた。

それは閃光玉を投げた張本人へ向けて。

「……………残念。今回はにゃーの一人勝ちにゃ♪」

ここにいる訓練生の誰よりも早く閃光玉をロアルドロスの目の前へ放った船頭アイ

ルーがしてやったりとでも言いたげな表情でにやりと笑う。

「流石です船頭アイルーさん」

「言ったにや。大抵の事は分かるつてにや〜」

直後、甲板からでてきたアイルーから投げられたアイテムを掴むとそのまま怯んだ口アルドロスを蹴つて太刀を引き抜き、翔蟲を当てる。

そして、そのまま大きく上空へ舞い上がり、太刀を上段で構える。

「秘技、兜割りっ!!」

キン！という軽い金属音を響かせてヤクモが握る太刀がロアルドロスの脳天を捉え、直後の連続した斬撃によってロアルドロスは断末魔の叫びを上げながら絶命して行った。

「どうか安らかに……………南無」

絶命と同時にパチンと太刀を納刀し終えたヤクモが、息絶えたロアルドロスに1度手を合わせてからゆつくりと立ち上がって振り返る。

「ふう、さて、皆様ご無事でなによりです。一応聞いておきますがお怪我はありませんか？」

水を吸いに吸い込んだ袴をギュツと絞りながらそう問いかけるヤクモに訓練生は揃って首を横に振って答えることしか出来なかった。

「そうですか。それなら良かったです。さて、皆様のおかげでベースキャンプも出来上がっているようですし、早速訓練クエストの内容をお話しましょう……………」  
あ、すみません、ちよつと日向に出させてください……………くしゅん……………はあ

そんな先の訓練生とはまた違ったベクトルで緊張感の無いヤクモに訓練生の方もだいぶ緊張も解れてきた様子。

初めての一発目でロアルドロスと正面から対面してこの調子であれば問題は無いだろう。

「くしゅつ……………あ、す、すみません。訓練の内容でしたね」

「教官、風邪とか引かないでくださいよ?」

「だ、大丈夫です。いいから内容を話しますからね」

「あんな大型モンスターと対面を果たした私達にできないことはありませんわ♪なんなりと仰ってくださいな。特産キノコですか?」

「いえ、違います」

「え?じゃあ、確かアプトノスとかケルビとか草食系のモンスター?」

「それも違います」

「……………じゃあなんのために来たんだよ」

「まあ、そうですね。ではここに来た理由をお話します」

そう言うと訓練生が息を飲む音が聞こえる。

そしてワンテンポ置いてからヤクモは人差し指を立てながら満面の笑みでこう言った。

「皆さん、【陸の女王】リオレイアと遭ってきてください♪」

直後。

その場がまるで雪山かと言わんばかりの温度にまで低下した。

## 3. ヤクモ・ミナシノの新人教育 後編

密林。

からりと晴れた空に訓練生達の叫声が響き渡った。

「リ、リオレイアって、正気ですか!？」

「そんなの自殺行為だろ！」

「リオレイアって……………あのリオレイア? いやいや、無理無理無理!!」  
「……………」

そんな抗議の声が上がる中、ヤクモがスッと笑顔を引つ込めた。

「それがどうかしましたか?」

その一言によって訓練生が再び黙り込む。

「もとより私たち『ハンター』という職業は見方を変えれば自ら死地へ赴く自殺行為とさほど変わりません。それを理解した上であなた方はこの世界へ足を踏み入れることを決意したのでは?」

「それは……………」

訓練生が口籠る。

「ハンターはその性質上いつ命を落としたとしても何ら不思議ではない立場にあるのです。モンスターに対峙した時点でまずは窮地。それを乗り越えて討伐ないし撃退をすることが出来れば周囲からは感謝されることでしよう。しかし、失敗した場合、高確率で命を落とします。先程のロアルドروسの例で言いますが、船頭アイルーさんの閃光玉がなかった場合、どうなっていたと思いますか？」

「し、しかし……過去の訓練でも初日のクエストは採集がメインだったとクロオビ教官から聞いていました。であれば僕らも過去の事例に従うべきだと考えます！」

「確かに本来であればそうでしょう」

「ではなぜ！」

「そうですね、では私からも一つお聞きしましょう」

「……………」

「過去、その採集クエストでいったい何人の命が散ったと思いますか？」

ぞわりと一瞬にして空気が冷える。

そう感じるほど体が強ばっていく10人の訓練生。

「では、リディさん。何人だと思いますか？」

「え!? わ、私!？」

いきなり名前を呼ばれた快活そうな少女が自分を指さしながらキョロキョロ視線を

泳がせる。

「はい、そうです。あなたは何人だと思えますか？」

「あ、えつと……その、でも採集クエストで命を落とすなんて………毒キノコにあたってとか毒を持った虫に刺されたかでしょう………それでも0だと思えます」  
「なるほど。ではミコさんはどうですか？」

相槌を打ってから今度はつり目の少女に向けて質問を投げかけた。

「何人亡くなったと思えますか？」

「0だ。採集程度で死ぬわけが無い」

「そうですね。もう1人くらい聞きましようか。では………」

そう言うって視線を動かすヤクモに硬直しきってガチガチに固まってしまった訓練生達。

「エミールさん。どう思いますか？」

ビクツと名指しを受けたメガネの少年がクイツとメガネを上げながらおずおずと回答を述べる。

「ひ、1人か……2人くらい？」

「おや？それは本音の回答でしょうか？」

「あ、い、いえ………」

「なるほど。まあ、予想の範疇ですので問題はありませんが。正解を言いました。正解は……………」

ふと瞳を閉じて黙祷を行いながらゆっくりと正解を告げた。

「……………過去、ドンドルマから排出された新人ハンターの数と訓練生の数から導き出した数はざつと74名中48名。」

ゾワツと訓練生たちの背筋が凍りつく様子がその表情から読み取ることが出来た。

「そ、それって、つまり……………」

「はい、数値化すると64.9%の新人ハンターが最序盤の採集クエストで命を落としています。加えてこの統計はドンドルマのみの場合となります。今やハンター養成所、もと訓練所は各地の至る所に存在しています。近隣に巨大な雪山のあるポツケ村、英雄伝で有名なココット村、それからジャンボ村にユクモ、モガ、そしてカムラもそうですね。今あげた以外にも拠点はありますが、これ程多くの拠点から同程度の死者が出ていると考えてみてください。」

「……………まじかよ」

「もつと簡単に例えるなら……………」

ワンテンポ間を置いてからヤクモが続ける。

「この10人の中で生き残ることが出来るのはたったの4人しかない、という事です。」



まあ、答えは明白ですよね？毒虫や毒キノコの類では無いとしたら……………」

「……………モンスター、ですわね」

「(名答) 流石はルシアさんです」

高飛車な少女、ルシアの答えに軽く拍手を交えながら答える。

「はい。その48名のうち死因の9割9分はモンスターの襲撃によるものです。なにか勘違いをしているようですので訂正しておきますが、1歩でもこの地に足を踏み入れたならもう私たち人間のルールなんてまかり通るわけがありません。全ては大自然がルールです。つまり、私たちが初心者だからと言っても戦い慣れしていないと言ってもこの自然からしたらなんのことも無いのです。弱肉強食の世界に於いて弱者は淘汰されゆくのみ。故に採集クエストとは言えモンスターは当然襲つてきます。中には大型種に属するモンスターも徘徊していますね。私達からすれば何も苦戦することは無い小型モンスターのランポスであったとしても訓練生諸君には十分脅威と言えるでしょう」

「それでも比較的安全なタイミングで受けてくれたんじゃ……………」

「安全なタイミング？狩場において最も安全な場所、それは即ち、ベースキャンク以外に存在するわけありませんよ。だから唯一の安全地帯として確立するために周囲の哨戒は必要不可欠な要素です。それを疎かにしたが故に散った仲間も私は目の当たりにし

てきました」

誰も何も言い返せないまま無言の時間が過ぎていく。

そんな10人の顔を見渡してからヤクモは少しだけ語調を強めながらはつきりと伝えた。

「しかし、ここまで脅しておいて申し訳ありませんが、心配しないでください。あなた達のことには私が見る以上絶対に死なせたりしません。私にしつかり着いてくればそんなことには絶対にさせません。まあ、死ぬほど辛いかもしれませんが。将来しつかりと活躍出来るような、安心して狩りを任せられるようなハンターに育てます。それを踏まえただで今ここであなた達に選択肢を与えます」

「選択肢？」

「はい。単純な選択肢です。私のこのクエストを、<sup>受ける</sup>承諾か<sup>受けない</sup>離脱か。その二択です。<sup>受ける</sup>承諾場合はこのまま進みます。しかし途中離脱は認めません。逆もまた然り、途中からの合流は出来ません。30分ほど時間をあげますのでよく考え、その上で<sup>受ける</sup>承諾者は私の元へ来てください」

……………そう言つてテントの中へ戻つてきたヤクモであつたが、簡易的な椅子にストンと腰を下ろすとはあくど大きなため息を吐き出してしまった。

「はあ……………まだ駆け出しの子達だと言うのに、私は何を説いているのでしょうか……………これを理解するのはあの子達には早すぎると頭ではわかつているのですが……………はあ……………」

「なーんにやお前さん、様子を見に来てみればでつかいたため息にやんてついて」

「船頭アイルーさん……………」

「ま、最初のパンチにしてはかくなり強めに殴つたとは思うけどにや。鳩尾会心で入つてたにや」

「やっぱり……………」

椅子の隣にある木箱の上でケラケラと笑う船頭アイルーの言葉で再びため息をついた。

「でも、【そのくらいの気概は持っていて欲しい】ってことにやゝ？どの道遅かれ早かれその事実には直面するんにやから気にすることないにやゝ」

「そう言っていただけとありがたいです。それよりも……………はあ、全員来てくれるでしょうか」

「……………考えてなかったのかにや。来なかったらどうするつもりにや？」

「それは……………な、泣きます」

「お前さんが言うのと冗談に聞こえにやいんだにやゝ」

「はあ…………」

そんな思わず漏れた大きなため息をついたすぐ後だった、自分の名前がテントの外から呼ばれたのは。

「教官！」

？

なにか質問ごとだろうか、まだ時間を与えてからほんの数分しか経過していないはずだが。

「はい。なんででしょうか。質問です……………か？」

そう言いながらゆったりとテントを出ると、そこには10人の訓練生がずらりと並んでいた。

しかも全員が全員片手を胸に当てた『敬礼』のような仕草をしながら。

この光景にはさすがのヤクモも瞬きを数回してから思わず聞き返してしまった。

「あの……………これは？」

直後。

真ん中にいたつり目の少女が1歩前に出てヤクモの目を真っ直ぐに見る。

「先の間に対する回答をしまいにしました」

「回答……………ああ、回答ですね」

こんな突飛な光景を目の当たりにしてしまつたが故に数刻前の出来事が一瞬だけ飛かけるがどうかそれだけは防ぐことが出来た。

「では1人ずつ承諾か離脱か言つていただき……………」

「いえ、その必要はありません。ここにいる訓練生全員一致で『承諾』受けさせていただきます」

「あら、全員一致ですか」

「はい。不満でも？」

「いえ、不満はありません。が、脱落する者もいるかと思つていましたので意外だつただけです」

「まあ、そうですね……………」

「俺は全然心配してなかったぜ？」

ミコの後ろで高飛車な少女が苦笑いを浮かべ、フレンドリーな少年がふふんと誇らしげに言う。

「嘘……………いの一歩に説得しようとした」

「ちよつ!?それは言わないって言ったじゃんよ〜!」

眠そうな半開きの目で淡々と喋る眠そうな目の少女に対してクレインが慌てて反論をしている。

その様子を見てからヤクモはもう一度目の前に並ぶ10人の顔を順番に見ていく。

10人全員の瞳の中に『覚悟』が芽生えていることを確認し再度問い掛けた。

「厳しく行くつもりです。生半可な覚悟では着いて来れないかもしれません。いいのですね?」

敢えて視線をキツくし、脅しをかける。

しかし、ほんの数刻前の彼らからは想像も出来ないほど真っ直ぐにこちらを見据えてはつきりと返事を返してくれた。

人と言うのは何がきっかけでどう変わるのかなんて誰も分からないものだ。

だが、今回の彼らはどうやら良い方向に変化しつつあるようで、ヤクモは内心ホッと胸をなで下ろした。

「分かりました。……………はあ、では、詳細の説明に移りましょう」  
訓練生諸君の「はい！」と言う短い返事が海風に乗ってベースキャンブに響きわたった。

◇?

「3班、編成？」

頭に疑問符を浮かべながらクールな少年が問い返す。

「はい。その通りです。この先あなた達が卒業までを共にする班となります。その班の

中でモンスターに対する攻め方、ハンター同士の連携、その他諸々の事を学んで言うてもらおう予定です。基本的にそれぞれの班に別々の課題を科す予定です」

「なるほど。という事は人数は3人の班が2つと4人の班が1つということになりますね」

「だな、振り分けはどうするんだ？クジでもやるのか？」

ルイと赤髪エドワードの少年の言葉に対してそれぞれ首を左右に振って、ヤクモが答えを返す。

「いえ、3人×3班の編成で振り分けはもうほとんど決定しています」

「3人編成が3班？それでは1人あまりですが」

「え!?もしかして始まって早々脱落者!？」

「……………」

疑問を投げかけたのは顎に軽く手を当てて何かを考え込んでいたメガネエミの少年。

その言葉に反応した快活リな少女デイが不安そうな声を上げ、無口シな少年オンもそれに反応してビクリと体を震わせてしまっていた。

「あ、いえそうではありません……………まあ、取り敢えず班の編成の話を進めましょう。そうですね、まずは名前を読み上げますので読み上げられたもの同士で固まってください。まだこれで決定では無いのであしからず」

未だに頭の上を疑問符が飛び交っている訓練生の名前を順番に読み上げて3人の組



を3つとプラス1人で分けていく。

1 組目

・ ミコ

・ エドワード

・ ルシア

2 組目

・ クレイン

・ シオン

・ リディ

3 組目

・ ヘラ

・ ルイ

・ エミール

残り

・ ファイレット

「あらあら、私があまりですか？」

相変わらずのスローテンポで片手を頬に当てながら天然<sup>フイ</sup>そうな少女<sup>レット</sup>が驚きの声を上げる。

「あいつがあまりか。判断基準が分からないな」

「私も、分からない」

腕を組みながら軽く鼻を鳴らすミコに続いてヘラも淡々とした口調でフイレットに向けていた視線をヤクモの方へ戻す。

他の訓練生もバラバラではあるが視線をヤクモの方へ向けてきていた。

「……。そうですね。では、ここから本格的に班編成を行っていきます。まず今の組み分けの判断基準から説明致しますね。これは先程私があるあなた達へ向けて『閃光玉投擲』指示を出した時のそれぞれの反応を見て3つに分けました」

この一言で再び訓練生がざわついた。

「先程の閃光玉投擲指示で………あ、あの一瞬の間で、ですか？」

まじかよ、と言いながらクレインが聞き返す。

「はい。その通りです。まずはミコさん、エドワードさん、ルシアさん。この3人は反射

的に道具を収納するポーチではなくまず第1に武器に手を掛けた3人です」

「っ！」

「うっ、た、確かに俺は武器に触った……………」

「よ、よよ、よく見ていましたのね……………」

ヤクモの言葉に凶星を突かれた3人が言葉を濁す。

ミコだけは吐き捨てるように小さく舌打ちをしていたが、構わずヤクモは続きを話していく。

「別に咎めている訳ではありません。あなた達3人にはこの先前衛としての立ち回りを中心に学んで行ってください」

「前衛？」

「はい。まず前衛としての役割は主に『積極的にモンスターへ攻撃をしていく』役割の他に『モンスターの注意を引き付けて味方を援護する』役割。大きくわけてこの2つが存在します。細かい事は置いておくとして。そのためには道具を使用するより武器を振るう場面の方が圧倒的に多くなります。故に不意をつかれた際反射的に武器を手を取ることが出来るのであれば生存確率は飛躍的に上がります」

「それが、俺たちの役割、ってことか」

「この高貴な私わたくしに最前線で立ち回れとおっしゃるのですね……………」

「基本は前衛。しかし覚えるのは全て覚えて頂きます。さて、次はクレインさん、リデイさん、そしてシオンさんの3人ですが……………」

ミコ、エドワード、ルシアに説明をし終えたヤクモ。

今度はクレイン、リデイ、シオンの3人の方へ視線を向ける。

「貴方達3人には遊撃としての役割を中心に覚えて言っただきます」

遊撃？と3人の頭の上に疑問符が同時に現れた。

「遊撃とは刻一刻と常に切り替わる状況の変化に応じて時には前衛と共に攻撃に参加し、時には前衛と後衛の中間で両者の援護を主に行う役割となります。先程の閃光玉投擲指示において反射的にポーチに触りはしたものの道具を取り出すところまでいかなかった3人を選出させて頂きました。支援特化よりもさらに状況を把握することが重要となってくる役割のため状況判断の時間と視野の広域化、それと同時並行で道具の使用を判断出来るようになれば狩り全体の難易度を下げられます。そして次はエミールさん、ルイさん、ヘラさんの3人ですが……………大方想像できていると思います。あなたたち3人には後衛としての役割を主として覚えて言ってもらおうと思っています。この3人はポーチから道具を取り出して安全装置まで指をかけられた人達です。もう少しで船頭アイルさんに勝てたかもしれない人達ですね」

ヤクモの言葉にクレインとリデイが同時に力強く頷きながらシオンの肩に手を置き

た。

そんな2人にキュツと口を一文字に結んだシオンが大きく頷き返している。

そして後衛の3人、エミール、ルイ、ヘラも静かに互いの手を合わせていた。

「この3人から1人ずつ選出して3班作ります。まずは第1班、エドワードさん、リディさん、ヘラさんの3人です」

「おお、いきなりかよ」

「あたし1班」

「1班」

名前を呼ばれた3人が集合し軽く一言二言交わしながらハイタッチをしている。

「続いて第2班です。第2班はルシアさんとクレインさん、そしてルイさんです」

「ふふふ、わたくし私がいるからにはもう勝ちも同然ですわ！モンスターなんて恐るるに足りま

せんわ〜♪」

「お前、さっきのロアルドロスの時思い出してみろよ……………」

「やーかましいですわ！」

「ふう、全く、まさかこの中で群を抜いて騒がしい2人と同じチームになるとはね」

この組も名前を呼ばれたあと1班とはまた違う空気の会話を交わしながらお互いのことを確認しあっていた。

「そして最後に第3班。ミコさん、シオンさん、そしてエミールさんです」

「足を引っ張るのであれば捨てていく」

「っ……………」

「何もそこまで言うことないだろ、ミコ」

「ふん」

ほかの2班とは違い3班が1番ギスギスしている関係にあったのは明白だった。

とはいえそれも込みでこの組み合わせにしたのだから当然といえば当然の反応ではある。

ならどうするか。

シオンがキーマンになるだろう。

そんなことを考えつつ、ヤクモは視線を最後にフィレットへと向ける。

「最後にフィレットさん。あなたにはやっていただきたくてありますがこの後ほか3班が出発したあとここに残ってください」

「ん〜やって欲しいこと、ですかあ〜？」

「その通りです」

「わかりましたあ〜」

「はい。それではほかの3班はそれぞれのルートを説明するので地図が見える位置にま

で集まってください」

フィレットの返事を聞いてから小さく頷き、テントの中から簡易テーブルをセットしてその上に地図を広げた。

◇？

ほか3班出発後、ベースキャンプ。

「あのおくお話ってなんでしようか」

人数が減ったことで今までかき消されてしまっていた波の音がいつもより鮮明に耳に響く。

そんな中で正面から向かい合ったヤクモにフィレットがおずおずといった様子で話を切り出した。

「早々に失格……………とかじゃないですよね……………」

「いえ、そうではありませんよ」

その一言でフィレットがホッと胸を撫で下ろす。

「では本題に移りましょう……………と、言いたいところですが、疲れませんか？」

「え？」

ようやく本題かと思つた矢先に唐突に振られた質問に思わず瞬きをしてしまうフィレット。

「ですから、疲れませんか？その話し方」

「っ！」

「私という時は隠す必要はありませんよ。ありのままに結構です」



真つ直ぐにファイレットの目を見据えながらヤクモが言葉で切り込んでいく。

まさに見切り斬りののごとく鋭く核心を突いた一言に瞠目していたファイレットが大きくなため息を漏らした。

その雰囲気は先程のようなのらりくらりとしたような雰囲気とは対称的にどちらかといえばミコのように凜とした雰囲気に近い感じだろうか。

「はあ、……………まさか、いつから気づいていましたか？」

「だいたいそう感じたのは閃光玉投擲指示の時ですね。貴方だけはほかの9人よりも明らかに違う行動を挟みましたから」

「違う行動ですか？」

「はい。あの場面。ほかの9人が反射的にロアルドロスの方へ視線を向けたのにも関わらず、貴方だけはいの一番に周辺状況の把握をしようとした。頭は動かさずに視線だけを周囲に巡らせたのにも驚きましたが、まずモンスターよりも味方の状況把握をする人が現れるとは、正直予想出来ていませんでした」

「……………なるほど」

「つまりほぼ勘です」

「……………はあ、となると私はカマをかけられた、ということですか」

「そうなりますね。結果はこの通りです」

「恐ろしい直感してますね」

「そうでしょか。自分ではそんなことは無いとは思ってるんですけど………そうういうならそうなのでしょ」

ふむと軽く顎に手を当てて考え込んだヤクモであったが話が脱線思想になっていることによく気づきぽんと手を軽く合わせた。

「いえ、今はその話ではなくて、どうして残ってもらったかですね。単刀直入に言いますと………」

「………」

「フレットさん。あなたには私の後を継いで頂きたいのです」

◇？

ベースキャンプから少し離れた砂浜。

周辺にモンスターがいないことを確認すると少女はゆっくりと空を見上げた。

『私の全てを真似ろとは言いません。もちろん断つて頂いても構いません。ただ、皆を鼓舞し折れそうな柱があれば支えてあげられるような、そんな存在になつていただきたいのです。あなた達は、10人全員で1つの円です。誰一人欠けることは出来ない存在なので。時間がありますのでゆっくり考えてもらつて良いので、答えが決まつたら教えてください』

「10人全員で1つの円……ですか」

先程ヤクモ教官が私達を形容した表現を小さく復唱した。

モンスターが無配の砂浜は驚くほど静かで風と波の音が妙に際立つて聞こえてくる。

「……………私が、皆様を支える存在に……………」

そう小さく言葉を漏らしたその直後。

「だああああああ!!!死ぬ死ぬ死ぬ!!!」

そんな絶叫と共に特大の地響きを引き連れて先に出発していた1班のメンバーが密林の中を全速力でこちらに向けて走って来た。

緑色の飛龍のお友達と一緒に。

「ちよつと!!!エドが音立てるから気づかれたんだからどうにかしてよ!!!」

「馬鹿言え!!誰のせいで小石踏んだと思ってるんだよ!!お前が押すのが悪いんだろ!!元はと言えば!」

「初の狩場で陸の女王と鬼ごっこ」

「おい!! なんてへらお前はそんなに落ち着いてられんだよ!!」

「落ち着いてない。泣きそう。泣いてもいい?」

「ダメ! あたしが先に泣くから!」

「じゃあ譲る」

「んな事言ってる場合じゃ……………お、おーい!!! ファイレット! ちようど良い!! この状況何とかしてくれ!!」

リオレイアと初めて対面しているとはいえここまで騒ぐことが出来るのならはある意味余裕はあるのではないだろうか。

なるほど。

あの教官はここまで想定済み、ということなのだろうか。

「あらあら〜皆様お揃いでお元氣そうですね〜。うふふ〜」

いつもの口調に戻しながら返答し、全力で走ってきた3人が息を乱しながらファイレットの横に並んで連れてきた女王に正面から向かい合う。

全身を覆う深緑色の鱗に巨大な翼、そして毒が蓄積されて膨れ上がった尻尾には棘がびっしりと生えておりあれの一撃を貰ってしまったら本当にタダでは済まないだろうと直感でそう感じた。

リオレイア。

## 別名雌火竜。

これが陸の女王の姿。

「はあはあ、元気なもんか」

「ど、どうやって逃げる!? ねえ、どうする?」

「リディ、落ち着いて」

そんな3人に構うことなく少し離れた位置で対面していたリオレイアが大きく息を吸い込み、吼える。

幸い相手との距離が離れていたこともあり耳をやられることは無かったが、相手はしっかりと臨戦態勢だ。

『大自然がルール』。

今ならこの意味が痛いほどわかる。

相手は待つてはくれない。

「じゃあくそうですね、閃光玉投げますね。え〜い」

ゆつたりとした動作でポーチの中から閃光玉を取り出して、投げる。

今まさに突進を開始しようとしていたリオレイアの目の前で閃光が弾け、目を焼かれたりオレイアが大きく仰け反った。

「今? 今だよね!? 逃げるなら今だよねえ!」

「そうですね。ベースキャンプの方に走りましょう」

リデイの言葉に肯定し、ほかの2人と共にその場から全速力で離脱した。

その途中、走りながらふと背中越しにリオレイアを確認する。

どうやらまだ視力は回復していないようでその場で立ち尽くしながらキョロキョロと周囲を見回している。

私は逃げることで頭がいっぱいになっている3人の代わりに周囲に警戒網を張り巡らしながらベースキャンプの方へ帰投を果たしたのだった。

# 円卓

## 4. 霊峰VS円卓（予告編？）

「全員傾聴つ!!!!!!」

ゆつくりと迫り来る老山龍の巨体を前にギルド装備に身を包んだ10人のハンターが各々の武器を構えながら横一線に綺麗に並ぶ。

ギルド装備。

それはギルド直属のハンターを意味すると同時に相応の実力とギルドからの勧誘が無ければ身に纏う事を許されない装備であり、概ね『装備』と言うよりかは『衣装』と表現する方が適切であった。

それ故にこの装備を身にまとっている時点で彼女らの実力は確かなものであると裏付けするには十分すぎる。

羽飾りのワンポイントが特徴的なツバの広いテンガロンハット風の帽子と丈が長めのベストとブーツ、派手な見た目に加えて威厳も備えていた。

大剣、ライトボウガン軽弩、ヘヴィボウガン双剣、重弩、弓、ガンランス、操虫棍、スラッシュアックス剣、斧、ランス、そして

太刀。



十の武器の矛先が老山龍の一点に注がれる。

その中心でランスを掲げながら一歩前に進み出た少女の声が砦一帯に響き渡った。

「我ら10名！ドンドルマを守護する円卓の騎士!! 志半ばで離脱した同士全ての意思をその身に背負い、彼の者を打ち倒さん!! 我等が命と誇りにかけて！これ以上一歩たりとも先へ進めるな!! わかったな!!」

『了解!!』

「今この瞬間、我らの肩には街に住む全ての人間の命が掛かっている！それを忘れるな！……きつと教官ならこう言ってくださるだろう。今は亡き彼女の愛したこの地を土足で踏み入るなど笑止千万！その身の滅びをもつて贖罪としてもらう！」

『山』と形容されるほどの巨体を持つ古龍、老山龍の和名を持つラオシャンロンが10人の目の前へ到着すると同時にその巨大な体をゆっくりと起き上がらせて天に向かって吠えた。

それよつて空気が震え、地面が揺れる。

本来であれば思わず両耳を抑えてしまうような空震ものともせず大剣を握り直した赤髪の少年が吐き捨てるように言葉を漏らした。

「へつ、聴覚もイカレてきてらあ。これじゃあ耳栓も要らねえな」

「ええ、それには同感ですわ。私も耳の感覚ありませんわね。はあ、全くこの私達をこ

ここまで追い詰めるとは……………やってくれますわね、褒めて差し上げますわ、老山龍」

彼に便乗した高飛車な少女はガンランスの銃身が冷えきったことを確認して龍抗砲と砲弾をリロード。

ガシヤンと砲身から空の葉莢が飛び出す。

おかげでルシアの隣にいた眠そうな目の少女が自分の弓に強撃ピンを装着しながら眉を顰めた。

「ルシア、葉莢がこつちまで飛んできて……………」

「あら、それは申し訳ありませんわ」

「君達は緊張感がないね、全く」

「いいじゃんいいじゃん、私達らしくてさ」

2人の会話にクールな少年と快活そうな少女がそれぞれの武器を担ぎながら微笑む。

「緊張が解れたのはいいですが気は緩めないでくださいね。無茶する前線の援護は大変なんですから」

「……………」

スナイピング用に弾道強化パーツを付けた重弩のスコープを覗きながらメガネの少年が溜息と同時にボヤキ、その隣で無口な少年が両手の剣を握る手に力を込

めた。

「俺達もここまで来れたんだな……………教官。見てくれよな!このドンドルマには俺達が指一本触れさせねえ!」

「そう言いながら操虫棍を構え直したフレンドリーな少年に続いて最後の一人がゆっくりと背中の太刀『たまのをの絶刀の斬振』を引き抜いてミコの隣に並び、にこやかな笑みを老山龍に向ける。

「あらあら、あの場所は通行禁止でしたのに、来てしまったのですね。全く……………手が焼けるお客様ですね」

「ふわふわとした口調と共に天然<sup>ファイ</sup>そうな少女<sup>ト</sup>が武器を構えて隣のミコにアイコンタクトを送る。

「それを受け取ってひとつ頷いたミコが咆哮直後で体を起こした老山龍<sup>ラオシャンロン</sup>へ向けて、そしてこの場にいる自分を含めた10人のハンターへ向けて最後の口上を述べる。

ミコ)「ここで終わりにするぞ!我等は守護騎士!!」

エミール)「ドンドルマを護る堅牢たる城壁なり!!」

エド)「ドンドルマを護る堅牢たる城壁なり!!」

クレイン)「ドンドルマを護る堅牢たる城壁なり!!」

シオン)「我が身を盾に……」

ヘラ)「降りしきる災禍を払う鉄壁の城郭」

ルイ)「つみびと罪人には神罰を！」

リデイ)「罪人には神罰を！」

ルシア)「罪人には神罰を！そして我らに……」

ファイレット)「天命の導きを」

ミコ)「いざ!!尋常に!!!」

ミコの言葉と同時に10人が一斉に散開し、防衛作戦最終にして最後砦。長きに渡る決戦の火蓋が今ここに切って落とされた。

T o b e c o n t i n u e . . . . .

ドンドルマ迎撃砦、高台。

「おうおう、あれが噂の『円卓の守護騎士』か。威勢がいいこつた」

「そうっばいッスね。噂はよく耳にしてるッス」

咆哮を放つ老山龍の背中を見るような位置の高台に2人の男女の声が降りる。

「アイツも無事に想いを継承したんだな」

「あたしたちの訃報は聞きたくないって言ってた張本人の訃報を先に聞くことになるとは夢にも思ってたかったツスけど」

「ははは、違いねえ」

1人は全体的に騎士のようなデザインをした一見するとベリオ・Xのようにも見えるが、その細部をよく観察していくと通常のベリオ・X装備よりも気持ちベリオロスの白い毛皮の量が多くなっているのが分かる。

『EXオルムングα』装備。

そう呼称される装備の素材は寒冷地に君臨すると言われる真っ白な体毛と口元からむき出しになっている巨大な牙が特徴の飛龍「氷牙竜」ベリオロス、そしてその中でも特段厳しい環境を生き長らえてきたと言われている特殊個体である「氷刃ひょうじん佩はくく」ベリオロスの素材から製作することの出来る装備だ。

通常個体よりも豊富に生えた体毛に長期にわたる厳しい環境での生活による凍結しきつた牙。さらに身体中に微細な氷を纏うことで通常個体よりも寒色よりに彩られていることもあり、その姿はたとえ一流のハンターが見たとしても一瞬のうちに背筋が凍りついてその場で身動きが取れなくなってしまうと言われているモンスターである。

そんなモンスターの装備一式を身に纏うのは2人のうち男性の方で、以前よりも僅かに声色は低くなっているが、その性格にはほとんど変化が見られない青年だった。

青年は背中に背負っていた武器『アデユラルエッジ』に手をかけながら、呆れたように息を吐く女性の言葉に笑みを浮かべた。

「笑いごとじゃないっすよ。地獄でいの一番に文句言つてやるっすから」

以前のように無邪気な笑みを見せる青年に溜息をつきながら返し、女性は続けて腕を組むとふんと軽く鼻を鳴らした。

女性の方の装備は全体的に銀色で纏められており、装備しているヘルムの形状も相まって騎士に近い見た目をした装備に身を包んでいる。コイルのスカート部分は左足の太もも辺りまで伸びており首周りとレッグパーツに毛皮を合わせ、胴部の鎧は両腰の辺りがバツサリとカットされているのと首下の鎖骨から胸の谷間が大胆に露出している装備だった。

『EXジャンナールα』装備。

【雷顎竜】の名称で認知されているアンジャンナフの亜種個体から取れる素材を用いて製作出来るその装備は通常種が炎を得意とするのに対し、雷の属性を得意としている個体であった。

それ故にこの装備も装備しているだけで雷を使用した属性攻撃を強めてくれる補助効果も備わっている装備だ。

しかし、その希少性と危険性も相まって一部のハンターの間では万が一接触してし

まった時は交戦しようなどとは考えずすぐに戦線から離脱した方が身のためだ、とまで言われているほどの危険性を持つモンスターであることには変わりなかった。

そのレベルのモンスターの防具を一式。

彼女の技量を示すには十分すぎる情報だろう。

青年が武器に手をかけるに合わせて、女性の方も背中に携えてきたハンマー『ドンナ』ジャナル』を片腕一本で持ち上げ、自身の横にズシン！と槌部分を下に向けて立てかけた。

ピシッ。

その衝撃のせいであらでさえ所々劣化していてもろくなっていた足場にヒビが入る。

「……………おい、なんか今嫌な音が聞こえなかったか？」

「ふいっ……………ん？どうかしたツスか？アカシさん？」

「いや！今足場から嫌な音がk……………っ！」

「ん？……………っ！わっ……………わわっ!？」

ピシッ……………ピキピキ、ピキッ!!



バギン!! ガラガラガラガラ  
!!!!

「くっ! 崩れたツス〜!!!!」  
「ばっかやろおっ!!!!」

青年の叫びも虚しく2人はちょうど老山龍の尻尾が通り過ぎた道の方へ雪崩込むように落ちていった。

# 追憶の巨戟龍

## 5 追憶の巨戟龍①

ラテイオ活火山近郊火山地帯。

名前の通り『活火山』と呼ばれるこの場所は年中無休で地下からゴボゴボと溶岩が吹き出しており、そのせいで内部はもちろんその周辺一帯ですらも灼熱地獄と化していた。

しかもこの辺りではモンスターを目撃情報も後を絶たず、ハンターにとっては正直来たいけど来たくない狩場第1位に輝く程であった。

理由は明白。

この狩場は飲めば一定時間体温の上昇を防いでくれるクーラードリンク必須の狩場だからである。

でなければその灼熱の環境によって体力だけでなく集中力までジリジリと削ぎ落とされた挙句、他の地域に比べて更に凶暴な個体のモンスターと戦闘を行わなければならないことになる。

そんな中での狩りなど正直成功率は極極わずかなためラテイオ活火山に来てクー

ラードリンクを忘れた日には依頼主に頭を下げてでも渋々引き返して来なくなるほど  
厳しい環境下だった。

それに加えて、たとえクーラードリンクを飲んでいたとしても汗が止まらなくなるほ  
ど暑いと来れば尚更。

しかしそんな狩場であるが『来たいけど来たくない』と言ったのにも理由はある。

それは、このラティオ活火山では通常の狩場では滅多にお目にかかれない珍しい鉱石  
類が多く採れるからだ。

活火山の活動によるマグマの流動によつて本来なら地下深くに眠っているはずの鉱  
石が地表近くにまで流されて固まつており、特に依頼頻度の高いテロス密林やアルコリ  
ス地方の森丘ではあまり採取されないドラグライト鉱石をはじめ、カブレライト鉱石、  
はたまたユニオン鉱石なんてレア度の高い鉱石まで採れるとなれば多少暑いのを我慢  
してでも出かける価値は十分にあつた。

ついでにその高い純度と発火性能、そして長時間高温を維持し続けることが出来る  
『燃石炭』に、燃石炭よりもさらに高温の炎を出すことの出来る『強燃石炭』はこの狩場  
でしか採取することが出来ず主に鍛冶屋、それからサイズの小さめのものは家の暖炉の  
火等によく使用されている。

故に寒冷期には必須アイテムとして出回るため商品価値の高さは折り紙付きだった。



4人のうちの1人。

語尾の「ッス」が特徴の女性は小豆色とシルバーのベース色、首元に黒い毛皮を取り付けてマントのように加工した装備を身に纏うハンマー使いの女性だった。

レマ・トール。

さながらビキニアーマーのようなメイルガードから分かるようにそこそ披露の多い【ばんがくりゆう蛮顎竜】アンジヤナフの素材から製作される『ジヤナフ・S』シリーズ一式を揃えており、その背に背負ったハンマーも同じくアンジヤナフの素材を使用したハンマー『蛮顎槌フラムスファイリ』を携えていた。

露出が多いが故にマグマからの熱波が肌に直当たりしているため、いつもよりも無駄に暑さを感じてしまっている様子。

とはいえ、首元にこれでもかと言うほどふもふとした毛皮を取り付けているのであれば仕方が無い部分もあるだろう。

多少、ではあるが。

そんなレマの文句に答えたのは全体的にゴツゴツトゲトゲした装備を身に纏う男性で、極めつけはその両肩から伸びる豪快に捻れた角が印象的な外見をしたハンター。

レオ・デイレイプニルス。

【角竜】ディアブロスの素材をふんだんに使用した『ディアブロス』装備をヘルムから

レッグガードまで一式揃え、ついでのその大柄な体躯に似合った大剣『カイライライホー  
ン』を背中に背負っている大剣使いのハンターだった。

レオはレマの若干後ろを歩いてきたが、弱音を吐いて立ち止まったレマの肩をポンポン………というよりバンバンと叩きながらその横を笑って通り過ぎていく。

その強さたるや、叩かれたレマがそこそこ顔を歪めるほどのようだ。

そして叩かれたレマの肩を擦りながら呆れたように声を出す3人目の足音の主である女性が大丈夫かとレマに声をかけている。

ヘイル・スタンフィード。

そう名乗っていた彼女は全体的に白が基調のドレスタイプの装備である『ヤツカダ』  
装備を一式身にまとっていた。

その特徴は【妃蜘蛛】きさきぐもの別名で知られ、鋏角種に属するモンスター、ヤツカダキから入手することが出来る糸をレース状に編み込んだパーツをヘルムとコイルに取り付けることで真っ白なレースとスカートにメイルの紫色がアクセントになり、まるで結婚式のドレスかと見間違えてしまうほどの優美さを醸し出しているところだろうか。

しかしその性能は弓の扱いおよびサポートに長けており、彼女もまた装備同様【妃蜘蛛】ヤツカダキの素材を使用した『ケア・ド・ネフィラ』を使用しているようだ。

レオの暑苦しさやヘイルの装備とボーイッシュな顔立ちにギャップこそあるが2人

とも実力は確かではあった。

「ふう、こちらの方向へ逃げたと思つていたのですが……………もう少し奥のようですか。御三方の方は大丈夫……………ではなさそうですね、レマさんは」

そして最後に長めの黒髪を後ろで一つに括り上げたポニーテールに、見ようによつては巫女装束のようにも見える『依巫・祈』装備を身に纏い、背中には彼女の背丈に近い長さを誇る太刀を背負つた女性がため息混じりに声を出す。

背負われた太刀はピンク色の鮮やかな流線型を描く鞘に収まつた紫色の刃が特徴的な【泡狐竜】ほうこりゆうタマミツネの素材から製作することが出来る『たまのをの絶刀の斬振』と呼ばれる太刀であり、彼女のトレードマークでもあった。

先頭を歩いていた彼女、ヤクモ・ミナシノは火山地帯の中核辺りで両手を腰に当てながら軽く周囲を確認した後、3人の方へ振り返りレマがへ口へ口だと言うことを確認すると苦笑いを浮かべてこめかみを軽く搔いた。

そんなヤクモに向かってレマは両手を上げて降参の合図を出す。

「ここは反論せず正直に言うツスね。キツイツス」

「正直で何よりです」

「この程度の暑さにやられているようではまだまだ修行が足りねえな、レマの嬢ちゃん」  
「むう、言つてくれるツスね」

「張り合うな張り合うな。レオと張り合っているとレマまで同類になっちゃうぞ」

「……………いやあ、それはさすがに勘弁して欲しいツス」

「ヘイルお前な、俺の事どんな目で見てるんだ」

3人のやり取りを聞きつつもヤクモは周囲に視線を巡らせて警戒は解かないようにしていた。

現在4人がいる場所は火山地帯の中枢に位置する洞窟内であり、周囲一帯をゴツゴツとした岩壁に囲まれ、ところどころマグマが流れ出ている場所も見受けられる。

幸いこの空洞部には足元に溶岩が流れている場所は無いが、この狩場の他の空洞部では足元にも少量の溶岩が流れている場所もあるため、誤って溶岩に足を突っ込もうものならいくら防具を着ているとはいえただのやけど程度じゃ済まなくなってしまう場合も多々ある。

高い熱耐性の防具を着ていれば少し突っ込んだ程度では問題ないが、それが長時間となると話は変わる。

それはともかくとして、ヤクモもハンターとしての道を歩みだしてから多くの地を訪れここラテイオ活火山にもそこそこの数は来たことがあるのだが、その記憶が今ヤクモの警戒網に警鐘を鳴らしていた。

本日の標的はこの火山地帯によく出入りしているリオレウスのような飛竜種でもな



ければ、溶岩の中をスイスイ泳いでるヴォルガノスのような魚竜種でも無い。

最近またこの火山地帯に現れて狩場の生態系や採集物等の調査を行うギルドの調査隊を襲撃し、討伐依頼が組まれたモンスターだ。

詳細は……………

「しっ。皆様警戒を」

そんな時、ヤクモの耳にとある音が入り込む。

同時にレマ達3人へ指示を送るが、彼女達も経験を積んだハンターにあることには変わりない、ヤクモが声を上げた時にはすでに己の武器に手をかけて周囲に視線をめぐらせていた。

「この音、逃げ込んだ先はこのようね」

「そのようです。姿が見えない……………という事はまた潜っているのでしょうか。なんにせよ警戒を」

「わかっているってヤクモちゃん。相手は手負い、ちゃちゃつと終わらせちまおうぜ」

「レオさんに賛成です。新しいヤドを調達しようが、何度でも叩き割ってやるツスよ！」

4人が背中を合わせるようにしながら周囲へ視線をめぐらせる。

その間にも耳に響いてくるギチギチと硬い何かを擦れ合う音は次第に大きくなっていき、そして。

「天井！」

その音源がまさに4人がいる場所の真上でピタリと止まった。

直後、ヤクモの叫びと共に4人が同時にその場から回避行動で距離を取った。

それとほぼ同時に天井から超圧縮された水流のブレスが先程まで4人が固まっていた場所を薙ぎ払う。

判断がもう少しでも遅かったらあのブレスに巻き込まれてタダではすまなかっただろう。

前転から受け身をとって体勢を立て直し、ブレスが飛んできた方向を見上げる。

火山中枢の洞窟内の天井に骸が張り付いていた。

ブレスが外れたことに気づいた骸はギチギチと嫌な音を響かせながら勢いよく地面へと降りてくる。

蟹のような硬い外殻を持ち、ヤドカリのようなヤドを背中に背負うことが特徴である甲殻種に属するモンスターであり、全体的に青みがかった色と鋭く研がれた両腕の鎌。

同種に属する【盾蟹】ダイミヨウサザミの対になる個体にして別名【鎌蟹】と呼ばれるそのモンスターが現れた。

【鎌蟹】 ショウグンギザミ。

そう呼ばれるモンスターは数少ない甲殻種の中でも特段危険度が高いモンスターと

してハンターの間でも特に危険視されていた。

今回の依頼は火山地帯における採掘作業の安全確保と脅威の排除が目的であり、その脅威である最大の要因がこのシウウグングザミの出現であったのだ。

ここ数日の間に火山にてシウウグングザミの襲撃による被害件数が日に日に増えて行つたことでギルドから正式に討伐依頼として受理されたわけだ。

しかし

「へっ！新しいヤドなんか調達しちやつてまあ、グラビモスの頭骨、よく見つけてきたなそんなもん！」

「何を持ってこようが何度でもぶち壊してやるっすよー！」

「レマー！もう一度ヤドの破壊頼むわよ！レオとヤクモはさつきと同じ、脆い関節を重点的に狙って！」

「合点ツス、ヘイルさん！」

「任せとけっ」

「承知しました！」

先程の戦闘で既に手負いとなっていたシウウグングザミもレマーに粉碎されたヤドの代わりにグラビモスの頭骨を新しく携えて再び姿を現したのだ。

この場所で確実に落とす。

素早く弓に矢を番えるヘイルの指示を受けて3人がそれぞれ武器を構える。

そして、十分に引き絞られた『ケア・ド・ネフィラ』から放たれた一矢を合図に3人が同時に地を蹴った。

## 5 追憶の巨戟龍②

ドンドルマ中央広場。  
大衆酒場。

「「かんぱーい！」」  
「か、乾杯……………」

月明かりの降るドンドルマの宵時。

ランプの光に照らされた酒場の一角で麦酒の注がれた小樽グラス同士が軽快な音を奏でた。

それから中身を一気に煽るレオがぶはあ！と言いながらテーブルの上にグラスを戻す。

「ぶツはア！仕事のあとの一杯はうめえ！」

「わかるツスレオさん！わかるツスレオさん！わかり深みMAXツス！」

続いて勢いよく麦酒を飲み干したレマも若干顔を赤らめながらケラケラと笑みを浮かべた。

「お！レマの嬢ちゃんいい飲みっぷりじゃねえか！なんだ、酒もいける口かよ」

「レオさんほどじゃないっスけど………あゝりがとうございまーすツス！」

そんなレマに対してアルコールが入って上機嫌なレオも高笑いを浮かべながらグラスを上げ、2人でもう1度グラスを突合せた。

その様子を眺めながらヤクモは麦酒ではなくロイヤルハニーのドリンクに口をつける。

「あの二人は……全くもう」

「お疲れ様でしたヘイルさん。まあ、今日も無事に依頼は達成出来たので大目に見てあげましょう」

「そうね」

「はい」

溜息をつきながらグラスを持ったヘイルがヤクモの向かいの席にストンと腰を下ろす。

見たところ僅かに紅潮してるものしつかり理性は保てているようだった。

時間帯も時間帯故に仕事を終えた者たちのおかげで賑やかな大衆酒場はいつ来ても居心地がいい。

そう思える程度にはヤクモも大衆酒場には足を運んでいた。

依頼の受注や報告のためと言えはそうではあるが、特に依頼がなくても他のハンターとの交流や情報交換の場としても優秀の一言に限る場所なのだ。

アルコールに関してはレマから絶対に飲まないで欲しいと釘を刺されているので口にするには無いが、ここのロイヤルハニーを使用したフルーツドリンクはカウンター内のお嬢に『いつもの』で察してもらえくらいい好きになった。

「あ、そうそう、今回の依頼。急遽手伝ってもらったことになったわけだけど、受けてくれてありがとね」

「いえいえ、そんなお礼を言われるようなことはひとつも。むしろお二人の足を引っ張ってしまっていないかっただでしょうか」

「そんな謙遜することないって。即席とはいえヤクモ達が私達に合わせようとしてくれたおかげでスムーズに進行出来たから感謝してるのよ、これでも」

「そう言っていただけだと安心します。まだまだ未熟者である身、良い経験をさせていただきありがとうございます」

「どういたしまして。でも『未熟者』っていう言葉はハンターになりたての子達が使う言

葉よ。あなたのような狩場慣れしてる子が使う言葉じゃないわ」

ふと小さく微笑ませながらヘイルが諭すような口調で語る。

確かに、傍から見ればそうかもしれないが……

「いえ、私はまだまだ未熟者です。初めて経験することも多々ありますし」

「あらあら、思ったより頑固者なのね」

「よく言われます」

「不器用な生き方。でも私は嫌いじゃないわよ」

「ありがとうございます」

「ふふ。素直でよろしい。じゃあ祝杯ってことで一杯どう？」

「ああ……はい、そうですねっかくなのでいただきます」

「了解。それじゃヨミちゃんこっちのテーブルに麦酒二つお願いできる？」

くすりと笑みを浮かべるとパタパタとせわしく店内を駆け回る少女へ向けて片手を上げながら注文を伝えた。

ヨミと呼ばれた少女は明るめのブラウンの髪を後ろで一本に編み込んでいる長めの髪が特徴の少女であり、ちょうどヤクモと近い年くらいの年齢でありながらこの酒場の看板娘としてせわしく働いていた。

「は〜い、ただいまお待ちいたします〜」



ヨミは両手にほかのテーブルから下げてきたらしいグラスを持ちながら注文を受けたことを告げると忙しそうに厨房のほうへ戻っていった。

それからしばらくして麦酒の注がれたグラスを二つ持って戻ってきた。

「お待たせしました。麦酒2つですへイルさん。そんな一気に頼まなくても麦酒はなくなりませんのに」

「いやいやもう一つのほうはヤクモの。依頼達成の祝杯しようってだけだよ」

軽く冗談混じりだということは見ても明らかであった、しかし、その内容が問題だった。

グラスを持ってきたヨミが空いたグラスを下げるために手を伸ばしかけてピタリとその動きを止めた。

それから驚愕して見開いた瞳をへイルの方へ向けた。

当然その理由を知っているレマですらアルコールによって酔いが回っている状態であるにも関わらず視線をへイルの方へ向けて固まっている。

「?ヨミ?どうしたのよ」

状況が呑み込めないへイルは頭の上にはてなマークを浮かべながらキョロキョロと周囲へ視線を向けた。

隣ではレオもいきなりレマが静かになったことに疑問を抱いている様子。

「え、これヤクモちゃんのおって……………」

「へ、ヘイルさん正気ツスか!？」

「え、何よ？私なんか変なこと言った？」

「あ、いや、別に変なことではないんですが…………ちよつとびつくりして…………」

「そう。ま、変じゃないならいいの。さ、乾杯しましょ…………」

「いやいや待つツス！待つツス!!ダメツスよヤクモさんにアルコールだけは絶対にN  
Gツス!!」

「な、なんでよ!?!別にいいじゃないお酒くらい」

「へ、ヘイルさんは知らないからそんな恐ろしいことが言えるんすよ!」

「え、もしかして酒癖悪いの？暴れるタイプのやつ？」

「いえ、そうでは無いんですけど…………」

「じゃあいいじゃない。そもそもお酒の席なんてそんなもんじゃないの？それに弱いなら一杯だけでもいいし」

「大事なことなんでもう一度言うツス。ヘイルさんは知らないからそんな恐ろしいことが言えるんす!」

「は…………はあ…………」

普段の狩りに行く時の彼女からはおおかた予想もつかないような詰め寄り方をす

レマに若干気圧されるヘイル。

と、そんなものを目の前で見せられる渦中のヤクモはそもそもどうしてこのようなことになっているのか分からずにはてなマークを浮かべていた。

それも当然といえば当然の反応であり、ヤクモにアルコールを飲ませるという事は酔って泥酔状態のヤクモが大号泣をかましながら喋る愚痴をこと数時間の間延々と聞かされ続けるという意味に等しいからである。

絶望的にお酒に弱くグラス一杯ですら行かずにペロンペロンになってしまふ彼女は酔うと泣くタイプの「泣き上戸」であり、さらに夕子の悪いことに酔いが冷めるとそれまでの記憶を綺麗さっぱり消し飛ばしてしまうという究極的に面倒なタイプでもあった。

故にその愚痴を聞かされる側からしたらたまつたもんじゃないわけだ。

それだけ延々と喋り続けられたら聞くほうは完全に酔いが覚めてしまい、そこからは地獄の始まりとなつてしまう。

レマが頑なにヤクモへアルコールを渡すことに対してここまで敏感になつてしまつているのはこの理由が1番大きい。

つまり1番の被害者はレマだということだ。

基本的には自分からアルコールを頼むことは無いヤクモも極稀になんの気まぐれか

分らないがレマが気を抜いた拍子に頼んでしまうことがあり、そうなるともう目も当てられない。

そしてそれは決まって遠方の狩り場への遠征先でのことが多いのもまた面倒なところだった。

ドンドルマの酒場であればウェイターもヤクモの酒癖は周知されているので万が一そんなことがあっても対処はできるのだが、それを知らない場所では当然普通にアルコールが出てきてしまう。

「あの、ヘイルさん？ 乾杯しますk……………」

「ヤクモさんはダメっス!!!……………つくっ！つく！つく……………つぶはあ!!はあ、ダメったらダメっ……………ス〜」

「え、ええ……………」

「あら、飲んじやった……………」

そんなやり取りを目の前でやられているにもかかわらずグラスに手を伸ばそうとするヤクモからレマが思い切りグラスをひったくると中身を一気に煽って飲み干した。

「はあ、一気はキツイんすから……………勘弁して……………ウプツ……………っ、はあ……………欲しいスよ」

「わ、わかったわよ、気をつけるわ……………それより、そんな一気に飲んで平気？」

「うっ………こ、これが平気に見えるっすか？」

「見えないわ、流石に」

そんなこんなで酔いが回っていた上にさらに麦酒を一気に煽ったレマの介抱が始まったことで以来達成の祝勝会はお開きとなった。

酒場からの帰路に着いたヤクモ。

フラフラになってしまったレマはヘイルが自分に任せて欲しいと申し出てくれたため、任せることに。

辺りはすっかり夜が更けてしまい、晴れた夜空からは月明かりが降り注いでいた。

メインストリートを酒場を背にしながら進み、しばらくすると目印の街灯が見えてくる。

その道へ左折で入ると正面数十メートルの地点に周囲の建物同様の煉瓦造りをした二階建ての貸家が見えてきた。

正面玄関をくぐり階段を昇って2階にはハンター用の貸部屋が1つあり、そこがヤクモの居住スペースとなっていた。

他の村のように平屋のタイプの家では無いにしろ広さに関しては申し分の無いほどの広さは確保されている。

寝室の隣にある装備保管用の部屋で装備を脱ぎ、軽く落とせる汚れだけを落とすと型崩れを起こさないように特性のハンガーへ掛けていく。

布地が大半を占める「依巫・祈」装備とはいえ装備は装備なのでメンテナンスには基本的に鍛冶屋で見てもらうのがベストだ。

ざっと見た感じでは目立った外傷は無いが明日ちゃんと見てもらう必要はあるだろ

う。

数日ぶりのシャワーを終えて寝室に戻る。

狩りに出ている間は基本的に風呂に入るなんてことはできないためどうしても簡易的に濡らしたタオルで体をふいたり安全地帯に水場があればそこで済ませたりすることになる。

この数年間ハンターとして生きてきた中で唯一懸念点を上げるとすればこれを置いて他にはないだろう。

半濁き状態の髪を乾かすために寝室の窓を押し開けて部屋の中に夜風を招き入れた。それから思い出したように寝間着を羽織るとベッドに腰かけながら窓枠に手をのせる。

まだ寒冷期には遠いが涼しさを感じる風が窓から入り込んでさらりと髪をなでていくのがわかる。

軽く櫛を通しながら髪が波くのを感じつつぼーっと窓の外から見える月を眺めていると、あの日の出来事が記憶の底から呼び起こされる。

……そういえば、6年前のあの日も今日みたいに月のよくきらめく夜だったか。ハンターとしての1歩を踏み出してすぐのころだったと思う。

同期のウツシから百竜夜行の救援要請を受けたのは。

## — 6年前 —

あの夜。

ヤクモの元に一通の頼りが届いた。

「これを私に、ですか？」

ドンドルマに滞在していたヤクモはいつものように以来達成の報告を酒場のカウンターで済ませた後、手早く荷物をまとめて帰路につこうとしていた矢先のこと。

ギルドの受付嬢見習いと酒場のウェイターを兼業しているヨミからふと呼び止められて手紙を渡されたのだ。

「はい。どうやらここから遠方に位置する『カムラ』という里からのお手紙のようです



よ。しかもヤクモちゃんを名指しで」

「私を？」

「ですです」

「カムラ……？その名前どこかで」

「一応内容の確認もさせてもらったのですけど、どうやら狩りの依頼という感じのようです。というか、救援要請？」

「そうですか。わかりました私の方でも確認してみます。回答は明日に」

「はい」

ニコツと笑みを浮かべて手をフリフリする同い年のヨミにふうとため息をついてから受け取った手紙を眺める。

既に開封された手紙を片手に家路に着くが………そこでふと疑問が浮かび上がった。

……………何故ヨミは開封した？

その瞬間、ヤクモはもう一度大きなため息をついた。

面倒ではあるがどうやら明日説教をしなければならぬらしい。

自室にて、入浴後の髪を夜風で乾かしながら寝室のベッドに腰かけると昼間受け取った便りを開いて内容に目を通していく。

一通り読み終えたヤクモはわずかに眉を寄せつつ風を取り込むために開けておいた窓から視線を外へ向けた。

「百竜……夜行、カムラの危機、そのための救援要請ですか」

同期の彼のことだ信用するには十分な要素ではある。

が、まだまだ駆け出しのハンターである自分が駆け付けたところで戦力として数えることができるのか。

「……」

仲間の危機である以上助けに向かいたいのは山々だ。

おそらく彼のことだ私以外の同期の面々にも連絡を入れているのだろう。

下手に加勢をしてほかの人に迷惑をかけてしまつては元も子もない。

その日、ヤクモは頼りに対する答えを出すことができないままいつの間にかぱたりと眠りについてしまった。

翌日。

「おはようございませす」

ヤクモはいいの一番にハンターズギルドのカウンターへ足を運んでいた。

挨拶をすると奥のほうからいつもの明るい声が返ってくる。

「あ、おはようヤクモちゃん。手紙に目を通してくれた？」

「はい、通しました、が」

「が？」

「友人宛の便りとはいえ本人よりも先に開封するのはいかがなことかと思ひます」

「あ……」

「はあ、あなたは今ギルドの窓口としての職務を果たしているのですから、公私混同はあまり褒められたものではありません。ましてや他人宛の文の無断開封など本来あつてはならないことです。今回は相手が私だったので大事にはしませんがそもそも……」

「わ、わかったわかったごめんなさいごめんなさい。もうしないから勘弁して……」  
「わかればいいのです」

「それで、答え……あ、ご返答はいかががいたしますか？」

いまさら言いなおしたところであまり関係はないが、わざわざ仕事用の口調に直すあたり一応今の話を理解してくれたのだと思っておく。

本題に入り、手紙の回答の話に戻る。

「はい、そのことですが……」

昨日一晩考えて結論が出なかったことをヨミに伝え、ため息をついた。

「なるほど、確かにそれは簡単に決められないね」

「はい、力になりたい気持ちは当然ありますしすぐにでも加勢にいきたいとも思っております……しかし」

「自分の実力で大丈夫なのか不安である、と」

「はい」

片手で頭を抱えながら息をつくヤクモ。

「それから一時的にとはいえドンドルマを離れてしまうということは、ハンター層を薄くしてしまうことになりますのでどうも気が気でなく……」

どうすればいいのでしょうかと言いながらカウンター近くの椅子にすくとんと腰を落

として考え込んでしまうヤクモに対してカウンター内で聞いていたヨミが不意にパンと手をたたいた。

いきなり響いた音にヤクモが思わずびくりと体を震わせた。

そんなことには気にもせずヨミが言葉をつづける。

「行つてきたらいいじゃない」

あまりにも突飛な一言にヤクモが目を丸くした。

「いや、ですから今の話を……………」

「ヤクモちゃんは真面目だね。そんな心配なんて今のヤクモちゃんがしたところでもうにもならないつて。まだまだ大型モンスターはイヤンクツクやドスランポス位しか依頼がこないんだからさ。悩んでたって仕方ないよ」

「……………それはそれで棘のある言い方、ですね」

「そんなことないつて。それでも私はヤクモちゃんがドンドルマ<sup>ク</sup>に来てからの付き合いだし、あなたが頑張つてることも知ってるから言えるの」

そういうとヨミはスつとその顔から笑顔を引つ込めて真剣な眼差しを真っ直ぐにヤクモへ向けた。

「だから今、あなたがしたい事。その決断の足枷になつてるならこの位いくらでも言つてあげる。私はまだギルド受付嬢の見習いだからドンドルマのハンター事情のすべて

を把握はできていないけど、これだけは言えるわ。まだ駆け出しのあなた一人欠けてもドンドルマは何も支障はないってこと」

「っー」

「でもね!」

そういうとヨミはカタンとカウンターから出ると座り込むヤクモの前までゆつくりと歩み寄り、その両肩を思い切りつかんだ。

「今その「カムラ」って場所には、ヤクモ<sup>あな</sup>を待つてる人がいるんでしょ? 信じて待つてる人が。だったらこつちのことは気にしないで。ギルドの依頼はいつでも受けられるけど、この依頼は今じゃないと受けられない。もし行かなかつたら一生後悔するよ、多分」

「ヨミさん」

「いつもはほかの人を優先的にサポートしてるんだから、たまにはわがまま言っても罰は当たらないわよ」

ニコつと笑みを浮かべてからポンとヤクモの肩を軽くたたくヨミの言葉を受け、もう一度手紙のほうに視線を移した。

「……そう、ですね。こんな私でも頼ってきてくれている。その期待には応えなければいけませんね」

「こつちのことは先輩方にどんと任せておけばいいの」

「そうさせていただきます。ありがとうございます。おかげで決心ができました」

「いいって、同い年のよしみ。じゃあ返事は出しておくよ。ヤクモちゃんも準備が出来次第急ぎの馬車を手配したからそれで「カムラ」に向かってくれる？今から行けば指定の時期には間に合うと思うから」

「ありがとうございます。ではすぐに支度をしてきます」

「……ヤクモちゃん」

お礼を言つて準備のために自室へ帰ろうとするヤクモをヨミがふと呼び止める。

その表情は先ほどの自信に満ちた明るい表情とは一変し、声色も含めて不安そうな表情を向けていた。

「……………」

「……ふふ、ご安心くださいヨミさん。私はそう簡単にいなくなったりしません。またここに帰ってきます。それまで待つていてください」

それだけ伝えるとヤクモは返事も聞かずにギルドを飛び出した。

途中入れ替わりで入ろうとしていた先輩のハンターと危うくぶつかりそうになって思わずぺこりと頭を下げる。

それからすぐに身支度を整えてヨミが手配した「カムラ」一行の荷車へ乗り込んでドンドルマを発つたのだった。

当時のことを振り返りながらふうと一息つく。

「(……あの出来事があつたから今の私があるのですね)」

夜風によつて湿つていた髪もある程度乾き始めたころ、完全に乾ききる前に1度軽く櫛を通して乾いたときにごわつかないように注意を払う。



それから櫛をベッドわきのテーブルへ戻し、そのまま布団の中へもぐりこんだ。久方ぶりのベッドの感触に身を任せ、その日は深い眠りについた。

………事件が起きたのはそれから数日後の事だった。

## 5 追憶の巨戟龍③

ドンドンドン。

「ヤクモさーん！ヤクモさーん！起きるっスよヤクモさん！」

その日は、唐突に玄関の扉をけたたましく叩く音によつて始まりを迎えた。

まだ登りかけの太陽は東側から光を差しており時間としても朝方という方が良い時間帯。

眠い目をこすりながらモゾモゾとベッドから這い出すと、寝巻きのまま玄関の扉を押し開けた。

それと共に再び扉を叩きかけていたレマと目が合った。

「ふわあ……………あ。おはようございます。それでどうしたのですかレマさん、珍しく……………ふあ……………お早い起床ですが……………」

「おはようございますツスヤクモさん。珍しくは余計ツス。つて今はそんなこと言つてる場合じゃないんスよ。支度してすぐに来て欲しいっス」

「へ？しかし本日狩りに同行する予定は入っていないはずですが……………」

「それが狩りの話じゃないんスよ。ちよつと砦の方が大変なことになってるんス」

「砦?」

「そうツス。私は先に行っているんで後から来てくださいツス。場所は砦の第2保管庫ツス。……………見たらきつと驚くこと間違いなしツスよ……………」

「?」

いつもの彼女からは考えられないほど真剣な表情で見つめ返してくるレマに何やらただならぬ雰囲気を感じた八雲は、頭の上に疑問符を浮かべながらすぐに部屋へ戻って型崩れを起こさないように丁寧に掛けておいた装備を手を取った。

迎撃砦。

## 第2保管庫。

「……………これは。酷い有様ですね」

見るからに無惨な姿になってしまっていた弾薬保管庫の前で、瓦解したレンガを拾い上げながらヤクモが呟く。

強固なレンガ造りだった壁は物の見事に原型すらも留めていないほどに崩れ、庫内も相当荒らされている形跡も見受けられた。金属製の棚は大きくひしゃげ、足元にはバリスタの弾が足の踏み場もないほど散乱している。

ドンドルマのハンターズギルドに所属しているメンバーが慌ただしく瓦礫の撤去や備品のチェックに奔走している中、ヤクモは軽く周囲を見渡すとその中から1人の人物を見つけて歩み寄っていく。

「おはようございます。ギルドマスターさん」

「……………えはそつち、お前はあつちのバリスタの棚の修復だ。瓦礫の撤去も急げ。壁の崩れには……………つと、おお、ヤクモかよく来てくれたな」

腕組みをしながらてきばきと多方面へ指示を出すがつしりとした体形の男性はヤクモの言葉に反応すると視線を彼女のほうへ向けた。

「いったいなにがあったのですか？」

「ああ、それに関してはまだはつきりしてない。現在急ぎ調査中だ」

「そうですか。早く原因が判明することを願います」

「はあ。お前もでかくなつたもんだな。ガハハハ」

「あ、いえ、す、すみませんそんなつもりでは………つつく!!」

いきなりのことでギルドマスターの冗談を思い切り真に受けてしまい、咄嗟に否定しようとして手を振つたのだが、そのせいで持っていたレンガの欠片を足の上に落としてしまった。

ちようど左足の甲にクリーンヒットした欠片が転がり、足元にあった黒い水たまりにパシヤンと落ちていく。

思わず少しだけ涙目になりながら足をさするヤクモ。

その肩をポンと叩きながらギルドマスターが笑う。

「冗談だ。相変わらずで安心するな、お前の反応は。見てて飽きないぞ」

その一言を聞いた途端顔から火が出るのではないかというほど熱を帯びていくのを感じてしまう。

「くくっ……………勘弁してくれませんか。ふう……………コホン。にしても、これだけ保管庫が大破しているにもかかわらず爆発痕のようなものは見当たりませんね。保管庫にはバリスタの弾の他に爆発物である大砲の弾も安置されていたはずです……………。これほどの崩壊であれば弾の1つや2つは少なからず爆発してもおかしくなかつたような気がします」

まだ少しジンジンと痛む足に耐えつつ立ち上がり、軽く涙を拭ってから顎に手を当てて思考を巡らせる。

そんな様子を見たギルドマスターは「やはりか……………」と言いながら大きくため息をついた。

「……………それがな」

「?…なにか私変なこと言いましたか?」

.....

「え!? 荒らされた庫内に大砲の弾の残骸が見当たらない、ですか!? そ、そんなことつて有り得るのですか!」

「俺も初め報告を受けた時は自分の耳を疑ったものだが………現実にも目の前で起こっちゃうてるからなあ。この状況を見ちまったら嘘だ妄言だと切り捨てることなんて出来ねえよな………」

勘弁してくれ………と言いつつギルドマスターは後ろ頭をガリガリと掻きながら悪態を突く。

正直ヤクモ自身も今日の前の状況を信じきれない程だ。

「いや、それにしても大砲の弾ですよ? 一つでもかなりの重量の弾ですのに、それが全て、しかも不発のまま………。それって、普通に考えて変ですよね」

そもそもこの迎撃砦の保管庫に保管されている大砲の弾はこのドンドルマが対巨大

モンスターを想定して設計されている都合もあり、高々1発の弾を運ぶのでさえ相当な労力を必要とするほどの重量と大きさを誇るほどである。

その弾が保管庫には第1第2合わせて少なくとも約100発以上の備蓄があったはずなのだ。

盗むにしてもたった1晩の間に綺麗さっぱり跡形もなく消し去ることなんて……出来るのだろうか。

「だろ？ やっぱりヤクモの嬢ちゃんから見てもそう思うよな。しかも、こうなっちまってるのはなにも第2保管庫だけじゃない。砦の地下にある予備の保管庫は何とか無事だったようだが、第1保管庫はここと同じ状況らしい」

「はあ……。しかし一体誰が……」

「『誰』……なんスカね〜コレ？」

ヤクモのつぶやきに対して反論しつつヤクモよりも先に現場へと到着し、件の第1保管庫の方へ状況を見に行っていたレマが会話に参加する。

「正直、人間業とは到底思えないんすよね……………」

「モンスターの仕業、とても言いたいのか？ レマ」

「あくまで可能性の1つつすよ。私だってモンスターにそんなことが出来るとは思っていないっす。そもそもこの砦だってラオシャンロンやシエンガオレンみたいな特殊な



ヤツ以外のモンスターは侵入することすら不可能じゃないっすか。仮に入っても爆発した痕すらも残さずに消すなんて無理っすよ」

頭の後ろで指を組むレマの言葉も若干ため息混じりになってきていた。

「そうですね。確かにその線はかなり薄いでしょう」

「わかっている。となれば盗賊の類の仕業が濃厚になるな。これほどまで派手に動いたとなると規模はそこそこ大きいはずだ。なぜならあの量の大砲の弾を運んでいるわけだからな。全く、大砲の弾なんぞ盗とってんで何をするんだ？他の街や村にでも売りさばく気か？」

厄介事を増やしやがってと愚痴をこぼしたギルドマスターは大きく息をついてから作業を進めるギルドメンバーに向けて休息の指示を飛ばすと、再びヤクモとレマの方へ向き直った。

「さて、そうと決まれば容疑者の件はこちらで調べておくとしよう。あの量だ、まだそう遠くへは行ってはいないはずだ。それからヤクモ、レマ、お前たちは第1保管庫の方に行って復旧作業の手伝いをしてくれ」

その言葉にレマが小さく呻いた。

「うえ、わ、私達もツスか？」

「当たり前だろうがお前。そもそもハンターとギルドは互いに手を取り合っってなんぼ。

いつもはお前達の狩りの支援をしているんだからこういう時くらい力を貸してもらわねえと釣り合いが取れねえつてもんだ」

「うぐ……………正論」

「分かったらとつと第1保管庫の方にむかえ。復旧は迅速に、だからな。ああ、それともし作業中に素材が不足したらお前達に調達しに行ってもらうからな。復旧作業が終わるまでは急な依頼にも対応出来るようにしておけよ」

「それもツスカ!?うう……………頑張るっス」

「承知致しましたギルドマスターさん。それか、早めに足りなくなりそうな素材があればリストアップして頂ければ集めに行ってくださいよ」

「ん、ああ、そうだな、やはり足りなくなつてからじゃ遅いな。早めに集めてきてもらうとするか。悪い、リストアップしておくから明日の朝方街の酒場集会所に来れるか?その時に渡す」

「わかりました」

「うむ、では頼んだぞ」

「はい」

ヤクモは短く返事を返してからぺこりと一礼すると、グダーつと項垂れているレマの肩を押しながら大破した第1保管庫の方へ足を進めるのだった。

## 5 追憶の巨戦龍④

ここで一気に距離を詰めて……

「はっ!!」

後ろでひとつにまとめあげた黒い長髪が砂原を吹き抜けていく風に乗り、ゆらりと優美に靡く。

ギラリ快晴。

太陽の光が燦々と降り注ぎ、本日の砂原はいつもよりも少し気温も高くなっており額に汗をにじませたヤクモが腰あたりで太刀を構えながら走りこむ。

その足音に気づいた甲殻種の赤い体軀がぎちぎちと音を立てながら体を彼女のほうへゆつくりと向き直した。

そして、真正面。

モンスター目の目と鼻の先まで接近したヤクモからの追撃を迎え撃とうと赤い甲殻種が左右の鋏を振るい、自分を討たんとするハンターを払いのけようと振り払う。

しかしその鋏は無情にも空を切った。

左右の鋏がヤクモに衝突する直前に上空へ向けて一気に翔蟲の張力を利用して飛び

上がったからだ。

空中でくると体を回転させて器用に体勢を変えながら背後へ回り、着地とともにヤクモの握る太刀『たまのをの絶刀の斬振』が飛沫を上げ練気を纏う。

まるで蟹のように発達した足に向けて体ごと回転しながら水平切り、それから即座に太刀を持ち替えて突きにつなげ、刃を足の関節部分に滑り込ませたらそのまま一気に体を切り返して刃を上に向けて切り上げる気刃無双斬り連携へとつなげた。

その一撃によって甲殻種の細い左足の一本がバキンと音を立てながら斬り落された。おかげでバランスを崩し、地面に倒れていく。

予想外の衝撃と崩れたバランスにわけもわからずもがく様子を視界に収めながら深呼吸を一つ。

それから一度ゆつくりと目を伏せてすでに本日何度目かの黙禱をささげると、すぐにカツと目を見開いて翔蟲を利用して上空へ舞い上がる。

「どうか、安らかに……」

空中で太刀を上段で構え、重力による落下の力を利用して顔めがけて太刀を思い切り振り下ろした。

兜割り。

弱っていた体にバランスを崩されて動けない状態にあるむき出しの急所へ向けて放

たれた会心の一撃によって対象はぎちぎちと何かがこすれあう音を響かせながら最後に残っていた命の生命線がこと切れていった。

ズサツと力なく倒れる巨体を前にゆつくりと立ち上がりながら血払い。

くるりと背を向けながら手慣れた手つきで太刀を振りながら最後に腰の鞘へすると戻していく。

「私たちの出会いも一つの運命<sup>さだめ</sup>。そして、別れもまた同様。めぐりゆく輪廻の中でいつの日か私の灯<sup>いのち</sup>が消えることがあれば、そのときは地獄でもう一度会いましょう。ですから、今はしばらく。お休みください。南無……」

モンスター<sup>モンスター</sup>の亡骸のほうへ再び体を向けてこのエリアへ来るまでに摘んできていた白い花を献花して律儀に一例をした。

「あなたの生きた証、ありがとうございました」

そんな一言を添え、ゆつくりと手を離しながら瞳も開いていく。

目の前には今しがた討伐した赤い甲殻種、盾蟹『ダイミヨウザザミ』の亡骸が倒れ伏しておりその近くにはきらりと光る真珠も転がっていた。

腰から剥ぎ取り用のナイフを抜いて傷の有り無しを見分けながら必要最小限の素材だけを選別して手早く解体していく。

同じモンスターだとしてもその成長過程や生息環境によって危険度はピンキリと

なっており、比較的若い個体や環境の影響で肉質がほかの個体よりも脆弱な個体は『下位個体』と言われ、逆に厳しい環境で育ってきた影響等によりほかの個体よりも耐久力が高かったり肉質が固い個体は『G級個体』と呼ばれて幅広く分類されている。

こちらのほうはギルドからの直々の指名もしくは相応の実力があると判断されたものにしか討伐許可が下りないため、危険度は折り紙付きとなっていた。

一応今回ヤクモが相手をしている個体もギルドマスター直々の指名で『G級個体』の討伐となっている。

岩復興のための素材集め兼資金集めを兼ねた依頼となっており例の『G級個体』と称される個体が多く確認されている狩場となっていた。

そんなことよりも剥ぎ取りを。

重殻の傷は比較的少なく場所を選べば二か所ほどの部分ははぎ取れそうだ。

剛爪は……残念ながら気刃乱舞の時に集中的に攻撃した影響か深い斬撃痕が刻まれており、使えそうにない。

堅竜骨も似たようなものか、残念。

そういうえば、黒真珠も見つけたことを忘れていた。

拾い上げて軽く砂を払ってみると普通の物に比べて光沢が違う。

純度が高いのだろうか。

とりあえず資金調達にはもってこいであることには変わらないだろう。

こんな調子でモンスターは1体討伐してもそのすべての素材を使用できることは本  
当に稀であり、たいていの場合には数か所の傷が比較的少ない部位から切り取って頂戴す  
ることが多い。

「ふう、これで5体目の討伐完了ですね。盾ダイミヨウザザミの重殻からと剛爪つめがこれでちょうど半分く

らい集まりました。高純度の黒真珠を抱えていたことは運がよかったです、素材的に  
はまだまだギルドマスターさんが指定した料まではまだ足りなさそうですね。はあ。  
一度戻りましょう。レマさん達のほうは順調でしょうか」

素材の剥ぎ取りを終えるともう一度ダイミヨウザザミ盾ダイミヨウザザミの亡骸へ向けて手を合わせるとそれから  
ふう吐息をついてから踵を返してベースキャンプのほうへ歩き出した。

今回の狩猟はいつもの狩猟に比べてそこそこ長期にわたる狩りとなっており、砂原に  
おいてモンスターがいつもよりも多く出現しているとの報告があつて急行した次第で  
あつた。

そのついでにギルドマスターから頼まれた素材集めも並行して行おうとのこと。現  
在ヤクモ、レマ、それから先輩のハンター2名を加えた計4人で現地入りしており、4

人それぞれ手分けして大量発生したモンスターの討伐と鉱石類や採集アイテムの回収を行っていろいろの話となっている。

今回大量に発生しているのは盾蟹『ダイミヨウザザミ』と岩竜『バサルモス』の2種類だ。

バサルモス  
主に岩竜のほうは先輩ハンターの2人が対応し、残りの盾ダイミヨウザザミ蟹のほうをヤクモとレマで担当する手はずになっている。

ギルドマスターからはモンスター素材の流通を促すためにモンスターの種類は問わず相当量の依頼を受けており、それに加えて部材同士の接着に使用するセツチャクロアリや保管庫の破壊された棚の修復に使用するマカライト鉱石にエルトライト鉱石、復旧に伴って道具の加工や製作に必要なピュアクリスタル、ノヴァクリスタル、燃石炭、それから小型モンスター大型モンスター問わず素材の確保等々……。

依頼された素材の入手事態はそこまでむつかしくはないものばかりであるが、その反面単純に量が多い。

1人、2人程度の人数ではとてもではないが集められる量ではなくこの事態には今現在ドンドルマに滞在しているハンター全員で対応せざるを得ない状態となった。

都市の中でも上位に入るほどの大きな都市であるドンドルマには現在10人ほどのハンターが滞在しており、ヤクモ、レマを含む4人が砂原に、ヤクモとレマの後輩にあ



たるハンターを含むハンター3人はラティオ活火山で鉱石類を集めに出張っている。それから残りの3人で雪山ヘクリスタル系の鉱石を中心にギアノス、ブランゴ等の小型モンスターに加えて最近ではティガレックスの目撃情報も多数寄せられていたことからそちらの対応のほうも同時に消化していつている。ティガレックスの素材であれば必要としている人物も多いため需要としても申し分ないだろう。

岩陰に隠れつつクーラードリンクを一口煽り、周囲の警戒を緩めないまま口元をぬぐい素材とアイテムで膨れ上がったポーチの中に飲みかけのクーラードリンクを押し込んだ。

ベースキャンプ。

周囲にモンスターの気配がないことを確認し、ヤクモはベースキャンプのテントが張つてあるエリアへ足を踏み入れた。

彼女の到着に先にベースキャンプへ帰投していたガンランスを担ぐ『バゼルX』装備に身を包んだ女性ハンターとヘヴィボウガンを携えた『陸奥・極』装備一式を着込んだ青年ハンターが出迎えてくれる。

「ヤクモ戻りました」

「おつかえりくヤクモちゃん。首尾のほうはどう？」

「はい、順調に素材の回収とモンスターの討伐は進んでいます。この調子で行けば目標達成は時間の問題になるかと」

「そつかそつか、僥倖僥倖。あ、ポーチの中身あふれそうならアイテムボックス<sup>ハ</sup>中に突っ込んでおきなよ？見る感じパンパンでそれじゃ動けないんじゃない？」

「そうします。それから、レマさんは戻ってきましたか？ここに来る途中すれ違わなかったの？」

ヤクモの問いにボウガンの弾丸を黙々と調合していた青年がふと手を止める。

「レマならまだ帰ってきていない。あいつのことだ、また忘れてるんじゃないのか？」  
「……それは確かに」

「そんなら私発煙筒打ち上げてくるよ。何かあつたら発煙筒、つてね」

そう言い残すと『バゼルX』装備の女性、エリンは小柄な体で座っていた岩場からぴよんと飛び降りると発煙筒をもってパタパタとベースキャンプから出ていった。

あの体形で重そうな装備を身に纏ってあれほど身軽に動くことのできるエリンに感心しつつ集めてきたアイテムをアイテムボックスの中にしまいつつ携帯食料を一口。テントの中ではちみつドリンクを入れて戻ると、簡易的に作られた椅子に腰かけて一息ついた。

それからしばらくしてからベースキャンプのすぐ隣のエリアから赤い煙がまっすぐ空へ向かって立ち上る。

「……」

「……」

ベースキャンプに残された二人の間に沈黙が訪れる。

寡黙で表情があまり表に出ることが少ないことで有名な『陸奥・極』装備の青年、コハクが弾丸を調合する音だけがしばらくの間ベースキャンプ内に響いていく。

「ああ、そうだ、ヤクモ。聞いておきたいことがある」

「?はい、なんででしょうか」

「困っていることはないか?」

「困っていること、ですか。そうですね今のところは特にこれといっては……」

「そうか」

短い会話を終えると再び沈黙が訪れ、弾丸調合の音だけがこだまし始める。

ヤクモもヤクモでほかの人に比べると積極的に他人と会話できるタイプではない。えに、コハクのほうに至ってはそもそもその口数が少なくコミュニケーションは苦手。下手な人物だ。当然会話は続いていくことなく最小限の問答だけを残して終了してしまふ。

そうはいっても、コハクとてただの気難しいというわけではなく先の会話からも察することができるよう本来の彼は他人思いの優しい性格をしている。そっけないようにも見えるがこれが彼なりの気遣いであることはヤクモも理解していた。

「コハクさんのほうは大丈夫ですか?私でお手伝いできることがあればご助力いたしますか?」

「俺のほうか?俺のほうも今は特に手伝ってもらうことはない」

「わかりました」

それだけ言うとコハクは再び黙々と弾丸調合のほうに集中し始めた。

そんな時だった。

「はあ、はあ!!コハク君!!!レマちゃんが負傷した!治療お願いできる!!!」

『ジャナフ・S』装備のそのほとんどは焼け焦げた跡が覆い、肌が露出した部分にもところどころやけど痕も見られて意識がもうろうとしているらしいレマをおぶさりながら慌てて駆け込んできたエリンの叫びがベースキャンプ内に響き渡ったことで、一気に緊張が張り詰めることとなった。

## 5 追憶の巨戟龍 ⑤

「レマさん!!」

「……………」

ヤクモが声を上げるのとほぼ同時のタイミングで弾丸調合を行っていたコハクが素早く行動を起こす。

レマをおぶさってきたエリンが息を切らせながらベースキャンプの簡易テントの中へ入り、ベッドの上へレマをゆつくりと寝かせた。

それから一緒にテントの中へ入ったコハクがエリンとともに手慣れた手つきでレマから必要最低限の装備を外していく。

アームガード、レッグガード、メイルとヘルム。

さすがにコイルだけはエリンに止められていた。

一通り装備を取り外したコハクは一度レマの全身を流し見てからわずかに眉を寄せた。

「これは……………そこそこ大きな爆発にでも巻き込まれたのかもしれないな。右頬と首

筋、それから両足の太ももあたりの肌が露出していた部分にやけど痕。そして両腕の裏側。ここが特にひどい、おそらく爆発に気づいて咄嗟に両腕で顔を守ったのだろ。うな。そんな痕だ。だが幸いなことに皮膚の表面を短時間で焼かれたことで腕の筋肉深くまで熱は入っていない」

「爆発う!?!この依頼での目標モンスターに爆発系の攻撃してくるモンスターなんていたっけ?」

コハクは緊急事態とはいえレマの体をためらいなく触れていきながらやけどの分析をしていく。

エリンもその隣でコハクの手を目で追いながら腕を組んだ。

それに対してコハクが小さく首を振る。

「いや、依頼内容にあったモンスターにそのような情報はない。だが、今はそれを議論している暇はない、エリン」

「わかっているって、すぐに準備してくるよ。ヤクモちゃんちよつと手伝って〜」

「え?あ、はいっ!」

「必要な材料は俺のアイテムポーチの中にそろっているはずだ」

2人の先輩ハンターのあまりの手際の良さに呆然としてしまっていたヤクモはエリンの一言で我に返る。

「大丈夫？」

「はい、なんとというかいきなりの出来事で驚いてしまつて……」

「そつか、無理もないよね、同期の子なんだし。何だったら休んでもいいよ。準備なら私一人でもできるから」

「いえ、私にも手伝わせてください」

「うん。わかつた。それじゃあコハクくんの……あそこの弾丸の調査途中で放置してある道具の近くにあるポーチの中から薬草と流水草を持つてきてくれる？ 私は鉢と布もつてくるよ」

「布？」

「うん、そう。やけどの応急処置にはよく使うんだ。ともあれ、今言つた材料お願いね」

「わかりました。すぐに準備します！」

「よろしくね」

ヤクモは若干浮かんだ疑問点をすんでのところで飲み込み、エリンから言われた材料を求めて先ほどまでコハクが座っていた付近にあるアイテムポーチを開けて中を確認する。

中には弾丸の素材のほか薬草も結構な量は言っていた。



とりあえずどのくらい必要なかわからないのである量はすべて持っていていこう。

あとは流水草、これも念のためポーチに入っているものすべて持っていこう。あつて困ることはないだろうし。

しかし、やっぱり気になる物は気になってしまふ。

「流水草……葉の部分に水分を多く含んだ植物。確かにこれはやけどに効きそうではあります。どうして薬草なのでしょう、回復をするなら回復薬や回復薬グレートを使用するほうが効果の期待はできると思います……。何か理由があるのでしようか……」

材料を抱えながら頭に疑問を浮かべていると背後から声をかけられた。

「材料見つかった？ うん、うん、いいね。薬草に流水草。よし、それだけあれば十分だね。私のほうも準備できたから急いでやっちゃおう。材料かして〜?」

声をかけられたことに反応を返すよりも早くエリンはヤクモの手元にある材料を見ながら何度か頷くとその場で持っていた調合用を使用する鉢を置くとヤクモの手元から薬草と流水草をだいたい同じ量とると鉢の中へ入れると一気に棒ですりつぶし始めた。

それも、ものの数秒で流水草の水分と薬草の青臭いにおいが混ざり合って濃い緑色の液体が完成した。

「手際、いいですねエリンさん」

「まあね、たまあにこういうこともあるからさ……つと完成。早くコハクくんのところにもっていかないと」

「あ、はい、そうでしたね。いきましよう」

短い会話の後エリンが材料をすりつぶした鉢を持ち上げつつコハクとレマのいるテントの中へ。

中ではコハクがレマの脈に手を当てながらとところどころ焼け焦げた『ジヤナフ・S』装備に視線を落としながら片手を顎に指をあてて考え込んでいた。

「コハクくん、作ってきたよ。足りる？足りなかったらまた作ってくるよ」

「エリン。ああ、助かる」

鉢と布を受け取ったコハクはすぐに薬草と流水草の混合液を適当な大きさにちぎった布にしみこませると、そのまま患部へ貼り付けていく。

「あの……」

その様子を見ながらヤクモは先ほどまで考えていた疑問を何気なくぶつけてみる。

「?どうした?」

「いえ、ちよつと不思議に思ったことがあります」

「なんだ?」

コハクは布に薬をしみこませて患部へ貼り付け、手を止めないままコハクが答えてくれる。

「なぜ、わざわざ手間をかけてまで薬草と流水草の調査を行ったのでしょうか。レマさんの状態からして急を要する案件だったはず、であるならばわざわざ調査の手間をかけるよりも回復薬や回復薬グレートを用意して患部へ貼り付けるほうがよっぽど効率的だったと思うのですが……」

その問いに隣で椅子に腰かけながら見守っていたエリンがぶふつと小さく噴き出した。

「わ、私、そんなに変なこと言ったでしょうか……」

「いやまあ、ごめんごめん。このやり取り見たことあるなうって思ってたさ。ね、コハクくん？」

「……そうだな」

ふうと一息ついたコハクは空になった鉢をエリンに差し出しながら視線をヤクモのほうに移しながらゆっくりとした口調で回答を話してくれる。

相変わらず表情に大きな変化は見られないが。

「確かにただ体力の回復だけを目的とするならヤクモの言うように回復薬や回復薬グレートのほうが優れているのは確かだ。しかし、いくら優れているとはいっても欠点は

存在する。何かわかるか？」

「欠点？」

わずかに眉を寄せて考え込むヤクモの肩をエリンが笑いながらポンとたたいてテントから出ていったことで、テントの中にはヤクモとコハク、負傷中のレマが残された。

欠点。

正直に言えば回復薬や回復薬グレートに欠点があるとは考えられない。

小瓶に入っていることによりポーチの中であまり場所を取らず片手で飲むことができる上に即効性も見込める。対して薬草は即効性こそあるものの効果に関しては回復薬や回復薬グレートに劣り、かつポーチの中でもかさばる上にかなり場所をとる。

『回復薬は片手間に飲めて効果も高く即効性があるのに対して薬草は手間がかかる上に飲んでも大した効果が見込めないのになぜ？』といった顔だな」

「……」

考えをびたりと言いついで当られて若干肩を落とすヤクモ。

「まあ、対して気にすることでもないのだけだな。回復薬の欠点、それは、その利便性の高さだ」

予想外の答えにヤクモが瞠目する。

「回復薬は体力の回復や即効性に優れてはいるが、その効果が最大限に発揮されるのは

経口摂取した場合に限るということだ。その性質があるから今回のようにやけどのよ  
うな外傷にはほとんど効果が発揮されることはない。その点薬草であればすりつぶし  
て流水草の水分と合わせることでよって切り傷やかすり傷、今回みたいなやけどや虫刺  
され等の外傷に対して高い効果を期待することができる。あくまでも応急処置の範囲  
を出ないが、それでも狩場から街へ帰投するまでの時間患部の保護と殺菌効果は十分果  
たしてくれる。お前も覚えておいて損はないだろう」

「……………」

「物は使いよう、ということだ」

薬液を染み込ませていない布を包帯代わりに患部に巻き付けていくコハクがレマか  
ら視線を外すことなく話してくれる。

ちようどそんなタイミングで新しく薬液を調合しに向かっていたエリンがテントの  
中に戻ってくる。

「そうだよ。でも、そんなことを思いつくのなんてコハクくん位じゃないと無理だつ  
て〜」

「どうだかな」

エリンから新しい薬液を受け取りつつ残りの患部の応急処置を進めていくコハク。

相変らず手際は良く、患部へ布を貼り付けて手早く包帯を巻いていく。

その動作も1つの場所をものの数秒足らずで終わらせてしまっていた。

「凄いです、あつという間に応急処置が……………」

「これくらいならな」

「コハクくんは普通のハンターじゃないんだよね」

「エリン」

「いいじゃないじゃない減るもんじゃなし。コハクくんはモンスター狩るよりもフィールドの植生や鉱物の研究とか、あとはモンスターの生態系の観察みたいなフィールドワークが大好きなんだよね」

「放っておけ」

「フィールドワーク、ですか」

「はあ、そうだな。俺はこんな性格だ、複数人でモンスターに対峙するよりは一人で黙々と植物や鉱物を扱っているほうが性に合っているんだ。その過程でモンスターを狩ることは多々あるが、それはまあ仕方ないともいえる」

「だよね。でもそのおかげで色々助けてもらって来たんだよ」

「毎回無理やりパーティ編成してから声をかけてくるのだけはやめてほしいと何度も言ってるんだが……………」

ため息をついて頭を抱えるコハクを見ながらけらけらと笑うエリン。

「仲がよろしいのですね」

「……勘弁してくれ」

そんな調子でレマの応急処置が完了し一通り使用した道具類の掃除を済ませたヤクモは、近くの水場からベースキャンプのテントへ。

テントの中に備え付けられている棚に道具を戻し終えると、ちようどそのタイミングでコハクと今後の打ち合わせを行っていたエリンから声をかけられた。

「ヤクモちゃん、ちよつとお話し〜い？」

「はい。それで、どうしましょうか。負傷中のレマさんをこのままにしておくわけにはいきませんし……」

「うん。そうだね〜。だから今コハクさんと相談してね、今回はこのまま切り上げようってことになったよ」

いつもの朗らかな雰囲気は鳴りを潜め、間延びしていた語尾もなくなりピリツと緊張の糸が走っていた。

「そう、ですか……」

「気に病むことはない。今回はほかの狩場に出ている連中との共同任務だ。それに、これは早急に調査が必要な案件だという結論に達した」

「どういふことでしょうか」

「それは私から説明するよ。今回の依頼は砂原に大量発生した盾ダイミヨウザザミ 蟹と岩竜バサルモスの掃討。結果的には十分依頼完了といっても差し支えない数は討伐しているんだ。最近では目標のモンスターとの戦闘中に突然ほかの狩場から移動してきたモンスターが乱入してきたりすることが多いことは知ってるよね？そんな中、レマが負傷した。それ自体は何も不思議なことはないんだけど、問題はその負傷の原因。コハクくんの見立てによれば爆発によるやけどとおそらく爆風による衝撃による意識不明。……なんか変だと思わない？」

「そう、ですね。爆発を伴う攻撃のできるモンスターには限りがありますから。しかし………」

「ああ、俺たちは4人いてなおそのどの個体の確認も取れていない。砂原に出現報告が上がっている爆発系の攻撃を仕掛けてくるモンスターは爆鱗竜バセルギウスと炎テオ王龍テスカトルの2種類が主になるが、もしテオ・テスカトルが乱入していたのならここまでフィールドが閑散としているのはおかしい。それはバセルギウスでも同様だ。少なくとも痕跡すらも見つからないのは明らかに異常だと言わざるを得ない」

「そう。ということとはそれ以外の要因があるってことになるの。あとこれ」

そこまで言うときエリンはもともとクーラードリンクが入っていたであろう小瓶に入った黒い液体を取り出してヤクモの前に差し出した。



量こそほんの数ミリリットル程度しかないがどろりとした粘性の液体をしている。

「なんか、見おぼえない？ 砦のところにあった黒い水たまりに似てない？」

小瓶を受け取ってよく観察する。

確かに例の大砲の弾盗難事件の現場となった迎撃砦に残されていた黒い液体そっくりだ。

「確かに、これ、いったいどこで」

「レマの装備についてたの。なんか、偶然にしては出来すぎてる気がするんだよ」

「それには俺も同意見だ。一刻も早く鑑定に回すべき案件だ」

「わかりました。お二人の意見に賛同します」

ヤクモがそういうと今まで真面目な顔で淡々と語っていたエリンが一気に表情を崩して両手をパンとたたいた。

「ま、そんな感じ。ほかのみんなにはちよつとごめんなさい。うって感じだけ。想定外の事態が起こっちゃったら仕方ないよね」

満面の笑みを浮かべながら頭の後ろで指を組むエリン。

「必要最低限以上の仕事は完了している、文句は言われまい」

「どくだらうね。あのギルドマスターだよ？」

「……」

「いや言われませんよ、多分……」

目を伏せて黙り込んでしまうコハクに続いてフオローを入れようとするが、過去の出来事を思い出したヤクモは思わず語尾を濁してしまった。

特別任務『盾蟹と岩竜大量発生』。

依頼完了。

ヤクモ、エリン、コハクの3人は負傷中レマを連れてドンドルマに帰投した。